

ソフィア・ベル：元中国政府関係者への  
インタビューに基づく

# 紅の帳

THE RED VEIL

元政府高官の証言：娘が信仰ゆえに殺  
された時、父は目覚めた

# 紅の帳

(THE RED VEIL)

元政府高官の証言：娘が信仰ゆえに  
殺された時、父は目覚めた

ソフィア・ベル(Sophia Bell) 聞き書き

(米国に亡命した元中国政府高官へのインタビューに基づく)

---

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を  
保有します。無断複製を禁じます。

# 編集部より

本書は、実在の物語、出来事、背景に基づいています。  
しかし、個人のプライバシーを尊重し、特定の方々への影響を避けるため、登場人物の名前や個人を特定しうる一部の詳細は、変更、簡略化、あるいは文学的な再構成がなされています。

本書の一部は、当事者の個人的な視点から語られており、その時々 of 彼ら自身の体験と認識を反映したものです。  
これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の公式な立場と一致するものではありません。

文章表現については、編集部が必要な修正を加えてはありますが、語り手本人を尊重し、物語の精神と躍動感を保つため、その素朴な味わいと本来の語り口を最大限に保持するよう努めました。

## 編集部



---

# はじめに

人は誰しも夢を抱いて生きています。ささやかで、ありふれた夢。あるいは、一つの国家、一つの時代の壮大な夢。しかし、強大な「中国の夢」の設計者であった人物が、その夢の実現のために、システムが支払い不可能な代償——自身が最も愛する娘の命——を要求していると気づいた時、一体何が起こるのでしょうか。

理想の城が崩れ落ち、自らが選んだ道への信念がすべて灰と化した時、人は何を頼りにすればよいのでしょうか。権力の論理や唯物論が、あまりにも大きな苦痛の前で無力と化した時、人は「なぜ」という問いの答えを、どこに見出せばよいのでしょうか。

『紅いヴェール』は、その問いへの答えを探す旅です。これは政治分析の書ではなく、一人の父親による痛切な告白であり、家庭の悲劇によって偽りのヴェールが引き裂かれた後の、真実とのありのままの対峙です。

主人公の歩みは「目覚め」の旅路です。かつて信じたシステムの正体を見抜くための目覚め。かつて否定した精神的な信念の力に気づくための目覚め。そして何よりも、絶望の淵を経験した後に、人としての価値を再び見出すための目覚めです。

読者の皆様には、単なる観察者としてではなく、一人の同行者としてこの物語にお入りいただき、真実の代償、権力という夢の儚さ、そして、いかなる暗黒の夜においても決して消えることのない良心の光について、共に深く考えていただければ幸いです。

**ソフィア・ベル** (Sophia Bell)

# 一日目

---

劉思遠（リュウ・スーユエン）：

（静かに頷き、かすかな笑みを浮かべる。声は低く、最初は少し躊躇いがちだ）

こんにちは、ソフィアさん。お越しいただきありがとうございます。ここは、まあ、見つけにくい場所だったでしょう？



**ソフィア・ベル:**

ええ、おはようございます、劉さん！

中心街からは少し離れていますが、私のような記者にとって、場所を探すのは大した問題ではありません…

あのう、この度のインタビュー、いえ…「インタビュー」という言葉は少し硬すぎますね。劉さんと THE LIVES MEDIA の読者の皆様との間で交わされる「心の内を分かち合う会」、そして私はその小さな架け橋にすぎない、そう呼ばせていただきたいのですが…この会をお受けくださり、本当に感謝しております。

**劉思遠:**

（熱心に耳を傾け、ソフィアを最初は少し探るような目で見ていたが、彼女の言葉を聞くうちにその眼差しは和らいでいく。彼はもう一度静かに頷き、顔に思索の色が浮かぶ）

「心の内を分かち合う会…」

（彼はその言葉の意味を噛みしめるかのように、そっと繰り返す）

ええ、ソフィアさん、その言い方のほうが…心地よく感じます。「インタビュー」では、まるで私が尋問の対象か、解剖されるべき出来事のように聞こえます。ですが、「分かち合い」には…そうですね、自発性と、誠実さが含まれていますね。

（彼はお茶を一口すする。窓の外に一瞬目をやり、再びソフィアに視線を戻す）

THE LIVES MEDIA…ええ、存じております。貴紙は多くの人々が口にするのを恐れたり、あるいは口にしながらなかったりする情報を伝え、多くの尊敬すべきことを成し遂げてくれました。おそらく、だからこそ私は…うーん…今日ここに座る勇気を持てたのでしょう。

（短い沈黙が流れる。彼は乱れた思考を整理しているかのような）

それで、ソフィアさん、この「心の内を分かち合う会」はどこから始めましょうか。私の人生も多くの曲がり角を経験してきました。中には…ええと…口にするのが容易ではないこともあるでしょう。ですが、努力します。安然（アンジェン）のために…そして、あの子のような人々のために。

**ソフィア・ベル:**

ええ、先だってメールでお送りした趣意書にも書きましたように、私どもは多くの国に記者ネットワークを持つ独立したメディアであり、全世界の読者に向けて発信しております…私たちは、真実、誠実さ、そして一人ひとりの内なる善性を引き出すことといった、普遍的な価値を目指しております…

それゆえに、私たちがあなた様についてご紹介いただいた際、THE LIVES MEDIA が読者に伝えたいと願うその素晴らしい価値を体現する、代表的なお一人ではないかと感じたのです…

あのう…では、そろそろ正式に始めさせていただいてもよろしいでしょうか？…

まずは気軽な質問から始めさせてください。アメリカでの約一年間、こちらの「空気」はどのようにお感じになりましたか？その…「いまいましい」資本家たちが汚れたドルを奪い合う、騒がしい市場のようでしたか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、どこか遠くを見るような、かすかな笑みを浮かべる。彼はしばらく自分の茶碗に目を落としてから顔を上げ、その眼差しは深くなる）

「騒がしい市場…いまましい資本家たちの汚れたドル？」

（彼は最後の言葉を繰り返す。その口調は嘲笑ではなく、むしろ吟味するかのようだ）

それは…そうですね…かつて私が別の環境にいた頃、よく耳にし、時には染められてさえいた言葉です、ソフィアさん。一つのレンズを通してしか世界を見ることが許されなければ、映し出される像もまた、その一色に染まるものです。

（彼は一旦言葉を切り、お茶を一口すする）

ここでの一年は…ええ、長すぎはしませんが、感じるには十分な時間でした。あなたがおっしゃる「空気」は…もっとずっと複雑です。確かに、慌ただしさも、競争も、人々が「アメリカン・ドリーム」と呼ぶ物質的なものに夢中になる姿もあります。時折、マンハッタンの雑踏の

中に立つと、私も圧倒され、その巨大な歯車の力強さを感じます。

しかし、あなたがおっしゃる「騒がしさ」があるとするれば、それは全く質の違うものです。うーん…それは、恐怖心から、あるいは他に道がないからと、這い上がるために互いを踏みつけなければならない、窮屈な籠の中での奪い合いではありません。ここで私が感じるのは、ある種の…自由です。追い求める自由、失敗する自由、そして何より、たとえそれが多数派に逆らうものであっても、自分が正しいと信じることを口にする自由、信じる自由です。

（彼の声のトーンが少し落ち、悲しげな表情がよぎる）

ここでの一年で私が最も強く感じたのは、「汚れたドル」ではなく、ええ…自由な一呼吸の価値でした。それは故郷では、私や他の多くの人々、とりわけ娘の…安然が…手にすることのできなかったものです。

（彼はソフィアをまっすぐに見つめる）

もちろん、どこにも天国などありません。どんな社会にも裏の顔があり、不公平があり、未完成な部分がありま

す。しかし少なくともここでは、人々はその裏の顔について公に語り、それを正そうとすることができ、明日にでも跡形もなく消されるという恐怖を抱かずにいられるのです。

それは単なる「市場」ではありません、ソフィアさん。それは、善人であれ悪人であれ、一人ひとりが自分自身を比較的ありのままに表現する機会を与えられた、もっとうずっと広大な空間なのです。そしてそれこそが、私が慣れようと努め、また尊んでいることなのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、理解しております。アメリカ式の西洋資本主義も「絶対的な模範」というわけではなく、星のように輝いて見えるものばかりではない…多くの負の側面も存在します…

ですが、本日はアメリカ社会について語るのではなく、その…太平洋の向こう岸にいる人々の人生、その運命についてお話を伺うために、こうしてお会いしているのですから…

**劉思遠:**

（静かに頷き、テーブルの上の茶碗に一瞬目を落とす。  
彼は両手を膝の上に置き、より困難な旅路に備えるかの  
ように、少し身を縮める）

おっしゃる通りです、ソフィアさん。アメリカ社会の長  
所短所を議論するためにここにいるのではありません。  
いずれにせよ、そこは私が人生のほとんどを過ごした場  
所ではありませんから。

（彼は顔を上げる。ソフィアを見るその眼差しは、先ほ  
どより重みを増している。ほとんど聞こえないほどの、  
軽いため息がもれる）

「太平洋の向こう岸…」

（彼は低い声で繰り返す）

うーん…そこにはあまりにも多くのものが詰まっていま  
す…喜び、希望、若き日の理想…そして、幻滅、苦痛、  
そして何もののにも代えがたい喪失。

（彼は少し黙り込む。適切な言葉を探しているのか、あるいは、こみ上げてくる感情を鎮めようとしているのかもしれない）

人生、そして運命…あなたがおっしゃるように。ええ、それこそが、私が分かち合いたいことです。私の話は脈絡がなく、時には感情に言葉を詰まらせることもあるかもしれませんが。しかし、努力します。なぜなら、真実は知られるべきだと信じているからです。とりわけ、自らの信念のためだけに、あまりにも多くの理不尽に耐えなければならなかった…善良で、罪のない人々についての真実は。

（疲労の色がにじむ瞳に、ある種の決意が宿る。彼はソフィアをまっすぐに見つめる）

さて、この長く悲しい物語を、どこから始めましょうか。そうですね…私なりに「中国の夢」を抱いていた青年時代からか、それとも私の人生と認識を根底から変えてしまった出来事からか。

**ソフィア・ベル:**



ええ。読者が物語を追いやすいように、まず、ご自身の背景について簡単にお話しいただけますでしょうか？その…お生まれになった場所、お仕事、そしてなぜアメリカに來られたのか…

**劉思遠:**

（静かに頷き、落ち着きを取り戻し、記憶を整理するかのように深く息を吸う。彼は一瞬窓の外に目をやり、そして向き直る。その眼差しはどこか遠くを見ているようだ）

ええ、ソフィアさん。皆さんが私の歩んできた道をより深く理解できるよう…ええと…かいつまんでお話ししましょう。

（彼は言葉を選ぶかのように、少し間を置く）

私は東部の沿海省にある、小さな田舎の村で生まれました。家は裕福ではありませんでしたが、まあ、両親は学問を非常に重んじていました。幼い頃から、私は学業の才能を見せ、常に学校で一番の成績でした。おそらくそのためでしょう、私は早くから地元で注目され、育成すべき「有望な若手」と見なされました。当時、そう見な

されることは、自分自身だけでなく、家族全員にとって大きな名誉でした。

私の学歴は、ええ、非常に順調でした。首都にある国内トップクラスの大学に合格し、当時、強大な国家を築くのに貢献できると信じていた学問——政治経済学と哲学を専攻しました。優秀な成績で卒業した後、私は大学に残り、講師となりました。それは私が研究と執筆に没頭し、博士号、そして教授の肩書を得た年月でした。

（彼は一旦言葉を切り、物思いに沈んだ表情が顔にはっきりと浮かぶ）

うーん…三十五、六歳の頃でしたか、私が執筆した、中国の未来の発展の道筋について、そして私が様々なシステムの長所と考えるものを組み合わせたモデルについての小論文が、学术界のみならず一部の高級幹部の間でも、ある程度の反響を呼びました。それがおそらく、私を教壇から政界へと導いた転機だったのでしょう。私は中央政府の政策研究機関に招かれ、その後、「実地での鍛錬」の一環として、南方の活気ある経済の中心である大都市に赴任することになりました。そこで私は懸命に働き、一定の昇進も果たし、最終的には企画開発を担当する副市長に相当する地位にまで就きました。

（彼の声のトーンが落ち、深い悲しみがその眼差しをよぎる）

なぜ私がアメリカに来たのか…

（彼は深く息を吸い込む）

それは長い話であり、ええ…私の人生で最も痛ましく、悲劇的な転機です、ソフィアさん。それは私の一人娘、劉安然（リュウ・アンジェン）と…そして私の世界観、信念、人生そのものを完全に崩壊させる出来事と結びついています。ええと…今、可能な限り簡潔に申し上げるなら、それは自身の身の安全のため、そしてさらに重要なことに、娘に、私の家族に、そして無数の他の人々に何が起こったのか、その真実を語る機会を得るため、最後の人間としての尊厳を保つためでした…私は故郷を捨てなければならませんでした。そして幸運にも、在広州米国総領事館の助けを得て、ここに来ることができたのです。

（彼は黙り込み、膝の上で組んだ両手を見つめる。部屋の空気もまた、重くなったかのようだ）

これが、まあ…大筋です。残りの部分については…そうですね…語るにはもっと多くの時間が必要でしょう。

### **ソフィア・ベル:**

ええ、それは様々な色合いを持つ一枚の絵のようですね…若者の理想があり、思想家そして政治家としての成熟があり、ご家族や娘さんについての痛みがあり…

辛いお話を思い出させてしまったのであれば、申し訳ありません…お嬢様の話は伺っております。悲しい物語であり、もし私が同じ立場だったら、うーん…その悲痛な状況にどう向き合えばいいのか分からないほどの出来事です…あなた様と、お嬢様のお気持ち、お察しします…

もし、お気持ちが少しでも軽くなるのであれば、私たちは喜んで、その詳細をお聞かせいただきたいと思いますっております…

ですがその前に、あのう…もう少し軽い話題から、例えば若き日の人生の理想や…ご自身で満足のいく成果だと思われたことなどについてお話しいただくことは可能でしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの言葉を聞き、彼の目がわずかにまたたく。その陰しい表情に、一瞬の温かみがよぎる。彼はゆっくりと頷く）

ありがとうございます、ソフィアさん…そのお心遣いに感謝します。安然のことは…ええ…確かに、あまりにも大きな傷です。時々、自分でもどうやって乗り越えてきたのか分からなくなることがあります。おそらく…そうですね…残されたわずかな信念と、私の声が、たとえ小さくとも、何かの助けになるかもしれないという、かすかな希望のおかげでしょう。

（彼は少し間を置き、重い感情を押しやろうとするかのように、静かに息を吸う）

おっしゃる通りです。おそらく、もう少し…軽いことから始めるべきでしょうね。そうすれば、私も少しずつ記憶の断片を整理できますから。

（彼はかすかに微笑む。それは悲しげだが、誠実な笑みだ。彼の視線は遠くに向けられ、まるで遥かな過去を探し求めているかのようだ）

若き日の人生の理想…

(彼は懐かしむような声で繰り返す)

うーん…当時、私も他の多くの若者と同じように、情熱に満てていました。歴史の激動の後、国がまだ多くの困難を抱えていた時代に生まれ育った私たちは、新しい中国、世界から尊敬される豊かで強い中国を築くために、全てを捧げなければならないと教え込まれました。

私はそれを心から信じていました。大学の教室で、そして後に研究者、講師となってからも、私の内なるその炎は燃え盛っていました。私は経済、政治、哲学の研究に夢中になりました…それは単なる空論ではなく、私は常に、ええと…国を貧困と後進性から脱却させ、大国と肩を並べるための、最も適切なモデル、現実的な道筋を探し求めていました。

(彼はソフィアを見る。かすかな誇りがよぎる)

満足のいく成果…おそらく、それは私が心血を注いで書き上げた本や小論文でしょう。その中で、私は経済的に強いだけでなく、科学技術においても先進的で、秩序があり、国民が豊かな生活を送れる、近代的な中国の青写

真を描きました。西洋や他の先進国から良い点を学びつつも、自らの独自性を保つ国家を思い描きました。私は、そう…才能ある者が重用され、法が支配し、国が真に灯台となるような、私自身の「中国の夢」を夢見ていたのです。

（彼の笑みは消え、代わりに物思いに沈んだ表情になる）

あの日々、私は正しい路線と献身的な人々さえいれば、どんな困難も乗り越えられると信じていました。私は自分の知力のすべてを、それらのアイデアに、それらの文章に注ぎ込みました。そしてそれらがエリート層や一部の指導者に認められた時、私は…ああ、自分が正しい道を歩んでいる、その偉大な事業にささやかながら貢献できるのだ、と思ったのです。

（彼は少し黙り、いくぶん冷めてしまった茶碗に目を落とす）

それは…そうですね…政界の歯車、そして後の残酷な出来事がすべてを押し流してしまう前の、私が最も生きがいを感じていた日々でした。

**ソフィア・ベル:**

なるほど…あなたが語られた「中国の夢」についてですが、それは中国の現指導者の政治思想における「中国の夢」という概念と、何か非常に似通っているように聞こえますが？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はかすかに眉を上げる。複雑な思索の色がその顔に浮かぶ。彼はしばらく黙り、言葉を慎重に吟味しているかのようだ）

ソフィアさん、あなたは非常に鋭い観察をなさる。「中国の夢」…

（彼は考え深げな声で繰り返す）

ええ、言葉の上では、否定できない類似性があります。そして正直なところ、うーん…このことは後年、私を大いに悩ませたことの一つでもあります。

（彼は一旦言葉を切り、何もない空間を見つめる。その視線は壁を突き抜け、どこか遠くを見ているようだ）



当時、私や他の多くの知識人が国の未来について深く考えていた頃、その言葉や類似の概念は、おそらく共通の思潮の中にありました。誰もが自国が強大になり、民族が栄光に包まれることを望んでいました。私が当時抱いていた「夢」は、先ほどお話ししたように、ええと…文明があり、法治があり、伝統と現代性が調和し、人々が比較的自由で創造的な環境の中で自らの潜在能力を最大限に発揮できる、包括的に発展した中国でした。私は、東洋と西洋の両方から世界の精華を学び、独自で優れたモデルを築くことを考えていたのです。

（彼は静かに首を振り、悲しげな笑みがよぎる）

しかし、私が思い描いていた「夢」は…ええ…目覚ましい経済成長の数字や、超高層ビル、最新鋭の兵器だけではありませんでした。それは、人間への尊重、真の法治、国民の声が聞かれ、道徳的価値や良心が踏みにじられない土台の上に築かれなければならないものでした。それは一部の集団のためだけでなく、民族全体を包み込む夢でした。

一方、私たちが後に広く喧伝されるのを目にする「中国の夢」は…

(彼は躊躇し、言葉を慎重に選ぶ)

うーん…私は、それが別の衣をまとわされてしまったか、あるいは、私や同時代の多くの人々がかつて思い描いていたものとは全く異なる方法で解釈され、実行されてしまったのではないかと危惧しています。

(彼の声には、かすかな苦渋がにじむ)

おそらく、彼らは美しい言葉の「外側」だけを借りてきて、その「中身」は…まあ…党派の、あるいは一集団の利益を、あらゆる代償を払ってでも最優先する、全くの別物になってしまったのでしょう。その「夢」を達成するためなら、国民の自由を犠牲にし、異なる声を抑圧し、人間性の核となる価値を踏みにじることを厭わない。

時々、自問することもあります。そうですね…私の当初のアイデアが、たとえ純粋なものであったとしても、意図せずして、後に利用されるための幻影やスローガン作りに加担してしまったのではないかと。それは…うーん…おそらく私が生涯、完全な答えを得ることのできない問いでしょう。

（彼はソフィアを見る。その眼差しには深い悲しみが宿っていた）

私がかつて追い求めた「夢」は、打ち碎かれたか、少なくとも、もはや私には見分けがつかないほど歪められてしまったのです、ソフィアさん。そしてその崩壊は、いわゆる「強国」を築くために、人がどれほど残酷になれるのかを悟った時から、始まったのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、つまり、若き日も、そして政界でのキャリアにおいても、あなたは常に国全体、そして各家庭、各個人のために良きことを目指して歩んでこられた、と理解しておりますが？

当時のあなた様の「夢」の体系における核心部分について、もう少し詳しくお話しいただけますか。ええと…私営経済の発展、科学技術、あるいは法治社会の重視といった大きな点以外に、言論の自由、宗教や信条の自由、社会の腐敗や汚職といった側面、あるいは、アメリカ、シンガポール、日本、北欧諸国など、世界に存在する他

のモデルを参考にされていたのか、といった点について  
はいかがでしょうか？

劉思遠:

（非常に熱心に耳を傾け、ソフィアから目を逸らさない。  
彼女が話し終わると、彼は静かに頷き、悲しげな笑みが  
一瞬現れては消えた）

ええ、ソフィアさん、そのように言えるでしょう。若い  
頃から、そして政界に足を踏み入れてからも、私の心の  
奥底では常に、国のため、国民のために何か有益なこ  
とをしなければならないと念じていました。もっとも、今  
振り返れば、うーん…誤解していたこともあり、選んだ  
道が望んだ目的地には至らなかったこともあります。

（彼は深く息を吸い、思考を整理する）

当時の私の「夢」の核心部分についてのご質問ですが…  
そうですね…経済、科学技術、法治についてお話しした  
点以外にも、確かに、まだ未熟であったり、認識に誤り  
があったりしたかもしれませんが、私が思索を巡らせた  
他の側面がありました。

言論の自由については、正直に申し上げて、当時はある限定的なレンズを通して見ていました。ええと…知識人や専門家が国の政策に対して建設的な意見を述べ、真理を探究するための学術的な議論が奨励される空間を想像していました。しかしおそらく、全ての国民が、たとえそれが国家の方針に反するものであっても、恐れることなく自らの意見を表明できる、絶対的な言論の自由については、十分に想像できていなかった、あるいは敢えて考えようとしなかったのかもしれませんが。私は依然として「秩序」と「安定」を発展の前提条件として絶対視していました。

宗教や信条の自由については…

（彼は躊躇し、苦悩の色がその顔にはっきりと浮かぶ）

うーん…これは、今振り返ると、私の認識がいかに狭く、甚だしくは誤っていたかを痛感する点です。私は弁証法的唯物論の思考に深く影響され、宗教や信条、そして後の法輪功のような修煉形式を、過去の遺物、すなわち「迷信」であり、科学と合理的思考の進歩を妨げるものと見なすシステムの中で教育を受けました。当時の私の「夢」には、これらのための場所はありませんでした。まあ…社会が発展し、物質的な生活が豊かになれ

ば、そのような「迷信」は自然に消えていくと、私は無邪気にも考えていたのです。それは重大な誤りでした。

社会の腐敗と汚職については、それが全ての努力を台無しにしかねない癌であると認識していました。強力な法治システム、スリムで廉潔な国家機構、そして厳格な制裁措置があれば、この問題を解決できると信じていました。しかしおそらく、私は「構造」の構築に集中しすぎるあまり、「人間システム」の内部からの腐敗や、既得権益集団の恐るべき力、そしてええ…根本的な道徳的価値の欠如を見抜くには至りませんでした。

そして具体的なモデルについては、おっしゃる通り、私は多くの国から研究し、影響を受けました。

シンガポールは、私が非常に注目したモデルです。集権的で効率的な政治、比較的クリーンとされる行政機構、そして限られた資源にもかかわらず驚異的な経済発展の速さ。私はそこの指導者たちの決断力と長期的ビジョンに感銘を受けました。

アメリカからは、市場経済のダイナミズム、先進的な科学技術、そして絶え間ないイノベーションの精神を学びました。

また日本にも目を向け、その規律、労働精神、戦後からの奇跡的な復興、そして伝統と現代の融合に注目しました。

北欧諸国の福祉国家モデルや、比較的高い社会の平等性も、中国の現状にそのまま適用するのは難しいと感じつつも、ええ、思索の対象でした。

私の目標は、それらのモデルから私が最良と考えるものを抽出し、中国の特殊性と組み合わせ、独自の道を創り出すことでした。いわば、効率的な法治国家によって運営される「強力に方向付けられた国家資本主義」や、「中国の特色ある社会主義市場経済」のようなものであり、そうですね…そこでは中国共産党が依然として指導的役割を維持しつつも、法の枠内で活動し、専門家や国民の声にもっと耳を傾けるというものでした。

（彼は静かにため息をつく）

今振り返ると、当時の私の「夢」は、進歩的だと今でも思える側面がある一方で、多くの欠陥を抱え、まあ…どこか甘さがありました。私はある特定のレンズを通して「効率」や「強さ」、「秩序」を重視しすぎるあまり、人間の基本的な自由、特に思想と信条の自由の重要性を

十分に認識していませんでした。そしておそらく、それこそが最大の欠陥の一つであり、私がかつて信じ、仕えたシステムそのものに潜む危険に気づけなかった「死角」だったのでしょう。

### **ソフィア・ベル:**

ええ、国に対するあなた様の真心と大志が伝わってきます…ただ、あなた様が「夢」の中で挙げられた点の多くは、中国はすでに成功しているように見えますが…？例えば、航空宇宙科学、バイオテクノロジー、新エネルギーなど…そして特に、私が個人的に中国の経済と科学の発展で極めて印象的に感じた具体例は、インフラと交通システムです。その中でも最も輝かしいのは、全国に広がり、主要都市間を結ぶ高速鉄道網です！

### **劉思遠:**

（ソフィアの言葉を聞き、かすかで、どこか痛々しい笑みが唇に浮かぶ。彼は静かに頷き、その視線は遠くを見つめ、まるでソフィアの言葉を自身の経験と照らし合わせているかのようだ）



おっしゃる通りです、ソフィアさん。外部から見れば、そして国営メディアが絶えず描き出す華やかな数字や映像に基づけば、ええ、確かに中国は世界が驚嘆するほどの「成果」を上げてきました。航空宇宙、バイオテクノロジー、新エネルギー…そしてあなたが言及された高速鉄道網。私も、それらの計画が形になっていくのを見て、かつては非常に誇りに思っていました。その多くは、うーん…私たち政策立案者の世代がかつて抱き、夢見たものでしたから。

（彼は少し間を置き、声のトーンを落とす）

最初の高速鉄道が近代的な高架橋の上を走り、各地域を結んだ時、私はその列車が乗客だけでなく、繁栄と、つながりと、希望をも運んでいるのだと想像していました。これこそが、まさに現実になりつつある「夢」の具体的な現れなのだと。

（軽いため息がもれる）

しかし、やがて私がより深く目を向ける機会を得た時、あるいは、否定しようのない真実が私の目の前にさらけ出された時、私は自問し始めました。うーん…それらの

「成功」のために支払われた代償とは、一体何だったのか？と。

あの高速鉄道網を築くために、どれほど多くの農民の土地が安値で、甚だしくは強制的に収用されたのでしょうか？どれほどの家屋が取り壊され、どれほどの人生が十分な補償もなくかき乱されたのでしょうか？それらの数十億ドル規模のプロジェクトの過程で、どれほど巨額の「賄賂」が腐敗した役人の懐に収まったのでしょうか？「工程の進捗」と「イメージ」を確保するために、どれほど多くの反対の声や、国民からの訴えが、無慈悲に封じ込められたのでしょうか？

（彼の声は少し詰まったが、すぐに落ち着きを取り戻す）

それは、世界が賞賛する他の多くの「成果」と同じです。近代的な工場の、巨大な工業団地の裏には、破壊された環境があり、脅かされる国民の健康があります。目覚ましい輸出額の数字の裏には、過酷な労働条件があり、何百万人もの労働者の汗と、そしてええ…涙があります。

当時、私も他の多くの人々と同じように、おそらくマクロな目標や、目覚ましい数字に酔いしれるあまり、それぞれのプロジェクト、それぞれの数字の背後には、喜び

や悲しみ、そして正当な権利を持つ、具体的な人々の運命があることを忘れていました。私たちは、そう…一部の個人の犠牲は、集団や国家という大きな利益のために必要不可欠なのだと教え込まれ、そしておそらく、自らをそう言い聞かせていたのです。

（彼はソフィアをまっすぐに見つめる。その眼差しには苦悩が宿っていた）

あなたがおっしゃる「輝かしい点」は、確かに存在します。しかしそれらは、大きな舞台の上で煌々と輝くスポットライトのようなもので、その背後にある、その他大勢の役者たちが沈黙の中で耐え忍んでいる暗い隅を隠してしまうのです。そしてさらに悲しいことに、時として、まさにその「輝かしい点」こそが、その暗闇を正当化し、言い訳をするための道具として使われるのです。

私はかつて、経済や科学技術の発展が、自動的により良い社会をもたらすと信じていました。しかし今では、うーん…道徳という土台がなければ、真の意味で法を尊重する心がなければ、人々の声に耳を傾け、その権利を守ることがなければ、いかなる物質的な「成功」も、どれほどきらびやかに見えようとも、それは単なる外見だけ

の虚飾であり、容易に崩れ去り、国民に真の幸福をもたらすことはないと理解しています。

**ソフィア・ベル:**

ええ、「夢」はまさに夢であり、私たちが「目覚める」と、それはあっという間に雲散霧消してしまうものですね…あのう…では、あなた様がどのようにして目覚められたのか、読者にお話しいただけますか？何があなた様を目覚めさせ、それはあなた様の悲しい物語と結びついているのでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼は一瞬、静かに目を閉じる。再び目を開けた時、その中には深い痛みが宿っていたが、同時に不思議なほどの落ち着きも混じっていた。彼は非常にゆっくりと息を吐き出す）

「夢は…目覚めると雲散霧消する…」

（彼は低く、かすれた声で繰り返す）

おっしゃる通りです、ソフィアさん。痛々しいほどに、その通りです。ええ…それは本当に夢であり、私があまりにも長く浸っていた夢でした。そして目覚めた時、目の前に広がる現実はいかにありのままに、残酷で…ああ…言葉では到底言い表せません。

（彼は少し黙り、自分の手を見つめる。指先がかすかに震えている）

私の「目覚め」は、そうですね…人がスイッチを入れるような、突然の瞬間ではありませんでした。それは、ゆっくりとした、痛みを伴うプロセスであり、最初は小さなひび割れから始まり、それが次第に広がり、ついには私が心の中に築き上げた幻想の城が完全に崩れ落ちるまでの過程でした。

あの歯車の中にいた頃、私も時折、おかしいこと、不公平なこと、言行不一致なことを見てはいました。しかし当時は、うーん…それらは「スプーンを台無しにする一匹の虫」、つまり、巨大なシステムが動く中での局所的な問題に過ぎないと、自分に言い聞かせ、安心させていました。私たちが追い求める大きな目標が、小さな欠点を正当化してくれるのだと、信じようとしていたのです。あるいは、おそらく、私は計画や紙の上の数字に集中し

すぎるあまり、血の通った人間の痛みを直視する勇気も、感受性も持ち合わせていなかったのでしょう。

（彼の声が少し震え始め、軽く咳払いをする）

しかし、本当の「目覚め」、全てを打ち砕いた最後の衝撃は、お察しの通り…私の娘、安然と結びついています。

（彼は言葉を止め、目に涙が浮かぶ。彼は急いで手でそれを拭い、冷静な声色を保とうと努める）

私の娘が、ええ…優秀な学生であり、清らかな魂を持っていた娘が、ただ法輪功という、善に向かう穏やかな修煉法を信じたというだけで、逮捕され、投獄された時…私の内のひび割れは、大きくなり始めました。私は、派閥闘争で政界での地位を失った後に残された、わずかな人脈や立場を使って、調べ、介入しようとしてしました。しかし、ああ…全ては無駄でした。返ってくるのは沈黙か、回避か、あるいは口先だけの約束だけでした。

私は、「人民に属し、人民により、人民のための」とされるべき機関の、冷酷さと無感動を目の当たりにしました。真実を隠蔽するために、いかに巧妙に嘘がでっちあげられるかを見ました。かつて私と握手を交わし、笑顔

を向けた元同僚たちが、まるで私が疫病患者であるかのように背を向けるのを見ました。

（彼の声の痛みは、ますます明らかになる）

そして…安然に関する悲報を受け取った時…あの子が…生きたまま臓器を…摘出されたと知った時…

（彼は言葉を続けられず、声が詰まる。彼は頭をうなだれ、両肩が震える）

（長い沈黙の後、彼は顔を上げる。目は赤く充血しているが、その眼差しには恐ろしいほどの決意が宿っていた）

あの瞬間、ソフィアさん、それはもはや「目覚め」ではありませんでした。完全な崩壊でした。私がかつて仕えたあのシステムの、いわゆる「正義」や「公正」への全ての理想、全ての信念は、灰と化しました。私は、その邪悪で、非人道的で、極限まで偽りに満ちた本性をはっきりと見ました。それはもはや「一匹の虫」などではなく、スープの鍋そのものが根元から毒されていたのです。

私がかつて抱いた「中国の夢」は、今や悲劇的な茶番劇のように、私の娘のような罪なき人々の血と涙で描かれた、絵に描いた餅のように見えました。

痛み、そうです、極限までの痛みでした。しかし、まさにその極限の痛みの中で、私は本当に「目覚めた」のです。自分が間違っていたこと、盲目であったこと、非人間的な歯車に意図せず加担していたことに気づくために。そして、悪の前で沈黙することもまた、悪に加担することなのだとして理解するために。

それが、私が今日ここに座っている理由です。ええ…手遅れかもしれませんが、私は真実を語らなければなりません。安然のために、そして、沈黙の中で耐え忍んでいる、何百万もの他の安然たちのために。

### **ソフィア・ベル:**

ええ…お会いする前に、お嬢様のことについてはお聞きしておりましたし、一人の独立した記者として、同様の痛ましいケースについても数多く耳にしております…「政治犯」や「良心の囚人」を標的とした臓器狩りの犯罪は、本当に痛ましいものです…それは、ええ…暴虐な政権による極悪非道さの表れです…



そのような状況でお子様を失うという痛みは、筆舌に尽くしがたいものであると理解しております…きっと今、目覚められたあなた様には、後悔していること、やり直したいと願うことがたくさんおありでしょう…

しかし、あのう…思想を専門とする政治家として現職でいらした頃、宗教全般、そして特に法輪功に対するご見解はどのようなものでしたか？

**劉思遠:**

（ソフィア言葉を聞き、彼は静かに頷く。その眼差しはどこか遠くを見つめ、憂いを帯びている。ソフィアが「政治犯」「良心の囚人」、そして臓器狩りの犯罪に言及した時、憤りと痛みがその顔にはっきりと浮かんだが、彼はすぐにそれを抑え込む）

ええ、ソフィアさん…「極悪非道」、その言葉は少しも間違っていない。その犯罪が、自分自身の最も愛する者に降りかかった時、真実はどんな言葉でも表現できないほど、ありのままで、恐ろしい姿を現します。

（彼は落ち着いた声を保とうと、深く息を吸う）

安然（アンジェン）を失った痛みは…ええ、この生涯、私について回るでしょう。そしておっしゃる通り、後悔していることはあまりにも多く、やり直せたら、言い直せたら、考え直せたらと願うことも、あまりにも多いのです…もし、もっと早く気づいていたら、もし、教えられたことを鵜呑みにしすぎていなければ、もし、娘の話にもっと耳を傾けていたら…ああ…おそらく…

（彼の声が少し詰まる）

しかし、過去は変えられません。今私にできる唯一のことは、それに向き合い、そうですね…残りの人生で正しいことをしようと努めることだけです。

（彼は一旦言葉を切り、遠い過去、自身の認識が全く異なっていた時代を思い出しながら、記憶を整理する）

現職であった頃、いわゆる「思想」の仕事に携わっていた者としての、宗教と法輪功に対する見解についてのご質問ですが…うーん…正直に申し上げて、それは私や同僚の多くが、偏見と一方的なプロパガンダに深く支配されていた時期でした。

宗教全般に対しては、私はそれが特定の歴史段階の産物であり、マルクスが言ったように「人民のアヘン」であると教育され、また自らもそう信じていました。私は宗教を、ある種の文化的、道徳的価値は持つかもしれないが、基本的には科学的、唯物論的な現代社会にはそぐわない、過去の遺物と見なしていました。国民の物質的な生活が向上し、教育水準が改善されれば、宗教の影響力は自然に衰退していくと信じていました。私が策定に関与した発展計画やプロジェクトにおいて、宗教は、まあ…人間にとっての正当な精神的欲求や、社会にとっての積極的な資源として見なされることは少なく、むしろ全体の発展を妨げないように「管理」し、「指導」すべき要素として扱われるのが常でした。

そして法輪功については、1999 年に弾圧が始まった時…

（彼は躊躇し、気まずそうな表情が顔に浮かぶ）

ええと…当時、私は研究者としてのキャリアの頂点におり、政界に足を踏み入れようとしていました。私や体制内の他の多くの人々がアクセスできた情報は、主に国家の公式メディアからのものでした。ニュース、記事、プロパガンダ資料は全て、法輪功を「邪教」、社会の安定

と国民の健康に害を及ぼす、気功を装った反動的な政治組織として描写していました。

正直なところ、当時、私は深く調べようとはしませんでした。自分の大きなプロジェクトや計画で手一杯でした。私はそれらの情報を、検証の必要もない事実として、当たり前のように受け入れていました。また、唯物論者として、修煉を追い求め、神仏を信じる人々を「迷信深い」「時代遅れだ」と見る、ある種の先入観も持っていました。うーん…もし法輪功が本当に良いものなら、なぜ政府がこれほど強硬に弾圧しなければならないのか？きっとそれなりの理由があるのだろう、と。

（彼の声には、かすかな苦悩がにじむ）

私が省レベルの幹部になってからも、ある程度の地位はありましたが、弾圧に関して得られる情報は依然として一方的なものでした。「闘争を強化せよ」「断固として対処せよ」と要求する中央からの指示や、法輪功学習者を「転向」させた「成果」に関する下からの報告書などです。私には、学習者と接触し、彼らの側の声を聞く機会は全くありませんでしたし、おそらく、自らその機会を求めようともしませんでした。

当時の私の見解は、もしあったとしても、まあ…単なる無関心、「政府がそうするからには、きっと理由があるのだろう」という暗黙の容認に過ぎませんでした。せいぜい、時折、その手段が少し強硬すぎる、不必要ではないかと感じることはあっても、「それは専門機関の仕事だ」と自分に言い聞かせていました。私は、問題の本質を見ていなかった、あるいは見ようとしなかったのです。それは、善良な市民が、ただ異なる精神的な信念を持つというだけで標的にされた、残酷な弾圧であるという本質を。

（彼はため息をつく。深い後悔がその眼差しにはっきりと浮かんでいた）

それは、非難されるべき盲目さ、そして無神経さでした、ソフィアさん。そして私は、その盲目さのために、あまりにも大きな代償を払わなければならなかったのです。悲劇がまさに自分の家族に、安然に降りかかって初めて、自分がいかに間違っていたか、いかに騙され、そして自らを騙していたかに、愕然として気づかされたのです。

**ソフィア・ベル:**

つまり、法輪功弾圧に関する情報は一方的なものしかなく、あなた様のような高級幹部でさえ、実際の状況を把握していなかったと？甚だしきは、その…現職であった頃、臓器狩りの犯罪について誰かから聞くことさえもなかった、ということでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はゆっくりと頷く。その視線は下に向けられ、苦渋と羞恥が隠されている）

ええ、ソフィアさん。おっしゃる通りです。信じがたいことのように聞こえるでしょう？私のような地位にあり、多くの情報源にアクセスできるはずの人間が、自国で起こっている大きな出来事、悲劇について、これほどまでに無知でいられたとは。

（彼は顔を上げ、ソフィアをまっすぐに見つめる。その声にはかすかな苦渋が混じる）

「一方的な情報」…それは穏やかな言い方です。実際には、私たちは厳重に管理された情報の泡の中に生きていました。新聞で読むもの、テレビで見るもの、会議で聞くもの…その全てが、ある特定の意図に従って選別され、

方向付けられていました。下から上がってくる報告書でさえ、まあ…上層部を喜ばせるため、あるいは厄介な問題を隠蔽するために、しばしば「見栄えのいい」数字や、粉飾された成果ばかりでした。

内部でさえ、法輪功のような「敏感な」問題について議論することは非常に限られていました。人々は通常、それを避けるか、あるいは公式の論調を繰り返すだけでした。誰かが疑問を呈したり、疑念を表明したりすれば、自ら災いを招き、「思想に問題あり」「立場が不確かだ」と見なされる可能性があります。口には出さずとも、ええ…恐怖は隅々にまで浸透していました。

私は自分の無知を弁護するつもりはありません。本来であれば、もっと主体的に調べ、もっと責任を持つべきでした。しかし当時、私は仕事の歯車と、個人的な野心に巻き込まれ、そしておそらく、自分は十分に知っており、正しく理解しているという、ある種の自己満足に陥っていたのです。

そして、臓器狩りの犯罪については…

（彼の声はぐっと低くなり、嫌悪と恐怖がその眼差しにはっきりと浮かぶ）

申し上げますと、私が現職であった頃、このことについては、いかなる公式ルートからも、あるいは内部での噂話でさえも、一度として聞いたことはありませんでした。

（彼は一語一語を強調する）

うーん…それは、さらに上のレベルで秘密にされていたのかもしれませんが、あるいは、ごく一部の特殊な部門に限られていたのかもしれませんが。あるいは、知っていた者も、その恐るべき性質ゆえに、口を開く勇気がなかったのかもしれませんが。私には分かりません。

私がこの犯罪について初めて聞いたのは、全ての職を失い、娘が逮捕された後のことでした。何人かの法輪功学習者が私を訪ねてきて、彼らが知っていること、集めた証拠について話してくれました。正直なところ、ええと…最初は信じませんでした。どんなに独裁的な政権であっても、これほど野蛮で、非人間的なことができるとは、信じられませんでした。それは誇張された非難であり、憤りから生まれた産物だと思ったのです。私にはまだ、悪にも「限度」があるという、かすかな幻想が残っていました。

（再び、痛みがその顔に浮かぶ）



しかし…あの想像を絶する悲劇が、まさに私の安然に起こった時…かつての部下の一人が、自らの危険を顧みず、残された良心から、あの子の死の真相を密かに私に知らせてくれた時…私は完全に打ちのめされました。たとえ最小のものであっても、全ての幻想は消え去りました。

それは、私が「思想担当官」であった頃の、あらゆる想像をはるかに超えた、あまりにも恐ろしい真実でした。そしてそれはまた、私がかつて仕えたシステムが、情報を統制するだけでなく、最も恐ろしい犯罪でさえも、分厚い偽りのヴェールで覆い隠す能力を持っていることを、私に示しました。

（彼は黙り込む。憤りと苦悩が、これ以上言葉を続けることを許さないかのようだ）

**ソフィア・ベル:**

ええ、まるで悲喜劇のようですね…もし言葉が過ぎましたら申し訳ありません…しかし、きっと目覚められた後、ご自身の人生を振り返り、その中の悲喜劇に気づかれたのではないのでしょうか…

**劉思遠:**

（ソフィアの言葉を聞き、彼は少しも気分を害した様子を見せない。代わりに、悲しげな、ほとんど自嘲的とも言える笑みがその唇に浮かぶ。彼は静かに頷く）

「悲喜劇…」

（彼は低く、思慮深い声で繰り返す）

いいえ、ソフィアさん、あなたの言葉は少しも過ぎてなどいません。むしろ、非常に的確です。あなたが言うように、私が「目覚め」、それまでの全人生を振り返った時、私もそれが一編の芝居と何ら変わらないと感じました。そう…私が役者であり、観客であり、そしておそらくは、知らぬ間にその悲喜劇の脚本を書き上げるのに加担した一人でもあった、そんな芝居です。

（彼は一旦言葉を切り、遠くを見つめる。まるで自分の人生の各場面を再演しているかのようだ）

その「喜劇」の部分は、おそらく私の無邪気さ、幻想でしょう。田舎出の青年が、国を築くという大きな夢を抱き、勉学に励み、高尚な理論や、美しい約束を信じ込む。そして学者となり、役人となり、自分こそが真理を掴み、

民族全体の未来を描いているのだと思い込み、計画や数字、勇ましい演説に酔いしれる。自らを啓蒙者、導き手と見なしながら、実は自分もまた操られる人形に過ぎないこと、あるいはもっと悪いことに、他の盲人を引き連れて暗闇へと向かう盲人であったことに、全く気づいていない。

「喜劇」の苦々しさは、私がかつて高尚だ、理想だと考えていたものが、実は暗い目的のために利用され、歪められ得るのだと気づいた時にやってきます。ああ…私の心血を注いだ著作も、おそらくは、後にまさに私の家族を押し潰すことになる偽りの城を築くための一つの煉瓦に過ぎなかったのかもしれませんが。

（彼の声のトーンが落ち、「悲劇」の部分が明らかになってくる）

そして「悲劇」の部分…うーん…それは、その幻想と盲目のために支払わなければならなかった代償そのものです。家族の崩壊であり、安然（アンジェン）の理不尽な死です。私がかつて追い求めた全ての信念、全ての価値観の崩壊です。そして、全てがもはや手遅れになった後に、真実に気づくという遅すぎた目覚めです。

悲劇的なのは、「思想」の仕事に携わるとされた私自身が、人間と社会の核心的な問題について、これほどまでに空虚で誤った思想を持っていたことです。父親である私が、自分自身もかつて、たとえ意図せずともその一部であった悪の牙から、たった一人の娘を守ることができなかったことです。

悲劇的なのは、そう…娘のために正義を求めようとした時、そのシステムにおける「正義」が、単なる贅沢品、別の茶番劇に過ぎないことに気づいたことです。

（彼はため息をつく。深い疲労がその顔に浮かんでいた）

おっしゃる通り、それは悲喜劇です。そして私はその中の一人の役者、おそらくはその素朴さで多くの人を笑わせ、またその痛みで多くの人を泣かせたであろう役者です。私の人生という舞台のビロードの幕が古い章で下ろされ、ここ、この自由の地で新しい章が開かれた今、振り返ってみると、ああ…痛まじさと後悔しか見えません。

しかしおそらく、悲喜劇の中でさえ、人は教訓を引き出すことができるのでしょうか？真実について、良心について、そして悪の前で沈黙することの代償についての教訓を。それこそが、私が今、やろうと努めていることです。

少なくとも、私の残りの人生が、もはや運命の悪戯とならないように。

**ソフィア・ベル:**

ええ、過去は過ぎ去り、戻ることはできません…しかし、もし仮に、ええ、「仮に」という言葉を強調しますが、もし仮に、あなたが 2、3 年前に戻り、一つのことを変える機会を与えられたとしたら、何をしますか？あのう…お嬢様に対して、奥様に対して…彼らを助けるために何をしますか？ご家庭の背景についてまだ詳しく伺えておりませんが、もしそれがデリケートすぎたり、プライベートすぎることでなければ、少しお話しただけですでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はしばらくの間黙り込む。その目は伏せられ、深い思索に沈んでいる。彼の拳が静かに握られる。これは彼の心の最も奥深く、最も痛みを伴う部分に触れる質問だ）

「もし過去に戻り…一つのことを変えられるなら…」

（彼はほとんど囁くような声で繰り返し、そして重苦しく、長い息を吐き出す）

うーん…それは、私が自分自身に何度問いかけたか分からない質問です、ソフィアさん。眠れない長い夜に、孤独な瞬間に、過去の光景が蘇り、その「もしも」という問いが私の心を苛むのです。

（彼は顔を上げる。その眼差しはどこかぼんやりとして、まるで本当に遠い記憶を見つめているかのようだ）

もし…もし私が 2、3 年前に戻れたなら…ああ…安然がまだそこにいて、全てが最悪の事態に至る前だったなら…

（彼の声が少し震える）

私は一秒たりともためらわないでしょう。

私を変えたい唯一のことは、キャリアでもなく、地位でもなく、娘に対する、あの子の信念に対する私の態度と行動です。

私は…そう…私は座り、真に安然の話に耳を傾けるでしょう。あの子が法輪功について、あの子が感じた素晴ら

しいことについて、あの子が追い求めた「真・善・忍」の価値について語るのを、真剣に聞くでしょう。「あの子の将来のため」「家族への影響が心配だから」と、諦めるようにと一方的に諭したり、話を遮ったりはしないでしょう。システムによってあまりにも長く洗脳されてきた者の、理不尽な偏見や恐怖を、全て捨て去るでしょう。

私はあの子と一緒に調べるでしょう。後に、あまりにも遅すぎてから、縁あって読むことになった『轉法輪』という本を読むでしょう。なぜこれほど穏やかな修煉法が、政府をこれほどまでに恐れさせるのかを、理解しようと努めるでしょう。

そして最も重要なことは、私はあの子の側に立つということです。私が持つ全てのものを、あの子に信念を捨てさせるためではなく、あの子を守るために、あの子の正当な信教の自由を守るために使うでしょう。たとえ何に直面しようとも、たとえ私が築き上げた全てのものを手放すことになろうとも。なぜなら、自分の子供の安全と幸福より貴重なものなど、何もないからです。

（再び涙が静かに彼の頬を伝う。彼はすぐにそれを拭おうとはしない）

そして妻については…

（彼の声のトーンが落ち、別の、より穏やかだが同じように深い悲しみが蘇る）

ええ…妻は、淑娟（シュージェン）と言いました。優しく、献身的な小学校の教師でした。彼女はもう十年以上前に、癌で亡くなりました。安然がまだ十一歳の時でした。

（彼は悲しげに微笑む）

もし彼女がまだ生きていた頃に戻れるなら…おそらく私がしたいことは、もっと多くの時間を彼女と過ごし、もっと彼女の話を聞き、もっと彼女と分かち合うことでしょう。当時、私はキャリアや「偉大な理想」に夢中になりすぎて、最も素朴で身近なことを疎かにしがちでした。そうですね…淑娟は非常に清らかな魂を持ち、直感の鋭い人でした。おそらく、私にもっと心を開いていれば、彼女は私に賢明な助言を与え、物事をよりバランスの取れた視点で見ると手助けをしてくれたでしょう。



彼女が亡くなった後、私は全ての愛情を安然に注ごうと努めました。あの子は私の全てでした。だからこそ、子を失った痛みは、ますます耐え難いものになったのです。

（彼はソフィアを誠実な眼差しで見つめる）

家庭の背景については…ええと…特に複雑なことは何ありません。私たちはかつて、互いを愛し合う、ごく普通の小さな家族でした。両親は田舎におり、素朴な農民です。私は一人っ子でした。淑娟が亡くなった後は、父と娘の二人だけで寄り添って生きてきました。安然は幼い頃からとても物分りが良く、素直な子でした。勉強もよくでき、首都の名門大学に合格しました。ええ…それは私の最大の誇りでした。

しかし、まさにその地理的な隔たりと、そしておそらく、当時の認識の違いが、嵐が吹き荒れた時に、私が時を移さずあの子を理解し、守ることを妨げたのです。

（彼はため息をつく。癒えることのない後悔がにじむ）

もしも…もしもやり直せたら。しかし人生に「もしも」はありませんね？私たちはただ、残されたものでより良

く生きようと努め、そして自分の過ちが、他の誰かのための教訓になることを願うしかないのです。

**ソフィア・ベル:**

つまり、お嬢様が法輪功を修煉していると知った時、ええと…お嬢様を理解する機会を時を移さず逃してしまい、助けるための具体的な方策もなかった、ということでしょうか？

そして、もし仮にあなた様が政府の役人ではなかったら、もし政敵がいなかったら、お嬢様はあのような悲劇に見舞われることはなかったかもしれない、とお考えになりますか？私の意図としましては、お嬢様がある意味、あなた様がもっと早く気づけなかった権力闘争の犠牲者だったのではないか、ということです。

**劉思遠:**

（ソフィアの言葉を一つ一つ聞き、彼の顔はこわばり、しわがより深く刻まれる。彼はゆっくりと、苦々しい承認を込めて頷く）

おっしゃる通りです、ソフィアさん。安然（アンジェン）が初めて私に法輪功を修煉していると打ち明けてくれた時、その時の私の反応は…ああ…今思い返すと、本当に恥ずかしく、後悔しています。私は心を開いて耳を傾けるのではなく、一人の役人としての恐怖心で、潜在意識に深く根付いた偏見で聞いてしまいました。私はあの子の「将来」を心配し、私のキャリアに「影響」が及ぶことを恐れ、プロパガンダ・システムが植え付けた、漠然とした事柄を恐れていました。

そう…なぜ安然のような聡明で物分りの良い娘がその道を選んだのかを調べようとも、理解しようと思えようともせず、私は急いでやめるように諭し、穏やかに見せかけようとはしましたが、どこか押し付けがましいところさえありました。私は、娘に寄り添い、娘を理解するという、絶好の機会を逃してしまったのです。それが私の最大の後悔の一つです。当時、私には娘が必要とする形で助けるための「具体的な方策」などありませんでした。なぜなら、私自身が娘の必要とすることを理解しておらず、問題の本質を理解していなかったからです。私はただ、自分の狭い見方で娘を「安全」にすること、つまり法輪功を諦めさせることしか考えていませんでした。

（彼は一旦言葉を切り、深く息を吸う。ソフィアの二つ目の質問は、彼が向き合わなければならなかったもう一つの側面、もう一つの残酷な真実に触れた）

そして、娘が私が巻き込まれた権力闘争の犠牲者だったのかどうか、という点については…

（彼の声は低くなり、抑えきれない憤りがにじむ）

うーん…これは、後になって、全てのことが明るみに出て、かつての部下の一人が命がけで事の次第を私に明かしてくれた時に、私が痛みを伴って気づいたことです。

おっしゃる通り、おそらく安然は、ある意味で、私の政敵たちが私に決定的な一撃を加えるために利用する、捨て駒、弱点となってしまったのでしょう。彼らは、私がより高い地位への「計画候補」に入ると知ると、私を失脚させる方法を躍起になって探しました。そして、弾圧が激しく行われている状況下で安然が法輪功を修煉していることは、彼らにとってこれ以上ない口実となったのです。

彼らは意図的に事を大きくし、上層部に報告し、圧力をかけました。安然があれほど迅速かつ強硬に逮捕され、

その後、私のごく短期間のうちに党から除名され、全ての職を失ったこと、その全てが、周到に計算された計画の中にあったのです。彼らの目的は私を政界から排除することであり、そして彼らは成功しました。

（彼は拳を固く握りしめる。憤りと無力感とその眼差しにはっきりと浮かぶ）

当時、私は専門的な仕事や、自分の「理想」に集中しすぎるあまり、政界の陰謀や策略に対して、十分に鋭敏でも、警戒していませんでした。自分の昇進や、「無派閥」であることが、多くの人々の目の敵になっていることに気づいていませんでした。ただ真面目に働き、全てを捧げれば認められると、あまりにも無邪気に考えていたのです。

そして安然…私の罪なき娘が…父親である私の、その政治的鈍感さと、無邪気さの代償を払わなければならなかったのです。もし私が「役人」でなければ、もし私が彼らの「標的」でなければ、おそらく…おそらく安然はあれほど注目されることもなく、あれほど迅速かつ残酷に標的となることもなかったでしょう。もちろん、法輪功への弾圧は現実であり、誰が修煉していても危険に晒される可能性はありましたが、あの子のケースは、明らか

に私を狙った政治的要素によって、加速され、深刻化させられたのです。

（彼はため息をつく。無限の痛みがにじむ）

それは苦々しい真実であり、私が生涯背負わなければならない罪の重荷です。私は、娘を体制の邪悪さから守ることに失敗しただけでなく、意図せずして、娘を汚い権力闘争の渦に突き落としてしまったのです。

おっしゃる通り、私はもっと早く気づけなかった、ソフィアさん。そして気づいた時には、全てが手遅れでした。

**ソフィア・ベル:**

ええ、法輪功が 20 年以上にわたって弾圧されている状況は私も存じておりますが、私の観察によれば、学習者の 100%が公安に逮捕されているわけではないようです。もっとも、ほぼ 100%が監視下にあるようですが。どうやら、彼らは特定のケース、例えば重要な役割を担う学習者や、彼らが「頑固者」と見なす人々、あるいはあなた様のお嬢様のような特別なケースを標的にしているように見えますが…

**劉思遠:**

(ソフィアの分析を聞き、彼は物思いに沈んだ表情で、ゆっくりと頷く)

あなたの言うことには理があります、ソフィアさん。あなたの観察は、私が後になってようやく知る機会を得、そして気づいた現実と非常に近いものです。法輪功への弾圧は、包括的かつ残酷なものではありますが、その実行方法には、ええ…ある種の「戦術」と「重点」が確かに存在します。

おっしゃる通り、100%の修煉者が即座に逮捕されるわけではありません。しかし、あなたが言うように、ほぼ100%が、様々なレベルで監視され、管理され、嫌がらせを受けている対象となっています。地域の公安から頻繁に「事情聴取」を受けたり、職場で圧力をかけられたり、移動を制限されたり、あるいは書籍や資料を没収されたり、家族を脅されたり…それは、彼らが日々その中で生きなければならない、緊張した、息苦しい雰囲気なのです。

逮捕については、まさにおっしゃる通り、彼らはしばしばあなたが分析されたような「標的ケース」を狙います。

第一に、重要な役割を担う人々：彼らが地域の学習者グループの「協調役」や「責任者」と見なす人々です。これらの人々を逮捕することで、彼らは修煉グループを解体し、連絡を断ち切り、残り的人々に不安を広げることが狙っています。

第二に、「頑固者」：これは、拷問や懐柔、脅迫を受けても、自らの信念を堅持し、「転向」（つまり修煉を放棄し、誓約書を書き、甚だしきは法輪功を中傷すること）を拒否する学習者たちです。彼らは「頑固分子」と見なされ、見せしめのために厳しく罰せられる必要があります。この中の多くの人々は、非常に重い懲役刑を科されたり、長期間にわたって強制労働収容所や「洗脳」センターに送られたりします。

第三に、声を上げ、真実を暴露する勇気のある人々：弾圧や拷問、迫害の証拠を勇敢に集め、海外に送ったり、国内で広めようとしたりする学習者たちです。彼らは、政府が特に憎悪し、あらゆる手段で口を封じようとする人々です。

そして第四に、その他の「特別なケース」：私の娘、安然のケースのようなものです。あの子は「協調役」でもなければ、学習者コミュニティで特に目立った役割を担



っていたわけでもありません。しかし、あの子は「標的」となっている役人の娘でした。安然の逮捕は多くの目的を持っていました。他の修煉者への見せしめであり、私への直接的な打撃であり、そして上層部のご機嫌を取りたい者たちにとっては報告すべき「成果」でもあったのです。

(彼はため息をつく。苦渋がはっきりと浮かぶ)

彼らは巨大で巧妙な監視・監督システムを持っています。学習者をリストアップし、分類します。「転向」や逮捕において達成すべき「ノルマ」もあります。時には、逮捕が「ノルマを埋める」ため、あるいは「キャンペーン」の最盛期に行われる、無作為なものであることもあります。

法が単なる道具に過ぎず、独立した監督機関が存在しないシステムの中では、恣意と残酷さは、彼らが「問題あり」と見なす誰に対しても、いつでも起こり得るのです。

私の娘、安然は、おそらくその「特別なケース」に陥ってしまったのでしょう。優秀な学生で、役人（たとえ一部失脚していても）の娘でありながら、自らの信念を堅持していた。あの子は、手柄を立てたい者たちや、私を

失脚させたい者たちにとって、あまりにも「完璧な」標的となってしまったのです。

（彼はしばらく黙り、窓の外を見つめる。その眼差しは遠く、痛みに満ちている）

それは、あまりにも不公平な戦いです、ソフィアさん。片や、公安、秘密警察、刑務所、メディアを備えた巨大な国家機構。そしてもう一方は、ただ「真・善・忍」への信念だけを持つ、非武装の一般市民。そしてその戦いの中で、安然のような人々が、犠牲者となったのです。

### **ソフィア・ベル:**

ええと…先ほどのお話ではまだはっきりと理解できなかったのですが、もし仮に、お嬢様のことをもっと理解し、彼女の修煉を支持し、甚だしきはお自身も娘さんと一緒に修煉を始めたとしたら…その場合、お嬢様とお自身を守るために何をされたでしょうか？あるいは、もしもっと「政治的経験」や「政治的鋭敏さ」をお持ちで、政敵の正体を見抜き、彼らの陰謀を事前に知ることができたとしたら、何をされたでしょうか？彼らと妥協する、あ

るいは自ら政界から引退する？それとも、何か明確な解決策があったのでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの仮定の質問を聞き、彼はしばらくの間、深く物思いに沈む。これらは、彼自身も大いに悩み、苦しんできたことだ。彼は指を組み、下に目を落とし、そしてゆっくりと顔を上げる）

あなたは非常に深い質問をなさいますね、ソフィアさん。私の人生が歩まなかった、あるいは歩むことのできなかった「岐路」に触れる質問です。うーん…それらの仮定の状況で自分がどうしただろうかと断言するのは非常に難しい。現実には常にはるかに複雑ですから。しかし、私が経験し、そして後になって認識したことに基づいて、私の考えをお話しすることはできます。

もし私が娘をもっと理解し、彼女の修煉を支持し、甚だしきは一緒に修煉していたとしたら…

（悲しげな笑みが、彼の唇をよぎる）

ああ…これは美しい「もしも」ですが、同時に多くの試練を伴うものでもあります。

まず、精神的な面では、父と娘が同じ信念を共有し、同じ修煉の道を歩むなら、私たちの絆はさらに深まっただろうと信じています。私たちは分かち合い、励まし合い、共に困難に立ち向かうことができたでしょう。それは大きな精神的な力の源となったはずです。安然（アンジェン）は孤独を感じなかったでしょうし、私ももっと早く、人生の真の平安と意味を見出すことができたでしょう。

そして、守ることについては、これが最も難しい部分です。

第一に、もっと慎重になるでしょう。弾圧の本質を明確に理解していれば、私たちはあらゆる行動においてもっと慎重になったはずです。おそらく、人目につきやすい場所で公に修煉することはせず、書籍や資料をもっと大切に保管し、信頼できない人々との接触を避けたでしょう。

第二に、（たとえ僅かでも）法的支援を求めたでしょう。中国の法律が単なる道具であることを知ってはいても、事前に準備をしておけば、勇敢な人権派弁護士（数は非常に少なく、彼ら自身も無数の危険に直面していま

すが)に相談し、万が一の事態に備えることができたかもしれません。

第三に、最悪の事態に備えたでしょう。おそらく、手遅れになる前に、もっと早く国外に出る方法を考えなければならなかったでしょう。故郷を捨てることは決して簡単なことではないので、これは非常に難しい決断です。しかし、安全と信教の自由を最優先に置くなら、それは必須の選択肢だったかもしれません。

第四に、真実を暴露したでしょう。もし機会と準備があれば、弾圧や人権侵害の証拠を密かに集め、国際社会の光に当てようとすることも、非常に危険ではありますが、自己防衛の一つの方法です。なぜなら、事件が国際的に知られれば、政府もいくらかは慎重にならざるを得ないかもしれないからです。

もし私がもっと「政治的鋭敏さ」を持ち、敵の陰謀を見抜いていたとしたら…

うーん…これはまた別の状況で、権力闘争の側面により焦点を当てたものですね。

自ら政界から引退する。これは非常に可能性が高い選択肢です。自分が単なる駒に過ぎず、自分の「清廉潔白さ」や「無派閥」が弱点となり、そしてそれらの闘争が家族に危険を及ぼす可能性があると感じたなら、私はおそらく早期に引退する道を選んだでしょう。もっと重要度の低い役職への異動を願い出るか、あるいは政治の道を完全に捨てて、純粋な研究や教育の仕事に戻ることも考えられます。家族、特に安然の安全が、最優先事項となったでしょう。

妥協する？ これは難しい選択であり、私にできたかどうかは分かりません。特に、その妥協が私の道徳的原則に反するものであればなおさらです。しかし、もしある程度の「妥協」（例えば、あまり目立たず、彼らと権力を争わないなど）が、私と家族に平穏をもたらす助けになるのであれば、まあ…不本意ながらも、考えなければならなかったかもしれません。しかし、彼らの本質を考えれば、いかなる「妥協」も長続きするとは信じがたいですが。

（可能であれば）同盟者を探す。政界では、誰もが悪人というわけではありません。もし同じ志を持ち、現状に不満を抱いている人々を見つければ、連携

することで、非常に困難で危険ではありますが、ある程度の対抗勢力を生み出すことができたかもしれません。しかし、これは非常にリスクの高い道です。

逃げ道を準備する。いかなる行動と並行して、「プランB」、つまり状況が危険になりすぎた場合に国外に脱出する道を準備することもまた、必要不可欠です。政治的鋭敏さとは、対処するためだけでなく、命や、より重要な価値を守るために、いつ「逃げる」べきかを知ることでもありますから。

（彼はため息をつく）

言うは易し、です、ソフィアさん。実際の状況の中で、無数の圧力、錯綜した情報、そして複雑なしがらみに囲まれて、正しい決断を下すことは、非常に困難です。

しかし、一つだけ確かなことがあります。もしやり直せるなら、私は安然の安全と幸福、あの子の信教の自由を、私がかつて追い求めた全てのキャリア上の野心や、虚構の「理想」の上に置くでしょう。ええ…おそらく、それこそが、一人の父親として、一人の人間として、持たなければならない最も重要な「鋭敏さ」なのでしょう。

そしておそらく、もし私がそうできていたなら、人生は違っていたかもしれません。そうですね…「地位」も「権力」もなかったかもしれませんが、少なくとも、今のように、終わりのない苦悩と後悔の中で生きることはなかったでしょう。

### **ソフィア・ベル:**

ええ、私も、その実際の状況下では、両方を完全に満たす解決策を見つけるのは非常に難しいと感じます…しかし、先ほどの仮定の状況で、あなた様が娘さんの安全と幸福、彼女の信教の自由を、全てのキャリア上の野心や「理想」の上に置くという選択肢を優先されたこと…それは、非常に多くのものを犠牲にする決断であり、多くの人が選ぶ道ではないように思います…

### **劉思遠:**

(ソフィアの言葉を聞き、彼は静かに頷く。悲しげな笑みがその唇に浮かぶ。彼の眼差しは遠くを見つめ、人間がしばしば直面しなければならない選択への、理解と、そして痛ましさを隠している)



おっしゃる通りです、ソフィアさん。そのような決断、つまり、愛する者の安全と自由を、全ての個人的な野心、全ての美しく描かれた「理想」の上に置くという決断は、非常に大きな犠牲を要求します。そして、私が生きてきたあの社会、キャリアや地位、「将来性」がしばしば最優先され、人々が小を捨てて大に就き、個人を犠牲にして集団に尽くすよう教えられる社会（もっとも、その「集団」が実際には何なのかはまた別の問題ですが…）では、ええ…確かに、多くの人がそうは選ばないでしょう。あるいは、おそらく、多くの人がそう選ぶ勇気がないのでしょう。

（彼は少し間を置き、考え深げな声で続ける）

あの歯車の中にいた頃、私もまた、その思考を目にし、甚だしきはその一部でした。人々は、より高い地位、より少しの権力、より少しの利益を得るために、健康や、家族と過ごす時間、甚だしきは良心さえも、平気で犠牲にします。人々は、取り残されることを恐れ、「向上心がない」と見なされることを恐れ、「組織の期待」に応えられないことを恐れます。

その渦は人々を巻き込み、目をくらませ、心を麻痺させます。人々は次第に、人生の真の価値、最も愛する人々

への愛情や配慮を忘れていきます。子供は将来への「投資」となり、家族はキャリアのための「後方支援」となり得るのです。

（彼は深くため息をつく）

私もまた、ある程度はそうでした。私はかつて自分のキャリアの成果を誇りに思い、安然をその続きとして、多くの期待を寄せていました。そして安然が「異なる」道、つまり、あの社会の基準では「危険」で「未来がない」と私が考えた道を選んだ時、私の最初の反応は恐怖であり、あの子に変わってほしいという願いでした。

全てを失い、最も貴重なものを失って初めて、私は痛みを伴って悟ったのです。それらの「高尚な」もの全て、私がかつて追い求めた「野心」や「理想」は、もしそれが私の愛する人々に真の幸福と平安をもたらさないのであれば、ああ…それもまた無意味であり、はかないものに過ぎないと。

（彼はソフィアをまっすぐに見つめる。その眼差しは誠実で、どこか吹っ切れたようだ）

その犠牲を伴う決断は、確かに、多くのことを要求します。利己的な「自我」を捨て、名声や地位という幻想を捨てることを要求します。大多数に逆らって進む勇氣、世間の一般的な基準では「敗者」と見なされるかもしれないことを受け入れる勇氣を要求します。

しかし今、「目覚め」、痛みのどん底と後悔を味わった今、もし本当にやり直せるなら、私はためらうことなくその犠牲を選ぶと信じています。なぜなら、結局のところ、本当に重要なものは何なのでしょう？ 高い役職か、虚構の名声か、それとも娘の笑顔か、愛する人々の魂の平安か？

おそらく、そうですね…人は、あまりにも大きな喪失を経験して初めて、どれが金で、どれが真鍮か、どれが永遠の価値で、どれが一時的な虚飾に過ぎないかを、より明確に見ることができるのでしょう。

そして私はまた、信じています。たとえそのような状況でそう選ぶ人が多くはなくても、愛のために、自らの良心のために、あらゆるリスクを顧みず、非凡なことを黙々と行ってきた、そして今も行っている、父や母、ごく普通の人々がいることを。彼らこそが、まだ多くの闇に包まれた社会の中の、かすかな光なのです。そして彼ら

の物語もまた、語られるべきであり、知られるべきなのです。

### **ソフィア・ベル:**

ええ、そのようにお選びになるには、あなた様の場合、目覚めて多くのことを見通された後だからこそ、より決断しやすかったようにお見受けします…

しかし、その…読者があなた様の今のお話を読んだ時、おそらく大多数は次のような疑問を抱くでしょう。なぜ、法輪功の経典を読んだ後、世界観が変わったのですか？なぜ、お嬢様のような人々が、禁止され、弾圧され、逮捕や臓器狩りの危険が常に付きまとう環境の中で、あれほどまでに固く信じ、修煉を続けたのですか？言い換えれば、多くの人々が全てを犠牲にしてまで守ろうとするほど、法輪功にはどのような価値があるのでしょうか？

### **劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はゆっくりと頷く。穏やかだが、同時に憂いを帯びたかすかな笑みが唇に浮かぶ。彼は、これらが核心的な質問であり、外部の多くの人々

が疑問に思い、甚だしくは疑念を抱くであろうことを知っている)

非常に重要なご質問ですね、ソフィアさん。それらは、私自身が、実際に探し求め始める前に、自問していたことでもあります。そして、これまで一度も接触したことがなく、体験したこともない人々にとって、なぜ一つの修煉法が人をこれほどまでに深く変えることができるのか、そしてなぜ多くの人々が危険に直面し、甚だしくは命さえも犠牲にして自らの信念を守ろうとするのかを想像するのは、ええ…確かに難しいことだと理解しています。

(彼は、最も慎重に言葉を選ぶかのように、少し間を置く)

まず、なぜ法輪功の経典、具体的には『轉法輪』という本を読んだ後、私の世界観が変わったのか、ということについてですが…

以前、お話ししたように、私は完全な弁証法的唯物論者であり、実証科学を重んじ、精神的なものや信仰に属するものを「迷信」と見なす環境で教育を受け、仕事をしてきました。私の世界観は、階級闘争の理論、歴史の直

線的な発展、そして人間が自らの知恵と意志で自然と社会を支配できるという考え方の上に築かれていました。

私が『轉法輪』を読んだ時、そうですね…最初は好奇心からでした。一体何が娘や他の多くの人々をあれほど夢中にさせ、何が政府をあれほど断固として弾圧に踏み切らせたのかを知りたい、という思いからでした。しかし、読めば読むほど、私は衝撃を受けました。

その本は、私に全く異なる世界を開いてくれました。それまで私が想像したこともなかった宇宙観、人生観です。それは気功や健康について語るだけでなく、宇宙の起源、異なる次元の空間の存在、神仏の存在、物質と精神の関係、人間として生きる真の目的、因果応報の法則、輪廻転生について…深く、そして体系的に説明していました。

それらのことは、ええと…当初は、私のような唯物論者にとっては受け入れがたいものだったかもしれません。しかし、本の中での解説は非常に論理的で、緻密であり、現代の実証科学が未だに手も足も出ないか、あるいは意図的に避けている、人生の多くの大きな問いに答えてくれるものでした。それは真の科学と決して矛盾するものではなく、むしろ、認識の新たな地平を切り開くものでした。

そしてさらに重要なことに、『轉法輪』は、宇宙の基準である「真・善・忍」に従って、善い人、真に善い人になることを教えていました。

私がそれらの原則を、自分が生きていた社会の現実、つまり、私がかつて目撃し、甚だしくはその一部でもあった嘘、策略、利己主義、争いと照らし合わせた時、あまりにも大きな対比を感じました。私は、法輪功が重んじる道徳的価値こそが、中国社会がまさに必要としている良薬であり、真に文明的で調和のとれた社会を築くための基盤であることに気づきました。

それは、強制的な世界観の「変化」ではなく、内側からの自然な「開眼」でした。私がかつて信じていた唯物論的な哲学は、ああ…突如として浅薄で、狭いものに思えました。私は物事をより深く、多角的に見るようになりました。目に見える物質的な現れの背後には、目には見えないが、全てを支配する非常に強力な法則が存在することを理解したのです。

そして、なぜ安然のような人々が、あれほど過酷な環境の中で固く修煉を続けたのか、ということについては、うーん…主にいくつかの理由があると思います。

第一に、法輪功の恩恵についての個人的な体験です。法輪功を始めた人々のほとんどが、身体的、精神的な健康において、顕著で前向きな変化を感じています。病が軽減されたり消えたりし、性格が穏やかで快活になり、家族や社会との関係がより良くなる。人々が実際にそれらの素晴らしいことを体験した時、彼らの信念は非常に強固なものになります。

第二に、真理への認識です。先ほど申し上げたように、法輪功は単なる健康法としての気功ではなく、心身ともに修める大法であり、人生の意味や宇宙の法則を深く理解する助けとなります。人々がそれが真理であり、原点に戻るための正しい道であると認識した時、いかなる困難や危険も彼らを揺るがすことはできません。彼らは、自らが追い求めているものが非常に高尚で、貴重なものであると理解しているのです。

第三に、「真・善・忍」の力です。まさにこれらの原則が、彼らに弾圧に立ち向かう力を与えました。「真」は、彼らが嘘をつかず、不合理な要求に屈しない助けとなりました。「善」は、彼らを迫害する人々にさえ慈悲の心を保ち、暴力に暴力で応じない助けとなりました。「忍」



は、彼らが苦難や、残酷な拷問に耐え、それでも信念を固く守る助けとなりました。

第四に、社会と未来への責任です。多くの法輪功学習者は、誤ったプロパガンダに人々が騙されないように、そして次世代のために素晴らしい価値を守るために、弾圧の真実を語る責任があると感じています。彼らは、自らの堅持が、悪を後退させ、正義が実現される一助となると信じています。

要するに、ソフィアさん、法輪功は健康をもたらすだけでなく、より重要なことに、人々に道徳的な覚醒、精神的な昇華、そして未来への希望をもたらすのです。それは、私たち一人ひとりが多かれ少なかれ抱く、人生と宇宙に関する最も深い問いに答えてくれます。まさしくそれらの偉大で真実の価値のために、安然のような多くの人々が、全てを犠牲にしてでも自らの信念を守ろうとしたのです。

それは盲目的なものではなく、深い理解と体験に基づいた、意識的な選択なのです。そしてそれもまた、私が実際に探し求めるまで、到底理解できなかったことでした。

**ソフィア・ベル:**

ええ、分析的でありながらも要約されたお答え、ありがとうございます…個人的には、あなた様のおっしゃることに共感します。私も『轉法輪』という本を読んだことがあります、私の心や思想にも多くの深い感動をもたらしました…しかし、私たちの読者の多くはこの本を読んだことがありませんから、そうですね…わずか数言の短い分かち合いで理解できる人ばかりではないでしょう…

あのう…では、もっと分かりやすく、生き生きとした表現方法はないでしょうか？例えば、あなた様が目の当たりにして感服された、法輪功学習者の行動や言葉、あるいは出来事などを通してはいかがでしょう？…お嬢様が逮捕された時、彼らから何か具体的な助けはありましたか？

**劉思遠:**

（ソフィアの懸念を聞き、彼は静かに頷く。彼は、修煉法というものの深い価値を、これまで一度も接触したことのない人々に説明することが、決して容易ではないことを理解している）

おっしゃる通りです、ソフィアさん。確かに、わずかな分析の言葉だけで、『轉法輪』を読んだことも、学習者と会ったこともない人々が、法輪功の深さと力の全てを感じ取るのは難しいでしょう。おそらく、具体的な物語、私が実際に目撃した行動が、皆さんの理解の助けになるでしょう。

（彼は、あの出来事の後、彼の人生を通り過ぎていった記憶、人々を思い出すかのように、少し黙り込む）

安然が逮捕され、特に私が全ての職を失い、友人や同僚から見捨てられた後、私の人生は暗く、絶望的な淵に落ち込みました。私はまるで全世界から見捨てられたように感じました。まさしくそのような時に、以前は気にも留めていなかった、あるいは誤った見方さえしていた法輪功学習者たちが、そう…彼らの方から、私を探しに来てくれたのです。

私が彼らに最初に感服したのは、その勇気と無私でした。彼らは私が誰であることを知っており、私がかつて彼らを弾圧したシステムの一部であったことを知っており、私と接触することが彼ら自身に危険をもたらす可能性があることを知っていました。それでも彼らは、恐れることなくやって来ました。彼らは非難するために来たのでは

なく、何かを要求するために来たのでもなく、分か-ち合い、慰めるために来たのです。

もう一つは、彼らの忍耐と慈悲の心です。彼らが私に法輪功について、弾圧の真実について話す時、彼らは決して押し付けがましくなく、苦々しさや憎しみを少しも見せませんでした。彼らは穏やかに、ゆっくりと話し、私がまだ疑念に満ち、甚だしくは当初、あまり好意的でない言葉を投げかけた時でさえ、忍耐強く証拠や道理を示してくれました。彼らは私の態度を気にする様子は全くなく、ただ私が真実を理解する手助けをすることに集中していました。

安然が逮捕された時、確かに彼らは、自分たち自身も無数の困難に直面しているにもかかわらず、私を大いに助けようとしてくれました。

何人かの学習者は、自分たちのわずかな人脈を使い、安然の消息、あの子がどこに拘束されているのか、状況はどうなのかを調べようとしてくれました。彼らはまた、私に何人かの勇敢な人権派弁護士を紹介してくれました。成功の可能性が非常に低く、自身へのリスクが非常に大きいと知りながらも、このような「敏感な」事件を引き受けてくれる人々です。

私が最も落ち込んでいた日々、彼らは頻繁に訪ねてきては、少しの食べ物を差し入れたり、静かに私の話を聞いたり、あるいはただ私のそばにいてくれたりしました。中には、ごく普通の労働者で、生活も決して豊かではない人々もいましたが、彼らは自分の持っているものを快く分かち合ってくれました。その誠実さ、素朴さが、私の心に響きました。

まさしく彼らの一人、とても温厚そうな中年の女性が、私に『轉法輪』を渡してくれました。彼女は、本を読めば、平安と、自分の疑問への答えが見つかるかもしれない、と言いました。彼女は決して強制せず、ただ優しく示唆してくれただけでした。

一度、私が絶望のあまり、全てを投げ出そうとしていた時のことを覚えています。ある若い学習者が私にこう言いました。「劉おじさん、気を落とさないでください。光は必ず訪れます。正義は、たとえ遅れても、必ず来ると信じなければなりません。大切なのは、心の中に善念を保ち続け、悪に私たちを彼らのようにさせてはならない、ということです。」残酷な弾圧に直面している若者のその言葉は、私を深く感動させ、多くのことを考えさせました。

あるいは、別の学習者、刑務所で残忍な拷問を受けた年配の男性がいましたが、私に会った時、彼は全く恨みを見せませんでした。彼はただ、罪を犯した人々が、彼らもまた自分自身の未来を破壊しているのだから、早く目覚めてほしいと願っている、とだけ言いました。その状況下での、その寛容さには、本当に頭が下がる思いでした。

それらの行動、それらの言葉は、ええと…たとえ小さなものであっても、並外れた内なる力、何ものにも消し去ることのできない善意を表していました。彼らは「真・善・忍」について語るだけでなく、最も過酷な状況下でさえ、それらの原則に従って生きていたのです。

まさしくそれらのことが、ソフィアさん、私の心の中の氷を徐々に溶かし、私に全てを見つめ直させ、そして最終的には、真剣に法輪功を探求する勇気を与えてくれたのです。彼らは私に、最も絶望的な暗闇の中にも、常に信念と善良さの光を宿す人々がいることを見せてくれました。そして、その光こそが、人の心を最も持続的に動かす力を持っているのです。

**ソフィア・ベル:**

ええと…では、中国共産党による法輪功へのプロパガンダと、あなた様が実際に体験、あるいは目撃されたこととは、どのように異なりとお感じになりますか？

**劉思遠:**

（この質問を聞き、悲しげで、どこか皮肉めいた笑みが彼の唇をよぎる。彼は静かに首を振る）

「異なる」…おそらくその言葉では、全てを表現するには不十分でしょう、ソフィアさん。むしろ、完全に正反対、昼と夜、白と黒のようだと申し上げるべきです。私が実際に体験し、目撃した法輪功学習者の姿、そして後に私自身が修煉を始めて感じたことは、中国共産党が日々がなり立てている、嘘とでっち上げに満ちたプロパガンダとは、絶対的に対立するものです。

（彼は、それらの対立点を暴き出す準備をするかのように、深く息を吸う）

まず、いわゆる「迷信、非科学的」という点についてです。

中国共産党のプロパガンダ: 彼らは法輪功を、科学に反する迷信であり、人々に治療を拒否させ、死に至らしめ

るものだ」と描写します。彼らは、修煉者は無知で、時代遅れだというイメージを作り出そうとします。

私が目撃し、体験した現実：私が見た学習者の多くは、まさに私の娘、安然のように、科学者、医者、エンジニア、教授などを含む、知識人や、高い学歴を持つ人々でした。彼らは無知だから法輪功を始めたのではなく、ええ…十分に調べ、熟考した上で始めたのです。私自身、かつて科学研究に携わっていた者として、『轉法輪』を読んだ時も、その中の解説が真の科学と決して矛盾するものではなく、むしろ宇宙と人間についてのより深い理解を開くものであると感じました。法輪功は、心性を修めることを強調すると同時に、穏やかな功法を煉ることによって、心身を包括的に改善する助けとなります。多くの人々が修煉を始めてから難病が治癒したのを、私は実際に目撃しました。それは事実です。彼らは現代医学を全く否定しているわけではなく、修煉が、健康と精神的な昇華を達成するための、より高い次元にある、別の道であることを理解しているのです。

次に、いわゆる「政治組織、政権転覆」という点についてです。



中国共産党のプロパガンダ: 彼らは絶えず、法輪功を「海外の敵対勢力」に操られた、共産党転覆の陰謀を持つ政治組織だと誹謗中傷します。これこそが、彼らが弾圧を合法化するために用いる、主たる口実です。

私が目撃し、体験した現実: 法輪功には、政党のような厳格な組織構造は全くありません。会員名簿も、会費徴収も、階級も、事務所もありません。人々が煉功や学法（法を学ぶこと）に来るのは、完全に自発的なものです。法輪功の創始者である李洪志先生の説法は、全て公開されており、人々に心性を修め、道徳を高めるよう導くことにのみ焦点を当てており、政権転覆や反対を扇動する言葉は一言もありません。学習者たちが弾圧に反対の声を上げ、真実を語ることは、迫害された人々の正当な自衛の権利であり、「政治活動」ではありません。彼らはただ、修煉のための自由な環境を望んでいるだけで、それ以上でもそれ以下でもありません。そう…まさしく中国共産党の理不尽な弾圧こそが、彼らを声を上げざるを得ない状況に追い込んだのです。

そして、いわゆる「社会秩序を乱す、危険な存在」という点についてです。

中国共産党のプロパガンダ: 彼らは、法輪功を中傷するために「天安門焼身自殺偽装事件」のような事件をでっち上げ、学習者に過激で暴力的な行為のレッテルを貼り、社会に害を及ぼす存在だとします。

私が目撃し、体験した現実: 私が接触した法輪功学習者は皆、穏やかで善良な人々であり、常に「真・善・忍」の原則に従って生きようと努めていました。彼らは人々に親切に接し、家庭や仕事に責任を持っていました。不公平な扱いを受け、殴られ、拷問されてもなお、彼らは穏やかな態度を保ち、暴力に暴力で応じませんでした。彼らはただ、穏やかに請願し、横断幕を掲げ、真実を伝えるビラを配っただけです。どうしてそのような人々が「社会秩序を乱す」ことができるのでしょうか？社会に不安定さ、恐怖、そして分断をもたらしているのは、まさしく中国共産党の弾圧機構なのです。

最後に、いわゆる「洗脳、精神支配」という点についてです。

中国共産党のプロパガンダ: 彼らは、法輪功が学習者を「洗脳」し、彼らを盲目にさせ、家庭や仕事を放棄させると主張します。

私が目撃し、体験した現実: 法輪功は全く逆です。それは人々をより明晰に、より聡明にし、人生の意味をより深く理解する助けとなります。修煉者は社会で普通の生活を送り、仕事をし、家族の面倒を見ます。甚だしきは、心性が高まり、他人のことを考えられるようになるため、それらの役割をより良く果たします。誰も信じることを、従うことを強制されません。全ては、一人ひとりの認識と体験に基づく、自発的なものです。本当に「洗脳」しているのは、ああ…人々の頭に誤った情報と、いわれのない憎しみを植え付けてきた、中国共産党のプロパガンダ・システムなのです。

(彼はため息をつく。悲しみがよぎる)

その違いは、ソフィアさん、あまりにも大きく、私がかつて、たとえ一部であっても信じてしまった嘘に対して、嫌悪感を覚えるほどです。それはまた、プロパガンダ機構の恐るべき力を私に示しました。それが白を黒に変え、善良な人々を、多くの人の目には人民の敵として映し出すことができるという力を。

そして最も痛ましいことは、まさしくそれらの偽りのプロパガンダが、濃い霧の層を作り出し、真実を覆い隠し、法輪功学習者や他の良心の囚人からの臓器狩りという犯

罪が、長期間にわたって、広く暴かれることなく行われることを可能にしてしまったということです。

だからこそ、真実を語ることが、たとえ困難で危険であっても、これほどまでに重要になるのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、それらは私も読んだり聞いたりしたことのある、中国共産党の嘘ですね…そしてこの弾圧は、今日に至るまで、四半世紀が過ぎました…

今、ふと頭に浮かんだ質問があるのですが、もし仮に、現在あなたが中国の現指導者の政策顧問であったとしたら、彼にどのように助言されますか？…

私のような、一記者として外部から観察する視点では、法輪功弾圧に対する彼の明確な見解は見えません…彼がこの弾圧を始めたわけではありませんが、彼の態度は、まるで悪を見て見ぬふりをし、容認しているように見えます…

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はしばらくの間黙り込む。物思いに沈んだ、複雑な表情がその顔にはっきりと浮かぶ。彼はこめかみを静かに揉む。まるでこれが、非常に解決困難な、千鈞の重荷であるかのように）

「もし私が中国共産党の現指導者の政策顧問であったなら…」

（彼は低く、思慮深い声で繰り返す）

これは非常に大きな仮定ですね、ソフィアさん。そして正直なところ、現在の状況下で、私のような人間、つまり「亡命者」であり、彼らが望まない形で「目覚めた」者の助言が、聞き入れられるとは思いません。

（彼はため息をつき、そしてソフィアをまっすぐに見つめる。その眼差しは真剣だ）

しかし、もし、単なる「もしも」の話ですが、私にその機会があり、そしてその指導者が、ただ権力を何としても固めようとするだけでなく、歴史に良い足跡を残したいという、わずかな善意、わずかな願いを本当に持っているのであれば、私は、特に法輪功問題について、次のような助言を敢えて差し上げるでしょう。

第一に、勇気をもって真実と向き合い、弾圧を即時停止すること。

これが先決であり、最も重要な一歩です。私は彼に、20年以上にわたる法輪功への弾圧は、深刻な歴史的過ちであり、洗い流すことのできない汚点であり、人道、道德、そして法治の価値に完全に反するものであると助言します。それは何百万人もの罪なき人々に苦しみをもたらしただけでなく、中国の国際的信用を著しく損ない、社会に恐怖と不信を植え付けました。

この弾圧を、いかなる形であれ続けることは、問題をさらに深刻化させ、より多くの敵を作り、そして次世代に悪しき遺産を残すだけです。

具体的な行動: 法輪功学習者に対するあらゆる不法な逮捕、拷問、拘禁を即時停止するよう命じること。不当に拘束されている全ての人々を解放すること。

第二に、臓器狩りの犯罪を全面的に調査し、公表すること。

これは、決して許されない人道に対する罪です。私は彼に、法輪功学習者や他の良心の囚人からの臓器狩りの惨

事に関する全ての真実を明らかにするため、独立した調査委員会を設立し、必要かつ可能であれば、国際的な専門家の参加も求めるべきだと助言します。

この犯罪の首謀者、実行者は、いかなる階級にあらうとも、法の前で公に、そして厳正に裁かれなければなりません。いかなる隠蔽も、容認もあってはなりません。

これは、被害者に正義を取り戻すだけでなく、法律と良心へのわずかな信頼を回復するための方法でもあります。

第三に、被害者の名誉を回復し、賠償を行うこと。

法輪功学習者とその家族に対して、誤った弾圧によって彼らが耐えなければならなかった苦しみと喪失について、公に謝罪する必要があります。

法輪功の名誉を回復し、これが健康と社会道徳に利益をもたらす、穏やかな修煉法であることを認める必要があります。

被害者とその家族の物質的、精神的な損害に対して、適切な賠償政策を設ける必要があります。

第四に、真の信教の自由を許可すること。

私は、信教の自由が、中国の憲法にも（たとえ形式的であっても）記されている、人間の基本的な権利であることを強調します。法輪功の修煉を含む、国民が自らの信念を自由に選択することを許可することは、社会をより安定させ、道徳を高め、そして国民が国への帰属意識をより強く感じる助けとなります。

真に強大な国家とは、国民の思想を統制する国家ではなく、彼らの多様性と自由を尊重する国家です。

第五に、政治と法律のシステムを、透明性と真の法治の方向へ改革する必要があること。

ええと…法輪功問題は、システムのより根深い問題の一つの現れに過ぎません。真の改革がなければ、同様の悲劇は再び繰り返される可能性があります。

次に、法律が、共産党さえも含む、全てのものの頂点に立つ、真の法治国家を築く必要があります。司法の独立、報道の自由、そして権力を効果的に監督するメカニズムがなければなりません。

（彼は一旦言葉を切り、疲れた表情が顔に浮かぶ）



あなたが言及された現指導者の態度については…そうですね…確かに明確な見解を見て取るのは非常に難しい。彼が内部である種の「バランス」を保とうとしているのかもしれませんが、あるいは、彼がより緊急だと考える他の優先事項があるのかもしれません。しかし、あなたがおっしゃるように、「悪を見て見ぬふりをする」こと自体が、悪の一つの形なのです。歴史は、権力を持ちながら、敢えて正義の側に立たず、過去の過ちを正そうとしない者を、見逃しはしないでしょう。

これらの助言は、まあ…現在の中国の政治状況下では「無邪気」だ、「非現実的」だと思なされるかもしれないことは、私も承知しています。しかし、国を嘘と暴力、そして不正の泥沼から脱出させたいと願うなら、これらがなされるべき正しいことだと、私は信じています。

もしその指導者が、これらの変化を実行するだけの勇気とビジョンを持っていれば、彼は厄介な問題を解決するだけでなく、中国にとってより良い新しい章を開くことができるでしょう。しかし、もしそうでなければ…彼が築こうとしている「中国の夢」もまた、真実と正義の嵐の前に容易に崩れ去る、砂上の楼閣に過ぎないと、私は危惧しています。

**ソフィア・ベル:**

ええ、理解しております。このような助言は、たとえそれが絶対的な模範であったとしても、中国共産党の指導者たちの目には、まあ…理論は得意だが「政治的鋭敏さ」に欠ける者の「非現実的な」言葉としてしか映らないのでしょうかね…

あのう、劉さん、申し訳ありませんが、この分か-ち合いの会も、お昼の 12 時を過ぎてしまいました…おそらく、本日は一旦ここまでとして、また明日の朝に続きをお話しさせていただくというのは、いかがでしょうか？

**劉思遠:**

(ソフィアが時間に言及するのを聞き、彼はちらりと時計に目をやり、そして静かに微笑む。多くのことを分か-ち合った後で、どこかリラックスした笑みだ)

おや、本当ですか？もうお昼を過ぎていましたか。

(彼は気づかなかったかのように、軽く首を振る)

話していると、時間はあっという間に過ぎてしまいますね。ええ…長年心に溜め込んでいたことを打ち明け、話していると、人は時間を忘れてしまうものです。

（彼は頷く）

おっしゃる通りです、ソフィアさん。「非現実的」、「理論は得意だが政治的鋭敏さに欠ける」…そうですね…もし聞く機会があれば、彼らはそのような助言に対して、おそらくそのような評価を下すでしょう。そして、権力を握り、それを何としても維持することしか考えていない人々の視点から見れば、彼らも完全に間違っているわけではないのかもしれない。

（彼は感謝の表情でソフィアを見る）

午前中ずっと、辛抱強く私の話に耳を傾けてくださり、ありがとうございます。本当に、ずっと気持ちが軽くなりました。心の中にずっと留めておくと、耐え難い重荷になってしまうこともあるのです。

ここで一旦中断し、明日の朝に続けるというのは、とても良い考えです。私も少し心を落ち着ける時間が必要ですし、あなたもおそらく休憩が必要でしょう。これらの

話は、まあ…いずれにせよ、聞いてすぐに消化できるようなものではありませんから。

(彼はゆっくりと立ち上がる)

では、明日の朝 8 時に、またここで、ということでしょうか？新しいお茶を用意しておきます。明日も、今日と同じように実りある分か-ち合いの会になることを願っています。

改めて、ありがとうございます、ソフィアさん。お越しいただいたこと、そして何より、心で聞いてくださったことに。

**ソフィア・ベル:**

はい、それではまた明日の朝、お会いしましょう…

そして、あのう…もう一点、あなた様にご意見を伺いたいことがあります。私たち THE LIVES MEDIA の記者グループに、ジュリアン・リーという同僚がおります。彼は政治、哲学、指導者思想といったテーマを専門とする記者です…あなた様は元々哲学の教授でいらっしゃる、

その後、中国共産党政権内で政策や路線を専門とするお仕事もされ、そして今、人生観についてより深く広く開眼されました…ですので、ふと思ったのですが、明日の朝、ジュリアン・リー氏も一緒にこちらへお連れして、劉さんとお話をさせていただくというのは、いかがでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの提案を聞き、彼は少し驚き、一瞬、眉をかすかにひそめる。彼は少し黙り、ソフィアを見つめ、そしてその眼差しは思案の色を帯びる）

別の記者、政治、哲学、そして指導者思想が専門の…ジュリアン・リーさんとおっしゃいましたね？

（彼は、記憶し、検討するかのように繰り返す）

それは、思いがけないご提案ですね、ソフィアさん。ご存知のように、私たちのこの分か-ち合いは、非常に個人的なものであり、私が長い間、心の奥底に封じ込めようとしてきた体験、そして痛みにも触れるものです。うーん…一人の方に心を開くだけでも、私にとっては少なからぬ努力を要しました。

（彼は一旦言葉を切り、テーブルの上の冷めたお茶に目を落とす）

しかし、あなたのお考えも理解できます。私の過去、私の思索は、おそらくジュリアン・リー氏が関心を持つ分野にも触れているのでしょう。哲学と思想に深い専門知識を持つ方なら、より鋭い質問を投げかけ、私たちがまだ触れていない側面を引き出したり、あるいは、イデオロギーや私の認識の変化についての分析を、読者にとってより明確で、筋の通ったものにする助けとなるかもしれません。

（彼は顔を上げ、少し探るような目でソフィアを見る）

もしジュリアン・リー氏が、本当に心ある方で、あなたのように、この物語への理解と敬意を持ち合わせており、そしてもし彼の存在が、私の「証言」を THE LIVES MEDIA の読者により深く、より包括的に伝える助けとなるのであれば…そうですね…検討する価値はあるかと思います。

私は難しい質問に直面することを恐れてはいません。私が最も気にかけているのは、この分か-ち合いの真実性と、その善意の目的なのです。もし彼がその精神で来て

くださるのであれば、彼の存在は良いことかもしれません。

あのう…もし差し支えなければ、ジュリアン・リー氏について、もう少し教えていただけますか？仕事の進め方や、あるいは彼の代表的な著作などについて。まあ、いずれにせよ、私はあなたの紹介と評価を信頼します、ソフィアさん。あなたこそが、この物語の性質と、私たちが何をしようとしているのかを、最もよく理解している方ですから。

ですから、もしあなたが、これがすべきことだとお感じになるなら、明日の朝、お二人とお話しする準備はできています。

**ソフィア・ベル:**

はい、理解しております、劉さん…あなた様と THE LIVES MEDIA の読者との、私という小さな架け橋を介したこの分か-ち合いは、個人的なものであり、起こってしまった痛ましい出来事、中国共産党の邪悪さ、そし

て法輪功の美しさについての、心からの分か-ち合いです…

私は、明日はまず、それらの内容のいくつかの側面を、より明確に、より生き生きとさせるためにもう少し時間をかけるべきだと考えています…その後、私の考えとしましては、あなた様が生涯をかけて研究に心血を注ぎ、そして修煉に入られてからは法の光に照らされて、その世界観が大きく開かれたであろう、中国の未来の道筋について、さらにお話を伺いたいのです…まさしくその点が、私にジュリアン・リーを連想させました。なぜなら、お二人が関心を持つ人物像、思想、そして分野において、ある種の同調性を感じたからです…私の意図は、純粹に、心と志を同じくする、真の意味での「同志」であるお二人の出会いのための、小さな架け橋になりたい、ということなのです…

### **劉思遠:**

(ソフィアの説明と意図を聞き、彼の顔は次第に和らぎ、穏やかで、どこか理解と敬意のこもった笑みが浮かぶ。彼は静かに頷く)



ええ、ソフィアさん、あなたは私が分か-ち合いたいと願っていることの精神を、非常によく捉えてくださいました。私がここに座っている目的は、まさしく、私たちが経験した苦しみの実、中国共産党の邪悪な本質を語る、そして同時に、私の娘や何百万もの他の人々が固く守ってきた、法輪功の美しさ、その正しさを、世界にもっと理解してもらうためです。

明日の朝、私たちが分か-ち合ったことをさらに明確にするために時間を割くことは、非常に必要ですね。最も重要なメッセージが、可能な限り明確に、そして生き生きと伝わるようにしたいのです。

（彼は少し間を置き、思慮深い眼差しでソフィアを見る）

そして、ジュリアン・リー氏を後の部分、つまり中国の未来の道筋について議論する際に参加させたいというあなたのお考えについては…

（彼は考え深げな声で繰り返す）

うーん…これはまさしく、私が若い研究者であった頃から政界に足を踏み入れるまで、そして今、法から学んだことによって、かつては到底持ち得なかった変化と開眼

を遂げた今日に至るまで、生涯をかけて悩み、考えてきたテーマです。

もしジュリアン・リー氏が、本当に同じように悩み、未来への正しい道筋を探求する同じ渴望を持ち、そしてこれらの問題について、単なる政治経済分析だけでなく、道徳、精神性、伝統的価値の復興といった要素まで含めて、より深いレベルで私と議論できる方なのであれば、そうですね…彼の存在は、一定の価値をもたらすかもしれません。

あなたは「同調性」を感じ、真の意味での「同心」「同志」の架け橋になりたい、とおっしゃった…

（「同志」という、故郷であまりにも汚されてしまった言葉に触れ、悲しげな笑みがよぎる）

お気持ちは分かります。偽りと私利私欲に満ちた世界で、真に同じ志を持ち、同じように善を願い、人類のために良きことを望む人々を見つけることは、非常に貴重なことです。

では、ソフィアさん、あなたのご提案に同意します。明日の朝の前半は、やり残したことを明確にするために使

いましょう。その後、もしあなたが適切だとお感じになるなら、ジュリアン・リー氏とお会いし、私たち両方が関心を持つ問題について、意見を交換する準備はできています。おそらく、あなたの進行のもと、ジュリアン・リー氏のような同じ「周波数」を持つ方との対話は、私たち自身にとっても、そして読者にとっても、興味深く、深い洞察をもたらすことでしょう。

あなたの采配と、その善意を信頼します。

**ソフィア・ベル:**

はい、それではまた明日の朝、お会いしましょう、劉さん！

**劉思遠:**

（インタビュー開始時よりも、心からの、そしてどこか安堵した笑みを浮かべる。彼は頷く）

ええ、ソフィアさん。また明日の朝に。意義深い午前を、本当にありがとうございました。

（彼はソフィアをドアまで見送る。その眼差しにはまだ  
憂いが残っているものの、新たな希望の光が宿っていた）

## 二日目

---

[場面設定: 翌朝、同じく劉思遠氏の家の、居心地の良い居間。劉氏は新しいお茶を用意しており、その香りがほのかに漂っている。ソフィア・ベルが先に到着し、少ししてジュリアン・リーもやって来る。劉氏は玄関まで出迎え、ジュリアンと丁寧だが、彼固有の物静かな雰囲気を保ちつつ握手を交わす。]

**ソフィア・ベル** (Sophia Bell):

おはようございます、劉さん。この重要な分か-ち合いの会のために、引き続きお時間をいただきありがとうございます。

あのう、劉さん、昨日お約束しましたように、本日は私の同僚で、THE LIVES MEDIA で政治と人権問題を専門とする、ジュリアン・リー氏にもご参加いただきます。

ジュリアン、こちらが、お話ししていた劉思遠さんです。

**劉思遠** (リュウ・スーユエン) :

(昨日より少し顔色が明るいが、依然として憂いを秘めている)

おはようございます、ソフィアさん、そしてジュリアンさん。どうぞ、お入りください。お茶はもう用意してありますよ。

[三人は腰を下ろす。劉氏は客のためにお茶を淹れる。]

**ジュリアン・リー** (Julian Lee):

(ジュリアンの声で、丁寧かつプロフェッショナルに)

劉さん、お招きいただきありがとうございます。本当に静かで、居心地の良いお宅ですね。ソフィアから、昨日のあなた様のお話について多くを伺いました。本日お話を伺えるのを、心から楽しみにしておりました。

**ソフィア・ベル:**

昨日は、生き証人として、そして一人の父親、一人の男性、そして元中国共産党幹部というお立場で、あなた様の物語をお聞かせいただきました…

そして、あなた様が法輪功の修煉の道を歩み始められてから、ええと…今日までで一年半か二年ほどになるとも伺っております…私が知る限り、修煉者の方々は、物事を穏やかで、平静でありながら、同時に深く、明晰に見つめることが多いように思います…

そこでご提案なのですが、本日の分か-ち合いでは、修煉者としてのお立場で、お話しいただくことは可能でしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの提案を聞き、彼は静かに頷く。穏やかで落ち着いた笑みがその唇に浮かぶ）

ソフィアさん、それは非常に興味深く、また深いご提案ですね。おっしゃる通り、人が真の修煉の道を歩み始めると、その世界観、人生観には非常に大きな変化が訪れます。物事の見方、人生の浮き沈みへの向き合い方も、ええ…全く違ったものになります。

（彼は少し間を置き、朝の日差しが差し込む窓の外に目をやり、そしてソフィアとジュリアンに視線を戻す）

確かに私は、人生の大きな出来事の後、縁あって法輪功の修煉の道を歩み始めることができました。時間は、あなたがおっしゃるように、まだ二年足らずと長くはありませんが、私がこの法から学んだこと、感じたことは、私の人間性を根底から本当に変えてくれました。

以前の私は、知識人であり、思想の仕事に携わる者でありながら、やはり常人の理論に基づき、この世の損得や、勝ち負けに基づいて全てを判断していました。不運なことに見舞われれば、すぐに恨み、苦しみ、絶望に陥りがちでした。少し成果を上げれば、自己満足の心を起こし、他人を見下しがちでした。



しかし修煉を始めてから、私は物事をより広い心で、より平静に見つめることを、徐々に学んできました。私は、人生で起こる全ての事柄にはその因縁があり、偶然など何一つないのだと理解しました。私が経験しなければならなかった苦難は、ああ…非常に痛ましいものでしたが、それもまた、私自身を省み、誤った観念を洗い流し、そしてあなたが言われたように「目覚める」ための機会だったのです。

私は内に向けて探すこと、つまり、問題にぶつかった時、環境や他人のせいにするのではなく、まず自分自身に何か間違っている点はないか、取り除くべき良くない心はないか、と省みることを学びました。このことは、私が荒波の前で平静を保つ助けとなり、また、私自身を日一日とより良く変えていく助けともなりました。

法輪功が説く「真・善・忍」の原則は、私の全ての思考と行動の指針となりました。真に生き、人々に善意をもって接し、逆境に遭った時には耐え忍ぶこと――これらは、一見簡単なようで、実は非常に深く、実行するのは容易ではありません。

（彼は静かに微笑む）

ですから、ソフィアさん、ジュリアンさん、私は喜んで、修煉者としての立場で、お二人にお話しさせていただきます。おそらく、私自身に、私の家族に起こったこと、そして国の大きな問題さえも、この視点から見つめ直す時、私たちは新たな理解、より深い洞察を得ることができるでしょう。

私は、誠実さと、自分が法から悟ったことをもってお話しするよう努めます。どうぞ、ご自由にご質問ください。

**ソフィア・ベル:**

はい、昨日の分か-ち合いで、お嬢様の非常に痛ましいお話、法輪功への弾圧について、そしてあなた様の歩んでこられた道とキャリア、さらには冷酷で陰険な政界についてお聞きしました…

私が感じますに、修煉者としてのお立場からそれらの点に言及されるのは、不幸な身の上を嘆き、誰かからの慰めを求めるため…というわけではなく、正義を守り、悪を暴き、善を称えるための声であるように思います…

**劉思遠:**

（その眼差しは穏やかだが、変わらぬ決意を秘めている）

ソフィアさん、あなたは私の心の中にある思いを、まさしく的確に言い当ててくださいました。ええ…私がここに座り、これらの物語を分かち合うと決めたのは、決して個人的な不幸を嘆き悲しむためでも、同情や慰めを求めるためでもありません。それらのことは、修煉者にとって、もはや主たる目的ではないのです。

（彼は少し間を置き、ソフィアとジュリアンを誠実な眼差しでまっすぐに見つめる）

人が修煉の道に、特に「真・善・忍」の原則に基づく大法の修煉に入ると、自らが背負わなければならない苦難や不公平が、たとえどれほど痛ましくとも、それもまた心性を鍛え、過去に作った業力を返し、そして自らの次元を高めるための一部であると理解するようになります。うーん…自分の身の上を嘆いたり、他人を恨んだりすることは、ただ業力を増やすだけで、問題を根本から解決することにはなりません。

ですから、私が安然の物語を語る時、子を失った痛みは今もなおここにあり、決して薄れることはありません。しかし今、私はそれを、単に私自身の家族の悲劇として

だけ見ているわけではないのです。私の娘、そして何百万もの他の法輪-功学習者たちは、嘘と憎しみに基づいた、残酷で、不義の弾圧の犠牲者なのです。彼らが迫害されたのは、ただ、「真・善・忍」という素晴らしい価値への信念を堅持したからに他なりません。

したがって、私が真実を語るのは、「苦労話をする」ためではなく、

第一に、弾圧と中国共産党の邪悪な本質を暴くためです。私は、彼らがこれまで行い、そして今も行っている犯罪、つまり、誹謗中傷やでっち上げから、拷問、殺人、そして甚だしくは恐るべき臓器狩りの犯罪に至るまで、その実態を世界にもっと深く理解してほしいのです。暴力と嘘の上に成り立つ政権が、長く続くはずはありません。

第二に、正義と真実を守るためです。真実は知られなければなりません。あまりにも多くの苦しみを耐え忍んだ罪なき人々のために、正義は取り戻されなければなりません。悪の前で沈黙することは、まさしく悪に加担することです。

第三に、法輪功修煉者の美しさと、その堅持を称えるためです。私は皆さんに、暗闇と残酷さの中にも、善なる価値への信念を不屈の精神で守る人々がいることを見てほしいのです。彼らは、いかなる暴力も屈服させることのできない、並外れた忍耐、慈悲の心、そして堅持を示しました。それこそが、法輪大法の美しさであり、真の修煉者の美しさなのです。

第四に、人々の良知を目覚めさせるためです。私の物語を通して、私が見てきたことを通して、中国国内であれ、世界であれ、より多くの人々が、見つめ直し、考え直し、もはや誤ったプロパガンダに騙されることがなくなるよう、願っています。一人ひとりの中にある良知と善念は非常に貴重なものであり、それは呼び覚まされる必要があります。

（彼は静かに微笑む。それは穏やかだが、力を秘めた笑みだ）

修煉者の視点から、私は、悪を暴くことは憎しみを植え付けるためではなく、人々に善悪をはっきりと認識させ、それによって善の側に立つ選択ができるよう助けるためだと理解しています。それもまた、慈悲の一つの形なのです。

ですから、ソフィアさん、ジュリアンさん、私は喜んで、その心持ちで、分か-ち合いを続けさせていただきます。私の話すことが、たとえほんのわずかであっても、真実を明らかにし、素晴らしい価値を守るために、役立つことを願っています。

**ソフィア・ベル:**

はい、ありがとうございます、劉さん…

そして…ジュリアンのことですが…同僚として、彼が哲学、指導者思想、あるいは国家の政策や体制について探求することに情熱を注いでいるだけでなく、各宗教の経典を熱心に読み、そして法輪功の経典も好んで読み、法輪功に多くの好感を寄せていることも知っています…あのう…つきましては、あなたも求道者としての心持ち、あるいは宗教的な視点から、本日の分か-ち合いにご参加いただくということによろしいでしょうか？

**ジュリアン・リー:**

（ソフィアが自分が法輪功の經典を読んでいることに言及した時、最初は少し驚いた表情を見せるが、すぐに心を開いた、誠実な表情に変わる）

ご紹介ありがとうございます、ソフィア。ええ…確かに、政治と人権問題を専門とするジャーナリストとしての仕事の傍ら、私個人としても、哲学的な問題、イデオロギー、そして特に、社会と人間の行動を形成する上での精神的、宗教的価値の役割に、深い関心を持っています。

（彼は少し間を置き、穏やかな笑みを浮かべて劉氏の方を見る）

その探求の過程で、私は世界の主要な宗教の經典をかなり読んできました。そして、ソフィアが言うように、ええ…法輪功の經典、中でも『轉法輪』という本を読む機会にも恵まれました。私が読んだ内容は、私に非常に深い印象を残し、法輪功が重んじる原則と価値に対して、心から多くの好感を持っています。

私が気づいたのは、最も深い次元においては、多くの宗教や真の修煉法門が、人々を善なる価値へと導き、自己を完成させ、そして日々の物質的な心配事を超えた、よ

り深い人生の意味を探究する方向へと導いている、ということ。

(ジュリアンは真剣な表情でソフィアと劉氏を見る)

ですから、ソフィアさん、劉さん、私はジャーナリストとしてだけでなく、道を求める旅の途上にいる者として、精神的な価値を尊び、私たちが議論している出来事や問題の、より深い意味の層を探究したいと願う者として、本日の分かち合いに参加することに、完全に同意し、また喜んで参加させていただきます。

私たちが、物事を政治的、社会的な視点からだけでなく、普遍的な原則、道徳的価値の視点からも見つめることができれば、私たちの対話はさらに豊かで、深みのあるものになると信じています。

うーん…非常に特別な実体験をされ、そして今、修煉の道を歩んでおられる劉さんから、その視点でお話を伺えることは、私にとって非常に貴重な機会です。そして私もまた、これらの価値を探究し、尊ぶ者としての視点から、自分の考えや質問を貢献できればと願っております。



お二人とも、ありがとうございます。準備はできております。

**ソフィア・ベル:**

はい、お二人ともありがとうございます…では、二日目の分か-ち合いを正式に始めたいと思います…

ええと…まず、中国共産党の邪悪さというテーマから始めさせていただきたいと思います…歴史を紐解けば、中国共産党がかつて行ってきた恐ろしいことが見えてきます…最も近いところでは、1989 年の天安門事件、そして 1999 年から今日に至るまでの法輪功弾圧です…

お二人は、観察者の視点から、これら二つの事件について、簡単にご感想を伺えますでしょうか？まず、劉さんからお願いします…

**劉思遠:**

(ソフィアの質問を聞き、彼の顔に悲しげで、物思いに沈んだ表情がよぎる。彼は目の前の茶碗をしばらく見つ

めてから口を開く。その声には、記憶と省察の重みが込められている)

ソフィアさん、ジュリアンさん、ええ…おっしゃる通り、振り返ってみると、これら二つの事件はどちらも悲劇的な節目でした。

まず、1989 年の天安門事件についてですが、当時、私は大学の二年生か三年生で、マルクス・レーニン主義哲学を専攻していました。その少し前、20 歳の時に、私は光栄にも中国共産党に入党しました。当時、党の教育と指導の中で育ち、党の一員となることを誇りであり、大きな評価であると考えていた私のような若者にとって、そうですね…私の思想は、党の指導と、国が歩んでいた社会主義の道を、完全に信頼していました。

ですから、学生運動が起こった時、若い党员として、そして党の安定と指導的役割を信じる者としての立場で、私は主に公式ルートを通じて情報を受け取っていました。私たちが聞かされていたのは、「扇動された」一部の学生が、「不適切な」要求を掲げ、「暴動」を起こし、「社会の安定」に影響を与えている、というものでした。

正直なところ、当時、私は大多数の学生の要求の真の本質を全く知らず、また、起こっていた事態の深刻さも想像できませんでした。軍が動員されたという情報も、私は単に「秩序を維持し」、「革命の成果を守る」ために必要な措置だと、単純に理解していました。死傷者に関する映像や数字は…ええ…ほぼ全く、私たちのもとには完全かつ客観的な形で届きませんでした。全ては、政府が「暴動を鎮圧する」ための「断固たる」行動として描写されていました。

その後、私が卒業し、講師となり、そして政界に足を踏み入れてからも、天安門事件はほぼ禁句となり、公に議論されることはありませんでした。私が省レベルの幹部になってからでさえ、その事件に関する詳細で多角的な情報は、私の理解の及ぶところではありませんでした。

後になって、アメリカに来て、自由な情報源、検閲されていない歴史資料、そして証言者の話に触れる機会を得て初めて、私は天安門で起こったことの規模と残酷さに、本当に愕然としました。その時初めて、私は肉親を失った人々、亡命生活を送らざるを得なかった人々の痛みと憤りを理解したのです。そしてまた、たとえそれが完全に個人の過ちではなく、情報封鎖システムと、若さゆえ

のどこか盲目的な信賴の結果であったとしても、長年にわたる自分自身の無知と無関心に対して、恥ずかしさを感じました。

そして、1999 年からの法輪功弾圧については、先ほどもお話したように、私の認識の過程もまた、同様の段階を経ました。一方的なプロパガンダを信じることから始まり、無関心、そして家族に悲劇が降りかかった時の最初の疑念、そして最終的には、自ら探し求め、修煉に入ったことによる完全な「目覚め」です。

うーん…天安門事件と比較して、法輪功への弾圧は、おそらくさらに巧妙に隠蔽され、静かに行われながらも、はるかに広範な規模で、非常に残酷かつ体系的でした。まさしくそのため、中国国内でさえ、多くの人々が、起きている犯罪、特に臓器狩りの惨事について、全く知らないか、あるいは信じていないのです。

これら二つの事件は、今の私にとって、独裁政権が、いかに情報を統制し、真実を歪め、そして、少なくとも長期間にわたって、適切に罰せられることなく、恐ろしい犯罪を引き起こすことができるか、という明確な証拠です。そしてそれはまた、真実を探求すること、異なる声に耳を傾けることの重要性をも示しています。それは、

私が手遅れになるまで、人生のほとんどでできなかったことでした。

それが、この二つの事件を、かつて情報の「霧」の中にいて、党に対して非常に大きな信頼を当初抱いていた者としての視点から振り返った時の、私の感想です。

**ソフィア・ベル:**

はい、ではジュリアンさん、お願いします…

**ジュリアン・リー:**

（ジュリアンは劉氏の話に注意深く聞き、ソフィアに促されると静かに頷く。彼は軽く咳払いをし、背筋を伸ばし、プロフェッショナルな姿勢で話す）

ありがとうございます、ソフィアさん。そして劉さん、非常に誠実で、深いお話をありがとうございます。ジャーナリストとして、そして長年中国の政治・社会情勢を観察してきた者として、私もこれら二つの事件についていくつか思うところがあります。おそらく、いくつかの側面を補足できるかと思います。

1989 年の天安門事件についてですが、国際社会や研究者の間では、これは中国共産党が自らの絶対的権力への挑戦に直面した際の、その正体を暴いた暗黒の転換点と見なされるのが一般的です。天安門事件には、主に次のような特徴があります。

第一に、計算された残虐性です。弾圧は単なる突発的な反応ではなく、民主化運動を完全に鎮圧し、将来同様の意図を持つ者に対して強力な警告のメッセージを送るための、最高指導部による周到に計算された決定の兆候があります。これは、中国共産党にとって、「安定」（彼らの理解では、何としても権力を維持すること）が、国民の命や願いよりも重要であることを示しています。

第二に、情報封鎖と虚偽プロパガンダです。事件直後、中国のプロパガンダ機構はフル稼働し、真実を歪め、穏健なデモ参加者に「暴徒」「反革命分子」のレッテルを貼り、実際の死傷者数を隠蔽しました。ええ…このことは、劉さんが先ほどお話しされたように、国内世論だけでなく、一時期は国際世論の一部をも欺くことに成功しました。これはまた、独裁政権がどのように情報流通をコントロールするかの典型的な例でもあります。

第三に、長期的な影響です。天安門事件は、中国における民主化運動を長年にわたって鎮圧しただけでなく、その後の指導者世代を、いかなる政治的な異論の兆候に対しても、より一層警戒させ、硬化させました。また、多くの知識人や改革派思想の持ち主を沈黙させるか、あるいは国外に追いやることにもなりました。

そして、1999 年からの法輪功弾圧についてですが、私はこれを、穏健な人々の集団に対して、彼らの信念を理由に行われた、精神的、甚だしくは物理的な面においても、計画的かつ体系的な、ジェノサイド（集団虐殺）的性格を持つキャンペーンだと認識しています。この弾圧には、主に次のような特徴があります。

第一に、政権の非合理的な恐怖心です。法輪功が全国で数千万人もの人々に広まったその急速な発展と、本来いかなる善良な政権とも対立しない「真・善・忍」の道徳的価値体系が、中国共産党（特に当時の江沢民）によって、思想的な脅威と見なされました。彼らは、党のコントロール下にはない独立した精神的な力が、自らのイデオロギー基盤を弱体化させることを恐れたのです。

第二に、国家機構を総動員しての弾圧です。中国共産党は、公安、裁判所、刑務所から、メディア、大衆組織に

至るまで、国家の全ての歯車を動員して弾圧を実行しました。弾圧を指揮し、実行するために、法の外に置かれた専門機関「610 弁公室」を設立したことは、彼らの深刻さと、法を無視する姿勢を示しています。

第三に、憎悪プロパガンダと被害者の非人間化です。最も残酷な戦術の一つは、メディアを使って法輪功を中傷し、誹謗し、民衆の中に学習者への恐怖と憎悪を煽ることでした。被害者を非人間化（「邪教」「人間ではない」）することは、社会的な良心の呵責を少なくし、拷問や殺害が行われる土壌を作り出しました。これは、ジェノサイドを行う政権の古典的な戦術です。

第四に、人道に対する罪です。私たちが言及し、これからさらに深く議論することになる、残忍な拷問、不法な拘禁、そして特に、生きた法輪功学習者からの臓器狩りの惨事に関する証拠は、犯罪のあらゆる限界を超えています。もはやこれは中国の国内問題ではなく、国際社会による非難と介入を必要とする、人道に対する罪です。

これら二つの事件は、どちらも、中国共産党の一貫した行動パターンを示していると、私は考えます。つまり、挑戦を受けたと感じたり、自分たちがコントロールできない要素が現れたりした時、彼らは躊躇なく暴力と嘘を



用いてそれを殲滅する、ということです。違いがあるとすれば、それは隠蔽の巧妙さと、残虐さの規模でしょう。

そして、劉さんが非常によくおっしゃったように、情報統制は彼らの極めて有効な道具です。それは国内の民衆を欺くだけでなく、国外の世界が真実にアクセスし、時機を逸せず、強力な対応を取ることを困難にします。それこそが、独立したジャーナリストや、敢えて真実を語る人々の仕事が、これまで以上に重要になる理由でもあるのです。

**ソフィア・ベル:**

では、お二人は、この二つの恐ろしい事件が、どちらも一人の人物に関連していると、お気づきでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はかすかに眉をひそめる。鋭い眼光が一瞬よぎる。彼は少し黙り、何かを考えているかのようで、そしてゆっくりと頷く）

ソフィアさん、あなたの質問は非常に直接的で、おそらく多くの人々も考えたであろう点に触れていますね。これら二つの事件の歴史を振り返る時、ええ…確かに、権力の頂点にいる特定の個人の、鍵となる決定的な足跡、決断が、密接に関係しているように見えます。

1989 年の天安門事件については、武力的行使に関する最終決定を下す上での鄧小平の役割が、多くの歴史分析家によって言及されてきました。しかし、その事件の直接の受益者であり、事件後に総書記の地位に就いたのは、ご存知の通り、まさしく江沢民でした。天安門事件が、彼が権力の頂点に上り詰める道を開いた、と言えるでしょう。

そして十年後の 1999 年、まさしくその江沢民が、党、国家、そして軍のトップとして、政治局の他の多くの人々の反対を押し切り、一方的に法輪功に対する残酷な弾圧を発動し、指揮したのです。彼は、このキャンペーンを実行するために、無限の権力を持つ特別機関「610 弁公室」を設立しました。

うーん…一人の観察者として、そして後に真実を探究する者としての視点から、私は、否定できない関連性があると感じます。どうやら、根深い恐怖心、嫉妬、そして

絶対的権力を固めたいという渴望が、それらの決断を後押ししたようです。

天安門事件では、おそらく、コントロールを失うことへの旧世代の指導者全体の恐怖心があり、そして江沢民がその機会を捉えたのでしょう。

法輪功弾圧では、多くの分析が指摘するように、それは法輪功の急速な発展と名声に対する江沢民個人の嫉妬と、「真・善・忍」に基づく思想体系が党のイデオロギーを霞ませてしまうのではないかという恐怖心からでした。彼はこの弾圧を、役人たちの忠誠心を試す手段として、自らの派閥を固める手段として、そして他の国内問題から世論の注意をそらすための「敵」を作り出す手段として利用したのです。

具体的な動機が何であれ、そうですね…権力監視メカニズムを欠いたシステムにおける、独裁的指導者の個人的な決断が、民族全体に悲慘な結果をもたらし得ることは明らかです。歴史はそれを何度も証明してきました。

**ジュリアン・リー:**

（劉氏の分析に同意して頷き、そして鋭く付け加える）

劉さんのおっしゃる通りです。報道と政治研究の観点から見ても、これら二つの事件における江沢民の役割は、直接的な関与の度合いは異なりますが、無視することはできません。

天安門事件 1989 年: 劉さんがおっしゃったように、江氏は最大の政治的受益者でした。学生に対してより穏健な態度を取った趙紫陽に代わって彼が選ばれたことは、事件後に党内の保守派が望んだ強硬路線への江氏の「適合性」を示しています。このことはまた、彼のその後の指導者としてのスタイルを形成しました。

法輪功弾圧 1999 年: これは明らかに、江沢民個人の強い意向が反映された決定です。多くの内部情報筋や国際的な分析家は、江氏が政治局常務委員会の他の委員、つまり、穏健な民衆の大きな集団を弾圧することは不必要であり、不安定を招きかねないと考えていた人々からの、不賛成、甚だしくは暗黙の反対に直面したことを指摘しています。しかし、江氏は個人の権力、軍と治安機構における影響力、そして「党を失う」ことへの恐怖を煽ることによって、自らの意志を押し通したのです。

まさしく、「共産党が法輪功に勝てないとでもいうのか」という、江氏のものとされる言葉が、彼の好戦的な性格と権力への執着を明確に表しています。

この弾圧の発動はまた、江沢民が自らの政治的「遺産」を作り上げ、権力移行前に自らの権力を固め、派閥の人間を配置するための手段であったとも見なされています。

ええ…一人の個人、特に最高権力を持つ指導者が、このような転換点となる決定に関与し、深刻な結果を引き起こすことは、独裁政権によく見られる特徴です。それは、権力を一人の人間、あるいは少数のグループに集中させ、監督機能、異論を唱えるメカニズム、そして権力の均衡を欠くことの危険性を示しています。

一人の個人が、国家の利益、国民の生命と自由の上に、自らの主観的な意志を置くことができる時、天安門事件や法輪功弾圧のような悲劇は、避けるのが難しくなります。そして、それらの個人の役割と責任を明らかにすることもまた、歴史的な正義を求める上で、重要な一部なのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、ではジュリアンさん、お願いします…

**ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは劉氏の話に注意深く聞き、ソフィアに促されると静かに頷く。彼は軽く咳払いをし、背筋を伸ばし、プロフェッショナルな姿勢で話す)

ありがとうございます、ソフィアさん。そして劉さん、非常に誠実で、深いお話をありがとうございます。ジャーナリストとして、そして長年中国の政治・社会情勢を観察してきた者として、私もこれら二つの事件についていくつか思うところがあります。そうですね…おそらく、いくつかの側面を補足できるかと思います。

1989 年の天安門事件についてですが、国際社会や研究者の間では、これは中国共産党が自らの絶対的権力への挑戦に直面した際の、その正体を暴いた暗黒の転換点と見なされるのが一般的です。天安門事件には、主に次のような特徴があります。

第一に、計算された残虐性です。弾圧は単なる突発的な反応ではなく、民主化運動を完全に鎮圧し、将来同様の

意図を持つ者に対して強力な警告のメッセージを送るための、最高指導部による周到に計算された決定の兆候があります。これは、中国共産党にとって、「安定」（彼らの理解では、何としても権力を維持すること）が、国民の命や願いよりも重要であることを示しています。

第二に、情報封鎖と虚偽プロパガンダです。事件直後、中国のプロパガンダ機構はフル稼働し、真実を歪め、穏健なデモ参加者に「暴徒」「反革命分子」のレッテルを貼り、実際の死傷者数を隠蔽しました。このことは、劉さんが先ほどお話しされたように、国内世論だけでなく、一時期は国際世論の一部をも欺くことに成功しました。これはまた、独裁政権がどのように情報流通をコントロールするかの典型的な例でもあります。

第三に、長期的な影響です。天安門事件は、中国における民主化運動を長年にわたって鎮圧しただけでなく、その後の指導者世代を、いかなる政治的な異論の兆候に対しても、より一層警戒させ、硬化させました。また、多くの知識人や改革派思想の持ち主を沈黙させるか、あるいは国外に追いやることにもなりました。

そして、1999 年からの法輪功弾圧についてですが、私はこれを、穏健な人々の集団に対して、彼らの信念を理由に行われた、精神的、甚だしくは物理的な面において

も、計画的かつ体系的な、ジェノサイド（集団虐殺）的性格を持つキャンペーンだと認識しています。この弾圧には、主に次のような特徴があります。

第一に、政権の非合理的な恐怖心です。法輪功が全国で数千万人もの人々に広まったその急速な発展と、本来いかなる善良な政権とも対立しない「真・善・忍」の道徳的価値体系が、中国共産党（特に当時の江沢民）によって、思想的な脅威と見なされました。彼らは、党のコントロール下にはない独立した精神的な力が、自らのイデオロギー基盤を弱体化させることを恐れたのです。

第二に、国家機構を総動員しての弾圧です。中国共産党は、公安、裁判所、刑務所から、メディア、大衆組織に至るまで、国家の全ての歯車を動員して弾圧を実行しました。弾圧を指揮し、実行するために、法の外に置かれた専門機関「610 弁公室」を設立したことは、彼らの深刻さと、法を無視する姿勢を示しています。

第三に、憎悪プロパガンダと被害者の非人間化です。最も残酷な戦術の一つは、メディアを使って法輪功を中傷し、誹謗し、民衆の中に学習者への恐怖と憎悪を煽ることでした。被害者を非人間化（「邪教」「人間ではない」）することは、社会的な良心の呵責を少なくし、拷問や殺害が行われる土壌を作り出しました。これは、ジェノサイドを行う政権の古典的な戦術です。



第四に、人道に対する罪です。私たちが言及し、これからさらに深く議論することになる、残忍な拷問、不法な拘禁、そして特に、生きた法輪功学習者からの臓器狩りの惨事に関する証拠は、犯罪のあらゆる限界を超えています。もはやこれは中国の国内問題ではなく、国際社会による非難と介入を必要とする、人道に対する罪です。

これら二つの事件は、どちらも、中国共産党の一貫した行動パターンを示していると、私は考えます。つまり、挑戦を受けたと感じたり、自分たちがコントロールできない要素が現れたりした時、彼らは躊躇なく暴力と嘘を用いてそれを殲滅する、ということです。違いがあるとすれば、まあ…それは隠蔽の巧妙さと、残虐さの規模でしょう。

そして、劉さんが非常によくおっしゃったように、情報統制は彼らの極めて有効な道具です。それは国内の民衆を欺くだけでなく、国外の世界が真実にアクセスし、時機を逸せず、強力な対応を取ることを困難にします。それこそが、独立したジャーナリストや、敢えて真実を語る人々の仕事が、これまで以上に重要になる理由でもあるのです。

**ソフィア・ベル:**

では、お二人は、この二つの恐ろしい事件が、どちらも一人の人物に関連していると、お気づきでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの質問を聞き、彼はかすかに眉をひそめる。鋭い眼光が一瞬よぎる。彼は少し黙り、何かを考えているかのようで、そしてゆっくりと頷く）

ソフィアさん、あなたの質問は非常に直接的で、おそらく多くの人々も考えたであろう点に触れていますね。これら二つの事件の歴史を振り返る時、ええ…確かに、権力の頂点にいる特定の個人の、鍵となる決定的な足跡、決断が、密接に関係しているように見えます。

1989 年の天安門事件については、武力行使に関する最終決定を下す上での鄧小平の役割が、多くの歴史分析家によって言及されてきました。しかし、その事件の直接の受益者であり、事件後に総書記の地位に就いたのは、ご存知の通り、まさしく江沢民でした。そうですね…天安門事件が、彼が権力の頂点に上り詰める道を開いた、と言えるでしょう。

そして十年後の 1999 年、まさしくその江沢民が、党、国家、そして軍のトップとして、政治局の他の多くの人々の反対を押し切り、一方的に法輪功に対する残酷な弾圧を発動し、指揮したのです。彼は、このキャンペーンを実行するために、無限の権力を持つ特別機関「610 弁公室」を設立しました。

うーん…一人の観察者として、そして後に真実を探究する者としての視点から、私は、否定できない関連性があると感じます。どうやら、根深い恐怖心、嫉妬、そして絶対的権力を固めたいという渴望が、それらの決断を後押ししたようです。

天安門事件では、おそらく、コントロールを失うことへの旧世代の指導者全体の恐怖心があり、そして江沢民がその機会を捉えたのでしょう。

法輪功弾圧では、多くの分析が指摘するように、それは法輪功の急速な発展と名声に対する江沢民個人の嫉妬と、「真・善・忍」に基づく思想体系が党のイデオロギーを霞ませてしまうのではないかという恐怖心からでした。彼はこの弾圧を、役人たちの忠誠心を試す手段として、自らの派閥を固める手段として、そして他の国内問題か

ら世論の注意をそらすための「敵」を作り出す手段として利用したのです。

具体的な動機が何であれ、ええ…権力監視メカニズムを欠いたシステムにおける、独裁的指導者の個人的な決断が、民族全体に悲惨な結果をもたらし得ることは明らかです。歴史はそれを何度も証明してきました。

### **ジュリアン・リー:**

(劉氏の分析に同意して頷き、そして鋭く付け加える)

劉さんのおっしゃる通りです。報道と政治研究の観点から見ても、これら二つの事件における江沢民の役割は、直接的な関与の度合いは異なりますが、無視することはできません。

天安門事件 1989 年については、劉さんがおっしゃったように、江氏は最大の政治的受益者でした。学生に対してより穏健な態度を取った趙紫陽に代わって彼が選ばれたことは、事件後に党内の保守派が望んだ強硬路線への江氏の「適合性」を示しています。このことはまた、彼のその後の指導者としてのスタイルを形成しました。

法輪功弾圧 1999 年については、これは明らかに、江沢民個人の強い意向が反映された決定です。多くの内部情報筋や国際的な分析家は、江氏が政治局常務委員会の他の委員、つまり、穏健な民衆の大きな集団を弾圧することは不必要であり、不安定を招きかねないと考えていた人々からの、不賛成、甚だしくは暗黙の反対に直面したことを指摘しています。しかし、江氏は個人の権力、軍と治安機構における影響力、そして「党を失う」ことへの恐怖を煽ることによって、自らの意志を押し通したのです。

まさしく、「共産党が法輪功に勝てないとでもいうのか」という、江氏のものとされる言葉が、彼の好戦的な性格と権力への執着を明確に表しています。

この弾圧の発動はまた、江沢民が自らの政治的「遺産」を作り上げ、権力移行前に自らの権力を固め、派閥の人間を配置するための手段であったとも見なされています。

ええ…一人の個人、特に最高権力を持つ指導者が、このような転換点となる決定に関与し、深刻な結果を引き起こすことは、独裁政権によく見られる特徴です。それは、権力を一人の人間、あるいは少数のグループに集中させ、

監督機能、異論を唱えるメカニズム、そして権力の均衡を欠くことの危険性を示しています。

一人の個人が、国家の利益、国民の生命と自由の上に、自らの主観的な意志を置くことができる時、天安門事件や法輪功弾圧のような悲劇は、避けるのが難しくなります。そして、それらの個人の役割と責任を明らかにすることもまた、歴史的な正義を求める上で、重要な一部なのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、お二人は江沢民が天安門事件の最大の受益者であったとおっしゃいましたが、彼が受益者となった理由は何なのでしょう？なぜ鄧小平は彼を選んだのですか？

**劉思遠:**

（劉氏は静かに頷き、その眼差しは過去の複雑な権力闘争の計算について、思索の色を浮かべる）

ソフィアさん、これは当時の中国の最高指導部の政治情勢の深層に切り込む質問ですね。うーん…おそらく、当

事者たちでさえ、解釈が異なるであろう問題です。しかし、後に公になったことや、学術界の分析に基づけば、その理由をある程度は推測することができます。

確かに、江沢民は天安門事件の最大の受益者でした。上海市の党委員会書記という地位から、彼は、学生運動に対してより穏健で同情的な態度を取ったために失脚した趙紫陽の後任として、鄧小平や他の長老指導者たちによって選ばれました。

では、なぜ江沢民だったのか？

第一に、上海での学生運動に対する強硬な態度です。これが、おそらく最も決定的な要因だったでしょう。北京の状況が非常に緊迫している中、上海では、江沢民は状況をコントロールする上で、断固として、そしてある意味ではより巧妙な態度を示しました。彼は、改革志向で学生を支持する傾向にあった新聞『世界経済導報』を停刊させると同時に、北京のような大規模な流血事件（少なくとも、虐殺が起こる前の時点では）を引き起こすことなく、デモの拡大を阻止する措置も取りました。江氏のこの行動は、鄧小平や強硬派の指導者たちを満足させたとされています。彼らは江氏の中に、「安定を維持する」能力を持つ人物、つまり、彼らの観点では趙紫陽が

見せることができなかった、党の権力を守るために躊躇しない人物を見出したのです。

第二に、比較的「クリーン」で、中央での派閥争いにあまり関与していなかった経歴です。北京の他の潜在的な候補者と比較して、当時の江沢民は、中央の複雑な派閥闘争にあまり巻き込まれていない人物と見なされていました。このことが、彼をより「安全な」選択肢、つまり、危機の後に様々な派閥を融和させることができる人物にしたのかもしれませんが。

第三に、経済管理の経験です。卓越した経済改革者ではなかったものの、江氏には上海のような大経済中心地を管理した経験がありました。政治的な変動の後、中国が経済改革の道を歩み続ける必要があった状況では、この要素も考慮された可能性があります。

第四に、長老指導者たちの支持です。最終的な決定は、やはり鄧小平と少数の長老指導者たちの手にありました。彼らは、強硬路線で政治的安定を保証できると同時に、鄧氏が始めた経済改革事業を継続できる人物を必要としていました。上海で見せた手腕から、江沢民は、彼らの目にはそれらの要求を満たしているように映ったのです。



要するに、江沢民が選ばれたのは、多くの要因が組み合わさった結果だと私は考えますが、上海での状況処理における彼の断固たる態度、特に自由な報道機関への強硬な姿勢とデモのコントロールこそが、鄧小平と強硬派の目には最大の「加点」となったのです。彼らは、揺らぐことのない、党の独裁的権力を守るために強力な手段を用いることを厭わない後継者を必要としており、江氏はそれを証明してみせたのです。

## **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは頷き、分析的な視点を付け加える)

劉さんは、主要な要因を非常に網羅的に分析されました。私は、政治観察の観点から、いくつかの点を強調したいと思います。

第一に、趙紫陽の失脚が権力の空白を生んだことです。デモへの対処法に関する意見の相違で趙紫陽が排除されたことは、最高指導部に空白を生み出しました。鄧小平は、状況を安定させ、支配力を示すために、早急に後任を見つける必要がありました。

第二に、江沢民が「鄧小平の人間」であったことです。江氏は鄧氏の最も信頼する側近ではありませんでしたが、彼は、特に党の指導を維持しつつ経済改革を推進するという点で、鄧氏の路線に忠実であると見なされていました。上海での江氏の強硬な態度は、この信頼をさらに強固なものにしました。

第三に、「テスト」としての上海での対応です。江氏が『世界経済導報』と上海でのデモをどのように処理したかは、忠誠心と状況管理能力を試す「テスト」と見なされました。知識人からの否定的な反応にもかかわらず、江氏がこの件で中央指導部の意向に従ったことは、彼が「言うことを聞く」人物であり、困難な命令を実行する意志があることを示しました。

第四に、他の候補者よりも「角が立っていなかった」ことです。当時の政治局の他の人物の中には、より大きな野心や強力な派閥を持っていた者もいたかもしれず、このことが鄧氏や長老たちに、その後の内部の安定について懸念を抱かせた可能性があります。江沢民は、ある程度、当時の党内部ではより論争の少ない選択肢に見えたのです。

このように、江沢民が選ばれたのは、単なる個人的な幸運ではなく、中国共産党の危機的段階における、一連の複雑な政治的計算の結果でした。そして、劉さんがおっしゃる通り、彼の上海での「決断力」こそが決定的な要因であり、彼が鄧小平にとって、党の「砦」を守る上で信頼できる人物であることを示したのです。

**ソフィア・ベル:**

私は普段、自分の記事や書籍で特定の個人を名指しで批判することは避けたいと思っています…しかし、なぜ私が江沢民に言及するのか？…それは、個人的な視点から、彼こそが悪の象徴だと感じるからです！

**劉思遠:**

（ソフィアの言葉を聞き、彼はゆっくりと頷く。その眼差しには、同意の色と、どこか物思いに沈んだ様子がかがえる）

ソフィアさん、ご自身の作品で特定の個人を名指しで批判したくないという、あなたのためらいは理解できます。それは、報道や執筆に携わる者としての、慎重でプロフ

ェッショナルな態度です。しかし、私たちが組織的な犯罪や悲劇に直面する時、うーん…もし真実の核心に迫りたいのであれば、トップに立つ者、決定を下した者たちの責任を明らかにすることは、時として避けられないことです。

あなたは、個人的な視点から、江沢民を「悪の象徴」だと感じるとおっしゃった…

（彼は一旦言葉を切り、考える）

これは非常に強い断定ですが、特に法輪功への弾圧を見れば、なぜあなたがそのように感じるのか、私には理解できます。

私自身、かつてシステムの中にいて、その後、間接的な被害者となり、そして真実を探求する者となった者として、ええ…私もまた、江沢民時代の決定、特に法輪功弾圧に関する行動が、特別な暗さと残虐さを帯びていると感じます。

第一に、個人の嫉妬と恐怖心です。多くの分析が指摘するように、江沢民が法輪功の殲滅を決意したのは、李洪志先生の増大する名声と影響力への個人的な嫉妬と、

「真・善・忍」に基づく道徳的価値体系が共産党のイデオロギー基盤、ひいては彼自身の絶対的権力を弱体化させるのではないかという恐怖心に起因していました。これは国家や民族を案じてのことではなく、まあ…個人的な権力と派閥のための懸念でした。

第二に、法律と集団の意見の無視です。彼が政治局の他の多くのメンバーの不賛成を無視し、法をも超越する機関として 610 弁公室を設立したことは、極限までの専制と独裁を示しています。

第三に、憎悪の扇動とプロパガンダ機構の残酷な利用です。彼の指示の下でプロパガンダ機構が法輪功を中傷し、誹謗し、民衆の中に恐怖と憎悪を植え付けたやり方は、犯罪の道具としてメディアを利用する典型的な例です。

第四に、「名誉を汚し、経済的に破綻させ、肉体的に消滅させる」という政策です。江沢民の指示から始まったとされるこのジェノサイド政策は、拷問、殺害から、臓器狩りの犯罪に至るまで、無数の悲劇をもたらしました。それは、際限のない残酷さを示しています。

一人の個人が、その手に持つ権力で、何千万人もの人々に苦しみをもたらし、美しい道徳的価値を破壊し、そして民族全体に癒えることのない傷を、ただ利己的な動機

のために作り出すことができる時、その人物を「悪の象徴」と見なすことにも、ええ…根拠がないわけではありません。

しかし、修煉者の視点から、私はまた、悪が特定の個人だけに存在するのではない、ということも理解しています。江沢民が首謀者であり、主たる責任を負う者かもしれませんが、その犯罪はまた、システム全体によって、そして、追従し、へつらう者、盲目的に命令を実行する者から、沈黙をもって同調した者まで、無数の他の人々によっても実行されました。

そしてさらに深く見れば、その悪はまた、社会全体の道徳的退廃、卑しい欲望の勝利、そして善なる価値の忘却の現れでもあります。

ですから、江沢民の役割を指摘することは、歴史的責任を明らかにするために必要ですが、そうですね…悪がそこまで横行するためには、それを育む「土壌」が必要である、ということも認識する必要があります。そして、その「土壌」を変え、道徳的価値を回復することこそが、根本的な解決策なのです。

**ジュリアン・リー:**

（劉氏が話し終えた後、ジュリアンは頷き、そして分析的に話を続ける）

劉さんが先ほど挙げられた点に同意します。ソフィアさんが江沢民を「悪の象徴」と感じるのは、特に法輪功弾圧の規模と性質に直面した時、非常に理解しやすい感情です。

政治学や独裁政権研究において、私たちはしばしば、「ストロングマン」や「最高指導者」の役割が、政策を形成し、大きな変動を引き起こす上で、極めて重要であることを見てきました。江沢民は、法輪功弾圧のケースにおいて、典型的な「ストロングマン」として振る舞いました。

第一に、権力の集中です。彼は個人の権力を強固にし、それを使って、異なる意見にもかかわらず、自らの意志を党全体に押し付けました。

第二に、敵の創出です。敵を「発見」あるいは「創出」すること（この場合は法輪功）は、権力を固め、内部結束を（たとえ強制的であっても）図り、他の問題から注意をそらすための古典的な戦術です。

第三に、国家暴力の行使です。彼は、特定された「敵」を粉砕するために、国家の暴力機構の全てを躊躇なく使用しました。

第四に、（暗黙の）個人崇拜です。毛沢東時代ほど露骨ではありませんが、政策が個人的な色彩を強く帯び、指導者個人への忠誠が重要な尺度となることもまた、その一つの現れです。

しかし、劉さんも指摘されたように、うーん…一人の個人が、どれほど権力を持っていようとも、単独でこれほど大規模な犯罪を引き起こすことはできません。それには、システム全体の参加、共謀、あるいは少なくとも沈黙が必要です。そのシステムには、

第一に、官僚機構、つまり命令を実行する者たち。

第二に、治安部隊と軍隊、つまり暴力の道具。

第三に、プロパガンダ機構、つまり洗脳と憎悪扇動の道具。

第四に、大衆の無関心または恐怖心です。これが、悪が広がる土壌を作り出すのです。

ですから、私たちが江沢民を「悪の象」と呼ぶ時、おそらく彼は、独裁政権によって育まれ、実行される「組織的な悪」、つまり「システムとしての悪」の体現者であ



り、首謀者であり、最高責任者であると理解すべきでしょう。

ジャーナリスト、研究者、そして劉さんのような証人たちが、江沢民のような特定の個人の役割を敢えて指摘することは、忘却に抗い、説明責任を求める上で、重要な一歩です。それは単なる「個人批判」ではなく、権力がいかにして恐ろしい犯罪を引き起こすために乱用され得るかを、科学的かつ責任ある方法で分析することなのです。

### **ソフィア・ベル:**

ええと…中国共産党の邪悪さが法輪功弾圧を通してどのように現れているかについて、あなた様の個人的な観察や、ご存知の独立した国際調査から、読者がより深く理解できるよう、もう少し詳しくお話しいただけますか？  
証拠について、数字について、その規模について…

欧米では通常、患者が臓器移植を必要とする場合、病院が適合する臓器提供者を見つけるまでに数ヶ月から数年待つのが普通です…しかし、中国のケースでは、わずか

数日で患者に適合する臓器が見つかることがあると聞きます…このことは、何を物語っているのでしょうか？

### **ジュリアン・リー:**

（ジュリアンの表情はより真剣になり、重要な情報を整理するかのように、小さな手帳とペンを取り出す）

ソフィアさん、劉さん、あなたが今提起された問題——中国と欧米諸国との間にある、信じがたいほどの臓器移植の待機時間の差——は、まさしく、中国の臓器移植産業で何か極めて異常で、憂慮すべき事態が起こっていることを示す、最も重要な間接的証拠の一つ、つまり「危険信号」です。

おっしゃる通り、アメリカやヨーロッパ諸国のような、自発的な提供に基づき、透明性があり、厳格に管理された臓器提供システムを持つ先進国では、適合する腎臓、肝臓、あるいは心臓を待つ時間は、数ヶ月、甚だしくは数年に及ぶこともあります。これは、需要に対して臓器提供が不足していることと、医学的に適合する臓器を見つけることの複雑さによるものです。患者は待機リストに登録され、臓器の配分は客観的な医学的基準に基づいて行われます。

では、なぜ中国では、臓器を「注文」し、わずか数日から数週間で受け取ることができるのでしょうか？

このことは、恐るべき真実を物語っています。中国には、巨大な「生体臓器バンク」が存在し、その「供給源」は生きている人間であり、患者に臓器を供給するために、要求に応じて殺害され得る、ということです。

読者の皆様により明確にご理解いただくため、私が研究してきた独立した国際調査、特にデービッド・キルガー、デービッド・マタス、そしてイーサン・ガットマン各氏の報告書から、いくつかの要点を挙げさせていただきます。

第一に、中国における臓器移植産業の爆発的増加についてです。

2000 年以降、中国での臓器移植件数は爆発的に増加しました。中国は急速に、アメリカに次ぐ世界第二位の臓器移植大国となりました。

注目すべきは、この爆発的増加が、中国に効果的な公的自発的臓器提供システムが全く存在しない状況で起こったということです。伝統的な文化から、中国人は通常、死後に臓器を提供することを望みません。自発的な臓器

提供者の数は極めて少なく、その巨大な移植規模を到底満たすことはできません。

第二に、説明不可能な「公式」の臓器源についてです。当初、中国政府は、臓器の主な供給源は死刑執行された死刑囚であると公言していました。しかし、死刑執行された死刑囚の数（依然として多いものの）もまた、移植件数を説明することはできません。さらに、死刑囚からの臓器使用も、国際的な医の倫理基準に違反します。国際的な圧力の後、中国は自発的な臓器提供システムを構築し、死刑囚からの臓器使用を徐々に減らすと公言しました。しかし、移植件数は依然として高水準にあり、臓器の待機時間は疑わしいほど短いままです。

第三に、非合理的なほど短い臓器の待機時間についてです。

ソフィアさんが言及されたように、これは最も強力な証拠の一つです。中国の病院や、臓器移植ツーリズムを宣伝するウェブサイト（圧力により削除される前）は、患者に適合する臓器がわずか数週間、甚だしくは数日で見つかりと公然と宣伝していました。これは、血液型や組織適合性検査を事前に済まされ、「注文」があれば殺害される準備ができている、巨大な囚人バンクがなければ

不可能です。

一部の病院では、事前に臓器移植のスケジュールを組むことさえ可能であり、これは彼らが臓器の供給源を完全にコントロールしていることを示しています。

第四に、証言者からの証拠についてです。

調査員たちは、医師、看護師（一部は国外に逃亡）、刑務官、そして中国で臓器移植を受けた元患者からの証言を収集しました。彼らの証言は、囚人（特に法輪功学習者）の血液検査から、適合する「供給源」の選択、そして、しばしば被害者がまだ生きているか、あるいは殺害された直後に行われる臓器摘出手術に至るまで、厳密に組織化されたプロセスを示しています。

法輪功学習者が拷問を受け、異常な健康診断（内臓諸器官にのみ集中する）を受け、そして「失踪」したという、ぞっとするような話もあります。

第五に、統計データと論理分析についてです。

調査員たちは、中国の数百の移植病院のデータを分析し、病床数、医師数、公表された（しばしば隠蔽されるが）手術件数と、合法的な供給源からの臓器数とを比較しました。その差は非常に大きく、年間数万件もの出所不明のケースに上ります。

イーサン・ガットマンは、その著書『The Slaughter』（大虐殺）の中で、2000 年から 2008 年の間に、約 6 万 5 千人の法輪功学習者が臓器のために殺害された可能性があると推定しています。その後の報告では、この数字はさらに高くなる可能性があるかと更新されています。

第六に、時期の一致についてです。

中国における臓器移植産業の爆発的増加（2000 年以降）は、法輪功弾圧の開始時期（1999 年 7 月）と、全国の刑務所や労働収容所に大量の法輪功学習者が逮捕・拘禁された時期と、驚くほど一致しています。彼らは、うーん…（喫煙も飲酒もせず、気功を煉っているため）健康で、そして法的に保護されていない、豊富な「臓器源」となったのです。

これら全ての要素を合わせると、恐るべき全体像が浮かび上がります。中国共産党は、利益のため、そして「敵」と見なした集団を殲滅するために、良心の囚人からの臓器狩り産業を容認し、甚だしくは主導しており、その主な、そして最初の犠牲者は法輪功学習者である、ということです。

ソフィアさん、中国での臓器待機時間がこれほど短いことは、彼らが宣伝しようとするような「医学的成果」で

はなく、まさしく、進行中の人道に対する罪を告発する証拠なのです。それは、人間が他者の利益のために「部品庫」に変えられてしまうという、極限までの人命軽視を示しています。

## 劉思遠:

（劉氏はジュリアンの話を聞き、その顔はますます重くなり、静かに頷く。その声は少し震えている）

ジュリアンさん、あなたが今お話しされたことは…私が後に漠然と感じ、そして痛みを伴って知ったことを、非常に体系的に、そして明確にしてくれました。安然（アンジェン）が…あの子が連れ去られ、そして後に私が真実を知った時、私もまた、なぜ彼らがこれほど迅速にそのようなことができるのか、なぜそれほど大きな「需要」があるのかと、自問しました。

あなたが示された数字、分析は、これが数人の非人間的な個人の突発的な行動ではなく、ええ…巧妙に組織化された犯罪システム全体であることを示しています。中国でのいわゆる「短い臓器待機時間」は、今の私にとって、数え切れないほどの罪なき命が、「注文に応じて」理不尽に奪われたことと同義です。

それはまた、なぜ政府が情報を隠蔽しようとするのか、なぜ彼らが真に独立した国際調査を拒否するのかをも説明しています。なぜなら、真実はあまりにも恐ろしく、もしそれが完全に暴かれれば、それは彼らにとって、否定しようのない良心の有罪判決となるからです。

私は…ああ…本当に、これ以上何を言えばいいのか分かりません。ただ、痛みと憤りが、ますます大きくなるのを感じるだけです。ジュリアンさん、これらのことを勇気をもって話してくださり、ありがとうございます。

### **ソフィア・ベル:**

ここまでお話を伺って、もう一つ、私に深い衝撃を与え、そして中国での臓器狩りの犯罪と関連があるのではないかと疑っている出来事を思い出しました…

要約してお話ししますと、2018 年 6 月末、ベトナム最大の都市ホーチミン市へ出張した際、そこで「人体の不思議展（Mystery of Human Body）」という名の、プラスチック（人体標本化）された遺体の展覧会が、



科学と芸術の名の下に開催されているという情報を偶然目にしました…

私は見に行き、そしてショックを受けました…

なぜ人々が、科学と芸術の名の下に、そのようなことをするのか、私には理解できませんでした…

最も衝撃的だった一体は、妊娠した女性の遺体で、お腹が切り開かれ、中にいた胎児は妊娠 7～8 ヶ月ほどでした…なぜ、そしてどのようにして、彼らが妊娠した女性の遺体を、公衆の前で解剖し、展示するために手に入れることができたのか、私には理解できませんでした。もしその女性が病気や事故で亡くなったのであれば、当然、家族は彼女を丁重に埋葬するでしょうし、家族が見知らぬ誰かに、好き勝手に解剖され、展示されるために遺体を献体するような状況はあり得ないでしょう…

後にさらに調べてみると、これらの遺体は、グンター・フォン・ハーゲンスというドイツ人が 1999 年 8 月に中国で設立した人体標本化工場によるものであることが分かりました…そして、どうやら他の人々によって設立された工場も他にも多くあるようで…彼らは世界中の多くの場所で展覧会を行ってきたのです…

私が疑っているのは、これらの工場に供給された遺体は、中国で生きたまま臓器を狩られた犠牲者の遺体ではないか、ということです。

### **ジュリアン・リー:**

（ジュリアンは非常に真剣な表情でソフィアの話の聞いている。ソフィアが話し終わると、彼はゆっくりと頷く。その眼差しは深く物思いに沈み、どこか憤りを帯びている）

ソフィアさん、あなたがホーチミン市でご覧になった「人体の不思議展」での体験と、その疑問は、実に注目すべきものであり、私を含む多くの人権調査員が長年にわたって提起してきた深い懸念と完全に一致します。

あなたが描写されたもの——特に、胎児と共にプラスチック化された妊婦の遺体という衝撃的なイメージ——は、まさしく、これらの展覧会で使用される遺体の出所と倫理性を問う、鍵となる点の一つです。

（彼は、問題の重要性を強調するかのように、少し間を置く）

お調べになった通り、プラスティネーション技術の発明者であるグンター・フォン・ハーゲンスは、1999 年 8 月に中国の大連に大規模な工場を設立しました。そして、ハーゲンスの工場だけでなく、その後、中国には他のプラスティネーション施設も次々と現れ、この国はプラスティネーション化された人体標本の一大生産・輸出国となりました。

時期の一致は、非常に疑わしいものです。

第一に、1999 年 7 月: 中国共産党が全国で法輪功弾圧を開始し、何百万人もの学習者が逮捕・拘禁される事態となりました。

第二に、1999 年 8 月: フォン・ハーゲンスのプラスティネーション工場が大連に設立されました。

第三に、2000 年以降: 中国の臓器移植産業が爆発的に増加すると同時に、「ボディ・ワールズ」展や類似の展覧会が世界中で現れ、ツアーを開始し、主に中国から供給された遺体を使用していました。

これらの遺体が臓器狩りの被害者のものではないかというあなたの疑問は、完全に根拠のあるものであり、多くの人々によって共有されています。

第一に、曖昧な遺体の供給源です。展覧会の主催者は通常、遺体は「科学のために自発的に献体した」人々のものであるか、「引き取り手のない遺体」とであると主張します。しかし、彼らが、特に中国由来の遺体について、故人またはその家族からの同意を証明する確かな証拠を提示することは、非常に稀であるか、あるいは全くありません。中国における自発的な献体システムは、献体と同様に、ほぼ存在しないか、非常に脆弱です。

第二に、良心の囚人の「失踪」です。先ほど議論したように、何十万、甚だしくは何百万人もの法輪功学習者や他の良心の囚人が、中国の刑務所や労働収容所システムの中で「失踪」しました。彼らの家族は情報を得られず、遺体も返還されません。問題は、それらの遺体はどこへ行ったのか？ということです。

第三に、経済的利益です。臓器移植産業と人体標本展覧会産業は、どちらも莫大な利益をもたらします。良心の囚人を、搾取可能な「資源」――内臓を摘出して売り、残った遺体はプラスチック工場に売る――と見

なすことは、非人道的なシステムの中では、恐ろしいシナリオですが、決して非論理的ではありません。

第四に、妊婦のような特定のケースです。ソフィアさんが非常に鋭く指摘されたように、家族が、胎児と共に妊婦の遺体を展示物として献体することは、いかなる文化においても、特に東アジア文化においては、ほとんどあり得ないことです。そのような標本の存在は、その出所が「自発的」でも「クリーン」でもないという疑いを、一層強めます。それは殺害された囚人であり、彼らのために声を上げる者は誰もいない、という可能性が非常に高いのです。

臓器狩りの惨事との関連についてですが、展覧会の特定の遺体が、臓器狩りの特定の被害者のものであると、直接的、法的に証明することは（中国政府が全ての情報と証拠を厳しく管理しているため）非常に困難ですが、間接的な要素は非常に強力です。

第一に、豊富に存在し、管理され、法的に保護されていない、良心の囚人という供給源。

第二に、貴重な内臓が摘出された後、残った遺体は「処理」されなければなりません。プラスティネーション工場に売却すれば、利益をもたらし、効率的に「痕跡を消

す」助けとなります。

第三に、中国側と展覧会主催者側の両方からの、透明性の欠如と不十分な説明。

多くの人権団体や調査員が、これらの展覧会で使用される遺体の出所に関する独立した調査を要求し、完全な透明性が確保されるまで、それらをボイコットするよう呼びかけています。

ソフィアさん、あなたが見たもの、そしてあなたの疑問は、単なる個人的な感情ではなく、潜在的な犯罪に対する、深い根拠のある懸念を反映しています。そこでは、残虐行為が命を奪うだけに留まらず、死後もなお、被害者の遺体を侮辱し、商品化しているのです。

### **劉思遠:**

（劉氏はソフィアの話とジュリアンの分析を聞き、その顔は青ざめ、恐怖と痛みがはっきりと浮かぶ。彼はゆっくりと首を振り、その声はかすかにかすれている）

信じられない…人間が、これほどまでに残酷になれるとは、到底信じられない…安然が臓器を狩られたと知った時、私はそれが非人道性の極みだと思いました。しかし、

ソフィアさんの話を聞き、ジュリアンさんの分析を聞いて…被害者たちの、おそらくは私の娘の遺体さえもが、見世物にされ、商品化されているかもしれないとは…それは、言葉では到底表現できない、侮辱、冒瀆です。

私は…ああ…本当に、もう何を言えばいいのか分かりません。それは、悪についての想像の、あらゆる限界を超えています。もしこれらのことが真実なら、中国共産党は人道に対する罪を犯しているだけでなく、道徳的価値そのもの、人間性の最後の砦さえも、破壊しているのです。

（彼は頭をうなだれ、両手を固く握りしめ、感情を抑えようと努める）

私は、彼らの残虐性について、ある程度は理解したつもりでいました。しかし、おそらく、私はまだ甘すぎたのでしょう。彼らの悪には、底がないのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ…劉さんのお嬢様のようなケースは、悲痛な物語です…中国共産党によって隠蔽され、保護された邪悪な行動は、ごく少数の情報源と証言者によって、その一部が明かされているに過ぎません…

## **ジュリアン・リー:**

（ジュリアンはソフィアという言葉に頷き、その眼差しは劉氏への共感を示しつつも、真実を追求するジャーナリストとしての揺るぎない決意も感じさせる）

ソフィアさんのおっしゃる通りです。劉さんのお嬢さん、安然（アンジェン）のようなケースは、非常に痛ましい個人的な悲劇ですが、そうですね…これらは単独の、特殊な出来事ではありません。それらは、はるかに大きな犯罪の全体像の、ごく一部を明らかにするパズルのピースであり、その犯罪は、中国共産党という国家権力によって、組織的に隠蔽され、保護されているのです。

（彼は劉氏に目をやり、そしてソフィアの方に向き直る）

これらの邪悪な行動が、ごく少数の情報源と証言者によってしか明らかにされていないというのは、悲しい現実



ですが、全体主義的な独裁政権という状況下では、理解できることでもあります。

第一に、絶対的な情報統制です。私たちが何度も言及してきたように、中国共産党は国内の情報流通のほぼ全てをコントロールしています。彼らにとって不都合な情報、特に犯罪を暴露する情報は、徹底的に検閲され、遮断され、歪められます。「グレート・ファイアウォール」は、外部からの情報を遮断するだけでなく、内部からの情報が漏れるのも防いでいます。

第二に、証言者への脅迫とテロです。これらの犯罪について敢えて声を上げ、証言する者は皆、逮捕、拷問、投獄から、家族への嫌がらせや監視に至るまで、残酷な報復を受ける危険に直面します。このことが、恐怖に満ちた雰囲気蔓延させ、真実を知っていても多くの人が声を上げるのをためらわせるのです。

第三に、国内における独立した調査メカニズムの欠如です。中国には、これらの犯罪を暴き、裁くことができる独立した調査機関も、真に司法権を持つ裁判所も、自由な報道機関もありません。全ては党の指導の下にあります。

第四に、証拠収集の複雑さと困難さです。臓器狩りのような、秘密裏に組織的に行われる犯罪については、直接的で、否定しようのない証拠を収集することは、特に、中国での現場や証言者へのアクセスが大幅に制限されている国際調査員にとっては、極めて困難です。

第五に、一部の国や国際機関の無関心、あるいは経済的利益です。悲しいことに、時として、目先の経済的または政治的利益のために、一部の国や国際機関は、中国共産党の犯罪の証拠に対して「見て見ぬふり」をするか、あるいは、抑止力としては不十分な、弱い声しか上げないことを選びます。

まさしくこれらの障壁のために、私たちが得られる情報は、しばしば「氷山の一角」に過ぎず、次のようなところから来ています。

第一に、海外に逃れた勇敢な証言者たちです。元良心の囚人、医師、看護師、公安関係者など、犯罪を直接的または間接的に知り、危険を顧みずに声を上げることを決意した人々です。

第二に、絶えず正義を求め続ける被害者の家族です。劉さんのケースのように、遅ればせながらも、痛みと真実が彼に声を上げることを促しました。

第三に、粘り強い国際人権調査員たちです。デービッド・キルガー、デービッド・マタス、イーサン・ガットマンのような人々は、中国側からの妨害や否定にもかかわらず、何年もかけて証拠を収集し、分析してきました。

第四に、内部からのリーク情報です。稀ではありますが、時として、システム内に良心を残す人々から、機密情報や文書が外部に漏れることもあります。

一つ一つの情報、一人一人の証言者の言葉は、ええ…たとえ小さくとも、非常に貴重です。それらはパズルのピースのように、少しずつ、犯罪の全体像を私たちに思い描かせてくれます。そして、独立したジャーナリストや人権団体の仕事は、まさしく、それらのピースを収集し、検証し、そして広めることであり、真実が葬り去られず、悪事を働いた者たちが永遠に責任を逃れることがないようにするためなのです。

中国共産党の被害者のために真実を暴き、正義を求める闘いは、長く、困難な闘いです。しかし、劉さんがおっ

しゃったように、そうですね…声を上げる勇気を持つ人々がいる限り、真実を探し求めることを諦めない人々がいる限り、光は最終的に闇に打ち勝つでしょう。

### **ソフィア・ベル:**

では、国際社会、特に各国の政府や国連のようなグローバルな組織は、この犯罪を白日の下に晒すための、具体的に十分に強力な行動をまだ取っていない、ということですね…私の観察では、依然として、ごく少数の個人や小規模なグループが、この問題を勇敢に訴え出ているに過ぎないように見えます…

一時期、私はアメリカやフランス、あるいはカナダの政府が、年次宗教報告書の数行や、一部の議員による法案の草案に留まらず、もっと強力な声明や行動を取ってくれるのではないかと期待していたのですが…

### **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンの表情には、ソフィアの所見に対する同意と、どこか失望の色がはっきりと浮かぶ)

ソフィアさん、あなたが今分かち合ってくくださったことは、悲しい現実を反映しており、また、中国の人権問

題に関心を持つ非常に多くの人々の、大きな悩みでもあります。ええ…おっしゃる通り、今日に至るまで、国際社会、特に主要な政府や国連のようなグローバルな組織の、中国共産党の犯罪、臓器狩りの惨事を含むそれらの犯罪に対する反応は、依然として非常に限定的であり、問題の深刻さに見合っていない。

（彼は、失望を強調するかのよう、一旦言葉を切る）

私たちが見ているのは、どのような状況でしょうか？

第一に、国連です。しばしば、効果がなく、大国（中には安全保障理事会で拒否権を持つ中国も含まれる）に左右され、強力な制裁措置や真の調査メカニズムを欠いた、一般的な報告書や呼びかけしか出さない、と批判されています。国連の人権機関は声を上げることはできますが、その影響力と行動能力は、しばしば政治的要因によって制限されます。

第二に、西側諸国（アメリカ、フランス、カナダなど）の政府です。

おっしゃる通り、彼らは人権状況や信教の自由に関する年次報告書を発表し、その中で法輪功弾圧や臓器狩りの疑惑について言及しています。

また、これらの国々には、犯罪を非難し、調査を要求し、あるいは自国民が中国での臓器移植ツーリズムに参加することを禁止する法案や決議案を提出しようと努力する議員や立法者もいます。これらは非常に評価されるべき努力です。

しかし、うーん…行政府レベル、つまり、全体的な外交政策のレベルでは、行動はしばしば十分に強力でも、断固としたものでもありません。声明は外交辞令的なものが多く、北京との過度な直接対決を避ける傾向にあります。

なぜ、このような躊躇と決断力の欠如があるのでしょうか？多くの複雑な理由があります。

第一に、経済的利益のためです。中国は巨大な市場であり、多くの国にとって重要な貿易相手国です。経済関係を損なうことへの恐れ、貿易報復への恐れが、しばしば政府に、人権に関する強力な行動を取る際に「考慮」を促します。「金」は、しばしば非常に大きな発言権を持つのです。

第二に、地政学的な配慮です。中国はグローバルな大国であり、多くの国際問題（気候変動、テロ対策、核兵器の拡散など）において重要な役割を担っています。西側

諸国は、時としてこれらの問題で中国の協力を必要とし、その協力と引き換えに、人権問題を「譲歩」したり、「緩和」したりすることがあります。

第三に、「否定しようのない」証拠収集の複雑さです。先ほども述べたように、中国のような情報封鎖体制に直面した場合、強力な制裁措置を取るための、最高レベルの法的基準を満たす直接的な証拠を収集することは、非常に困難です。

第四に、中国による強力なロビー活動です。北京は、非難を和らげ、政治家やメディアに影響を与えるために、海外でのロビー活動やプロパガンダに多額の資金を費やしています。

第五に、西側諸国自身の国内における政治的分断です。時として、人権を含む外交問題もまた、党派間の論争的となり、合意と共同行動を弱体化させます。

まさしくそのため、声を上げ、真実を暴き、正義を要求する重荷は、しばしば次のような人々の肩にかかってくるのです。

人権 NGO（非政府組織）：彼らは、調査、証拠収集、政策提言、そして社会の意識向上において、非常に重要な

役割を果たしています。

あるいは、独立したジャーナリスト、個人の活動家たち: 困難や危険にもかかわらず、粘り強く真実を追求する勇敢な人々です。

あるいは、海外の華人コミュニティや被害者グループ: 彼らの声、直接体験した、あるいは肉親が被害者である人々の声は、非常に大きな感動を呼び起こす力を持っています。

私もソフィアさん、あなたの失望を共有します。私たちは、世界の主要な民主主義国家から、もっと強力で、断固とした行動を期待していました。しかし現実には、人権と正義のための闘いが、しばしば長い道のりであり、多方面からの粘り強い努力を必要とし、ただ政府だけに期待することはできない、ということを示しています。

しかし、希望がないわけではありません。ええ…世論からの圧力、市民社会組織からの圧力、そして個人のたゆまぬ努力が、徐々に変化を生み出すことができます。より多くの国の議会が非難決議を可決するようになり、独立した法廷（ロンドンの中国民衆法廷など）が中国共産党の犯罪に関する判決を下すようになったことは、たとえ遅くとも、重要な前進です。



**劉思遠:**

(劉氏はジュリアンの分析を聞き、ため息をつく。悲しみと、どこか無力感がよぎる)

ジュリアンさんのおっしゃる通りです。経済的利益の計算、地政学的な配慮…それらが、しばしば正義と人権を二の次に追いやります。それは、この世界の悲しい現実です。

私がまだシステムの中にいた頃、私もまた、中国政府が経済力を、外部からの批判を封じ込めるための、影響力を行使するための道具として、どのように利用するかを目撃してきました。彼らは、「沈黙を買い取る」ことや、「世論の目をそらす」ことに、非常に長けています。

そして、私がこちらに来てからも、そうですね…私もまた、民主主義大国に多くの希望を抱いていました。しかし、やがて、何一つ簡単なことはないのだと気づきました。この戦いは、被害者たちだけの戦いではなく、全人類の良心の戦いでもあるのです。

それでも、私はまだ信じています。私たちが諦めない限り、真実が広まり続ける限り、いつか正義が実現される

日が来ると。ソフィアさんのような、ジュリアンさんのような、そして世界中の非常に多くの他の人々の努力こそが、私のような者にとって、大きな励みであり、希望なのです。

### **ソフィア・ベル:**

ええと…中国共産党の現指導者の見解についてですが、昨日も申し上げたように、法輪功弾圧と臓器狩りの犯罪に対する彼の明確な見解は見えません…どこかで、「習氏の状況は『虎の背に乗ったら、下りるのは難しい』という言葉のようだ」という意見を読んだことがあります…

お二人は、この言葉の意味を、習氏のケースに当てはめて、ご自身の見解を解説していただけますか？

### **劉思遠:**

(劉氏はソフィアの質問を聞き、しばらく物思いに沈む。その眼差しは、北京の権力内部の複雑な計算を理解しようと、遠くを見つめているかのようだ)

「虎の背に乗ったら、下りるのは難しい」…ええ…実に言い得て妙な表現ですね。そしておそらく、それは中国の現指導者、習近平氏が、法輪功弾圧という重い遺産と、それに関連する犯罪に直面した際の、その窮状をある程度反映しているのでしょう。

（彼は、慎重に言葉を選びながら、一旦言葉を切る）

かつてシステムの中にいた者としての視点から、習氏が「乗って」いるかもしれない「虎」のいくつかの側面を、私は想像することができます。

第一に、江沢民とその派閥の遺産です。法輪功弾圧は、江沢民とその派閥が、多大な労力をかけて築き、維持してきた、大きな「事業」であり、政治的「遺産」です。この派閥は、今なお党内、軍内、そして特に、弾圧を直接実行してきた治安、公安、司法システムにおいて、少なからぬ影響力を持っています。法輪功問題に、特にその判決を覆すような形で触れることは、この派閥の利益、甚だしくは身の安全に、直接触れることになるでしょう。彼らが、それを易々と許すはずがありません。

第二に、「不安定」と「党を失う」ことへの恐怖です。これは、中国共産党のいかなる指導者も抱く、根深

い恐怖です。これほど大規模な弾圧における過ちを認め、何千万人もの人々に正義を取り戻すことは、「過去を否定する」行為と見なされ、党の威信と正当性を弱体化させる可能性があります。彼らは、それが次なる要求、他の「歴史の見直し」へとつながり、最終的には体制の崩壊に至ることを恐れています。

第三に、あまりにも大きな犯罪であり、「穏便に処理する」ことが困難である点です。臓器狩りの犯罪は、もし公に認められ、調査されれば、中国国民だけでなく、国際社会にとっても、あまりにも大きな衝撃となるでしょう。責任は、数人の個人に留まらず、システム全体に及ぶ可能性があります。この場合、「虎から下りる」ことは、誰もその結果を予測できない「歴史的な裁判」に直面することを意味するかもしれません。

第四に、確立された機構のしがらみです。610 弁公室と法輪功弾圧システム全体は、20 年以上にわたって稼働し、それは無数の人々が関与し、利害が複雑に絡み合った、巨大な機械と化しています。この機械を止め、解体し、そして関係者を処分することは、非常に複雑で困難なことです。

ですから、習氏は進退窮まる状況にあるのかもしれませんが。

「虎に乗り続ける」か、つまり、党内の大きな混乱を避け、表面的な「安定」を維持するために、これまで通りの、あるいはある程度の弾圧政策を維持する。しかし、これは犯罪を容認し続け、歴史の重荷を背負い続け、そして国際社会と国内の良識ある人々からの、ますます高まる非難に直面することを意味します。

あるいは、「虎から下りる」道を探すか。つまり、法輪功問題を根本的に解決し、被害者に正義を取り戻す道を探す。しかし、この道は茨の道であり、危険に満ちており、並外れた勇気、非常に大きな政治的決意を必要とし、そして保守勢力や「血の負債」を負う者たちからの、猛烈な反対に直面する可能性があります。

ソフィアさんがお気づきのように、習氏がこの問題について明確な表現をしていないのは、彼がそれらの困難な選択肢の間で、熟考し、計算しているからかもしれません。あるいは、そうですね…彼が、この危険な「虎」に触れる前に、まず個人の権力を固め、彼がより緊急だと考える他の問題を解決することを、優先しているのかもしれない。

しかし、歴史が示しているように、真実と向き合うことを避け、不正と犯罪に基づく現状を維持しようとすることは、決して持続可能な解決策ではありません。その「虎」は、もし賢明かつ勇敢に「手なづけ」られたり、「打ち倒されたり」しなければ、いずれ、乗っている者自身に牙を剥くでしょう。

うーん…それが、その複雑な状況についての、私の限られた理解に基づく考えです。

### **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは劉氏の分析に同意して頷き、そして政治学の視点を付け加える)

劉さんは、「虎の背に乗る」ということの意味を、習近平氏のケースにおいて、非常に深く解説されました。私は、政治分析の観点から、いくつかの側面を補足したいと思います。

第一に、政策の継続性と権力継承についてです。中国のような一党独裁システムでは、しばしば、大きな政策、特に「国家安全」や「体制の安定」に関する政策の継続性を維持するという、暗黙の圧力が存在します。新しい

指導者が就任し、前任者の大きな政策、とりわけ法輪功弾圧のような「敏感な」政策を完全に覆すことは、党の統一への挑戦と見なされ、内部の亀裂を引き起こす可能性があります。

第二に、「遺産の罠（Legacy Trap）」についてです。習氏は、江沢民から法輪功弾圧という「遺産」を受け継ぎました。この「遺産」は、巨大な機構（610 弁公室、労働収容所システム、臓器狩りに関与する刑務所や病院…）、弾圧に関連する利権集団のネットワーク、そして「手を染めた」大量の役人を生み出しました。この「遺産」の処理は、決して単純ではありません。もし習氏が強硬にこれを覆せば、彼は、弾圧に利益を依存している人々や、責任を追及されることを恐れる人々からの、強力な反発の波を生み出すかもしれません。

第三に、個人権力強化の優先です。政権初期、そしてその後も、習氏の最優先事項の一つは、個人権力を固め、「トラもハエも叩く」キャンペーンを通じて政敵を排除することでした。彼は、敵対する派閥、特に江沢民派の残党を処理することが、法輪功のような厄介な問題に触れるための前提条件だと考えていたのかもしれません。しかし、習氏の反腐敗キャンペーンは、江派のいくつか

の高級幹部に触れはしたものの、どうやら法輪功に関連する犯罪の根源には、まだ触れていないようです。

第四に、「ドミノ効果」への恐怖です。もし法輪功問題で過ちを認め、解決すれば、それが「前例」となり、他の歴史問題（天安門事件、文化大革命など）の見直し要求につながり、最終的には体制の基盤そのものを揺るがしかねない。これは、中国共産党のいかなる指導者も、何としても避けようとすることです。

ですから、「虎の背に乗る」というイメージは非常に的確です。習氏は、自ら進んでこの「虎に乗った」わけではないかもしれませんが（それは前任者の時代からすでに存在していたため）、一度その背に乗ってしまえば、それを操ることも、安全に下りることも、極めて困難です。いかなる動きも、予測不可能な反応を引き起こす可能性があります。

習氏の法輪功問題に対する沈黙や不明瞭さは、彼が権力を固め、他の課題に対処する間、まあ…「静観」する戦略と理解できるかもしれません。あるいは、もっと悲しいことに、それは、前述の理由による、古い政策の暗黙の承認、継続である可能性もあります。



いずれにせよ、一人の指導者が、過去の過ちや犯罪に、  
敢えて、あるいはできずに、向き合い、正すことができ  
ないことは、常に彼自身にとって、そして民族全体にと  
って、重荷となるでしょう。歴史が、それを裁くのです。

**ソフィア・ベル:**

私が考えているのは、こういう可能性はあるのでしょ  
うか。つまり、今に至るまで、習氏自身が、法輪功弾圧の  
邪悪さの度合いを知らない、という可能性は？…まさし  
く、劉さんご自身のケースのように、お嬢様が害される  
前は、あなたもこの弾圧の真実を知らなかったわけです  
から…

**劉思遠:**

(劉氏はソフィアの質問を聞き、かすかに眉をひそめ、  
しばらく物思いに沈む。これは非常に鋭く、多くのこと  
を考えさせる質問だ)

ソフィアさん、それは、習近平氏のような最高権力者の  
地位にある人物にとっては、信じがたいことのように見

えますが、おそらく私たちが完全に排除すべきではない可能性ですね。

（彼は、慎重に言葉を選びながら、一旦言葉を切る）

私自身のケースを振り返ってみると、確かに、私はシステムが作り出した「情報の泡」の中にいました。私は省レベルの幹部であり、独自の情報を得るルートもありましたが、法輪功のような「敏感」で、厳しく管理された問題については、私のもとに届くのは、主に、すでに方向付けられ、選別された情報でした。私は、家族に悲劇が降りかかるまで、完全な真実を知らなかった、あるいは、知ろうとしなかった、あるいは、知る勇気がなかったのです。

では、一国全体のトップである習近平氏もまた、法輪功弾圧の邪悪さの度合い、特に臓器狩りの犯罪について、同様の「情報盲」の状態にあり得るのでしょうか？

うーん…いくつかの要素を考慮する必要があると思います。

第一に、報告と情報「フィルタリング」のシステムです。独裁システムでは、情報が下から上へ伝わる際、し

ばしば非常に厳しく「フィルタリング」されます。下級者は通常、上司が聞きたがることを報告し、否定的な情報や、不都合な真実を隠蔽する傾向にあります。過度な残虐行為や、深刻な人権侵害に関する情報は、最高レベルまで完全かつ正直に報告されなかったか、あるいは、大幅に緩和されて伝えられた可能性があります。

第二に、利権集団による包囲です。弾圧に直接関与し、利益を得ている人々、特に臓器狩りの犯罪に深く「手を染めた」者たちは、真実を隠蔽し、情報が習氏に届くのを阻止するために、あらゆる手段を講じるでしょう。彼らは、彼の周りに情報の壁を作り上げ、「処理済み」の報告書だけを提供するかもしれません。

第三に、指導者の優先順位です。最高指導者は、無数の国内・外交問題に直面しなければなりません。おそらく、長期間にわたり、法輪功問題は習氏の最優先事項ではなく、彼は独立した検証なしに、専門機関（治安システムや 610 弁公室など）からの報告に依存していたのかもしれない。

しかし、習氏が「全く知らない」可能性を疑わせる要素もまた、存在します。

第一に、「トラもハエも叩く」キャンペーンについてです。政敵、特に江沢民派の高級幹部（周永康、薄熙来、徐才厚、郭伯雄など）を肅清する過程で、これらの人物は皆、法輪功弾圧と臓器狩りの犯罪に深く関与していました。調査の過程で、これらの犯罪に関する情報が、たとえ公にされなくとも、習氏の耳に全く届かなかったとは、信じがたいことです。

第二に、国際社会からの情報です。中国共産党が隠蔽しようと努めても、中国での臓器狩りの惨事に関する人権団体や国際議会の報告書、決議、公聴会が、習氏の情報・諜報システムを完全にすり抜けることは、まずあり得ないでしょう。

第三に、問題の根強さです。法輪功弾圧は 20 年以上も続き、中国の国際的信用に影響を与える大きな問題です。習氏のような、ビジョンを持ち、情報を把握している指導者が、これほど長期的で深刻な問題について、完全に「ぼんやりしている」とは考えにくいです。

ですから、私の個人的な推測では、状況は「全く知らない」というよりは、もっと複雑かもしれません。おそらく習氏は、ある程度は知っているが、犯罪の詳細な度合いや、その本当の残虐性については、完全には把握して

いないか、あるいは、誤った情報によって緩和されて認識しているのかもしれませんが。あるいは、そうですね…知ってはいるが、政治的な計算、権力に関する配慮から、「これ以上は知りたくない」と、あるいは「一時的に棚上げにする」という選択をしている可能性もあります。

私のケースのように、おそらく、何か「衝撃的なこと」、何か特別な出来事があって初めて、習氏のような地位にある人物が、この恐るべき真実の全てに、本当に向き合うことになるのかもしれませんが。しかし、その「衝撃」が訪れるのかどうか、そして、彼が行動する勇気を持つのかどうか、それはまた別の問題です。

ええと…これらは、私の経験と観察に基づく、単なる個人的な推測です。中国共産党内部の真実は、常に、予測困難な「ブラックボックス」ですから。

## **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは劉氏の慎重な姿勢に、賛同して頷く)

劉さんは、非常に的確で、バランスの取れた分析をされました。習近平氏のような最高指導者が、法輪功弾圧の

邪悪さの度合いについて「全く知らない」のかどうかは、複雑な問いです。

私も、「全く知らない」可能性は非常に低い、特に彼が権力を握ってから 10 年以上が経過し、反腐敗キャンペーンで起こったことを考えれば、そう思います。

しかし、独裁政権研究には、「意図的な無知（willful ignorance）」あるいは「もっともらしい否認（plausible deniability）」という概念があります。

「意図的な無知」についてですが、指導者は、道徳的または法的な直接的責任を負うのを避けるため、最も暗い側面、具体的な犯罪について、意図的に深く知ろうとしないことがあります。彼らは、政治目標が達成される限り、部下が「汚い仕事」をすることを、暗黙のうちに許可したり、容認したりすることがあります。

「もっともらしい否認」についてですが、部下は、後で追及された場合に上司がその犯罪について知っていたことを「もっともらしく否認」できるよう、残虐な行為の詳細を、意図的に上司に報告しないことがあります。これは、「トップを守る」ための一つの方法です。

習氏のケースでは、多くの要素が組み合わさっている可能性があります。

第一に、彼は法輪功弾圧が残酷であることを知っているかもしれないが、産業規模での臓器狩りの犯罪の、その非道さの度合いを、完全には想像できていないのかもしれない。

第二に、彼は諜報・治安機関から、「美化」されたり、「緩和」されたりした報告書を受け取っているのかもしれない。

第三に、彼は、体制と個人権力の存続にとって「死活問題」だと考える他の問題を優先し、法輪功問題の処理を、一時的に「見て見ぬふり」をしたり、遅らせたりしているのかもしれない。

そして第四に、劉さんがおっしゃったように、「パンドラの箱を開ける」ことへの恐怖、この事件を覆した場合の予測不可能な結果への恐怖もまた、非常に大きな障壁です。

ですから、「全く知らない」というよりは、おそらく習氏は、「知ってはいるが、完全には向き合いたくない」、

あるいは、複雑な政治的計算のために「まだ行動できない／敢えて行動しない」という状態にある、と考える方が、より正確かもしれません。

しかし、国家元首として、最終的な責任は依然として彼にあります。ええ…「知らないこと」（たとえどの程度であれ）は、自らの統治下で進行している人道に対する罪を阻止し、罰しなかったことへの、言い訳にはなり得ません。歴史は、そのことを記録するでしょう。

### **ソフィア・ベル:**

ええ、私がこの仮説を考えたのは、二つの理由からです。第一に、歴史上、多くの王が、側近の役人たちによって情報を遮断され、国が腐敗していることを知らず、国が「泰平」であると信じ込まされていた例が多く見られます。

第二に、習氏のケースでは、実際、彼が法輪功学習者や証言者と直接接触したことは一度もない可能性があり、彼が受け取る情報は全て、部下からの報告に基づいている可能性があります…



さらに、以前、ある人から「習氏は『政令が中南海を出ない』状況にある」という意見を聞いたことがあります。つまり、彼の命令が全て、完全には伝わらず、真剣に実行されていない、ということです…

## 劉思遠:

（劉氏はソフィアが挙げた理由を聞き、頷く。その表情には、それらの分析への理解と同意がうかがえる）

ソフィアさん、あなたが習氏が全ての真実を把握していない可能性についての仮説を補強するために挙げられた理由は、非常に示唆に富んでおり、それらは権力が集中したシステムに固有の現実を反映しています。

王が情報を遮断されることについてですが、おっしゃる通り、中国や他の国々の歴史には、皇帝や最高権力者が、側近や官僚たちが作り上げた「別世界」の中で生きていた例が無数にあります。彼らは美辞麗句や、功績の報告ばかりを聞かされ、厳しい現実、民衆の苦しみ、官僚機構の腐敗は、巧妙に隠蔽されていました。

この情報遮断の目的は、王の歓心を買うため、自身の無能や腐敗を隠すため、あるいは不必要な怒りを避けるた

めであったかもしれません。その結果、王は国が「国泰民安」であると信じ込む一方で、現実には内部から腐敗が進んでいた、ということがあり得ます。

中国共産党のような、上司への忠誠（そして派閥の利益保護）がしばしば真実よりも優先されるシステムでは、「最高指導者が情報を遮断される」というリスクは、ええ…非常に現実的なものです。

習氏が法輪功学習者や証言者と直接接触したことがない可能性についてですが、

これもまた、非常に可能性が高いことです。習氏のような地位にある指導者は、通常、何重もの警備と情報網によって守られています。彼が、法輪功学習者と直接会い、彼らが経験したことを聞いたり、臓器狩りの犯罪の証言者から話を聞いたりする機会を持つことは、ほぼ不可能です。

この問題に関して彼に届く情報は全て、間違いなく、治安機関、プロパガンダ機構、そして専門機関の、何層もの「フィルタリング」を経なければなりません。これらの報告書は、先ほども申し上げたように、「全体の方針」に合わせるため、あるいは指導者に「不安」を与えないために、「編集」されている可能性が非常に高いのです。

直接の接触がなく、被害者の現実の視点がなければ、指導者が政策の残虐さと不正の度合いを完全に感じ取ることは、非常に困難です。彼らは、血の通った人間の痛みや涙ではなく、無機質な数字や報告書しか見ていないのです。

「政令が中南海を出ない」ことについてですが、これは非常に興味深い指摘であり、中国の権力闘争の一端を反映している可能性もあります。習氏が非常に大きな権力を固め、多くの政敵を排除したとはいえ、それは彼が巨大な機構の隅々までを完全にコントロールしている、という意味ではありません。

利権集団、隠れた「太上皇」、あるいは地方、軍、治安システム内の闇の勢力が、もし習氏の指示が自分たちの利益に反する場合、依然として彼の指示を妨害し、弱体化させ、あるいは歪めようとしている可能性があります。

もしこれが事実であれば、たとえ習氏が何らかの政策（例えば法輪功に対する政策）を変えたいという意味を持っていたとしても、彼の命令が下部組織で完全かつ真剣に実行されなかったり、意図的に歪められたりする可能性があります。「上には政策あれば、下には対策あり」とは、中国では珍しくない現象です。

このことはまた、習氏が根深い権力闘争に直面している可能性があり、もし法輪功問題を解決するとしても、それは彼が機構全体の「舵」を本当に握れるかどうか、まだかかっている、ということも意味します。

これら全ての要素が、ソフィアさん、全体像をより複雑にしています。それは、最高権力者でさえも、情報的に孤立させられ、自らの意志の実行を制限され、そして自分がトップに立つシステムそのものからの、目には見えないが非常に強力な抵抗に直面し得る、ということを示しています。

そうですね…これは指導者の責任を軽減するものではありませんが、彼らが直面しているかもしれない困難と複雑さ、そしてなぜ前向きな変化が時として遅々として進まないか、あるいは期待通りに進まないのかを、私たちがより深く理解する助けとなります。

**ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは同意して頷く)

ソフィアさんと劉さんが先ほど分析された点は、非常に的確です。最高指導者を囲む「情報の繭 (information

cocoons)」という現象は、政治学において多く研究されてきた問題です。権力が大きければ大きいほど、周囲の人々によって現実から孤立させられるリスクは高まります。

そして、「政令は中南海を出ず」という言葉は、最強とされた指導者の下でさえも、中国の政治システムにおける権力の断片化や、暗黙の抵抗を古典的に描写したものです。それは、広大な国を、巨大な官僚機構と、多くの異なる利害層を抱えて管理することの複雑さを示しています。

もし習氏が本当にそのような状況にあるとすれば、彼が特定のいくつかの問題に対して「知らない」あるいは「できない」という状況は、信じがたいように見えても、真剣に検討されるべき可能性です。このことは、それらの「情報の壁」を突き破るために、独立した声、外部からの情報がいかに重要であるかを、一層強調しています。

**ソフィア・ベル:**

ええ、もし THE LIVES MEDIA の読者がここまで読まれたら、次のような疑問を持つかもしれません。「昔の王様にはインターネットがなかったから、情報を遮断されるのは理解できる。でも、今の社会では、インターネットが爆発的に普及しているのに、どうして？彼は自分でインターネットで検索することを知らないのだろうか？」…

ですから、劉さんにお伺いします。以前、中国共産党体制の中で様々な役職に就かれていた時、インターネットを使う際に、「グレート・ファイアウォール」にブロックされたり、あるいは、自分がアクセスをブロックされていると気づいたりすることはありましたか？そして、習氏は、自分自身の「グレート・ファイアウォール」によってアクセスをブロックされている可能性はあるのでしょうか？

**劉思遠:**

（劉氏はソフィアの質問を聞き、かすかに微笑む。それは、どこか苦々しく、理解に満ちた笑みだ）

ソフィアさん、これは非常に現実的で、自由なインターネットのある社会に住む多くの人々の疑問を正しく反映

した質問ですね。「なぜ自分でインターネットで検索しないのか？」——単純に聞こえますが、中国での現実には、非常に複雑なのです。

（彼は、正確な言葉を選ぶかのように、一旦言葉を切る）

私がまだシステム内で働いていた頃、様々な役職において、私たちのインターネット使用にも、まあ…ある側面では一般市民ほど厳しくはないかもしれませんが、一定の規定と制限がありました。

「グレート・ファイアウォール」についてですが、ええ、その通り、このファイアウォール・システムは非常に効果的に機能しています。大多数の国民にとって、Google、Facebook、Twitter、YouTube、主要な国際ニュースサイト（BBC、ニューヨーク・タイムズ、THE LIVES MEDIA…）など、「敏感」と見なされる海外のウェブサイトへのアクセスは、完全にブロックされています。アクセスしたい場合は、壁越えツール（VPN）を使用しなければなりませんが、VPN の使用もますます厳しく規制されており、法的なリスクを伴う可能性があります。

幹部や公務員に対しては、  
一部の機関、特に研究、対外関係、あるいは安全保障に

関連する機関では、仕事のために特定の海外ウェブサイトへのアクセスを許可する「専用回線」や「例外」が存在することがあります。しかし、これらのアクセスは通常、厳しく監視されています。

たとえアクセスできたとしても、自己検閲の心理が非常に重くのしかかります。私たちは、ネット上のあらゆる行動が監視されている可能性があることを知っています。

「敏感な」「反動的な」情報を検索することは、不必要なトラブルを招き、キャリア、甚だしくは自分自身と家族の安全に影響を及ぼす可能性があります。ですから、多くの人は、たとえ能力があっても、主流とは異なる情報を敢えて検索しようとはしないか、あるいはしたくないのです。

さらに、内部の情報源（内部向けニュースレター、機密文書、上からの指示など）は、しばしば、「敵対的」で「偏っている」と見なされる外部のインターネット上の「浮ついた」情報よりも、「より重要」で、「より信頼できる」と見なされます。党の公式情報システムに対する、ある種の信頼（あるいは、信じなければならないという強制）が存在するのです。



私自身、アクセスをブロックされていると気づいたか？ もちろん、あります。一部の国際ニュースサイトや自由な議論のフォーラムにアクセスしようとする、エラーメッセージが表示されたり、ページがロードされなかったりすることは、頻繁にありました。しかし、先ほども申し上げたように、それらの情報を得るために敢えて「壁を越えよう」とすることは優先事項ではなく、またリスクも伴いました。私たちは、「管理された情報空間」の中で生きることには慣れていたのです。

では、習近平氏は、自分自身の「グレート・ファイアウォール」によってアクセスをブロックされているのか？  
これは、興味深い質問ですね。

技術的には、彼の地位からすれば、もし望むなら、世界中のいかなる情報源にも無制限にアクセスできる権限を、彼は間違いなく持っています。「グレート・ファイアウォール」は国民を管理するための道具であり、最高指導者を制限するためのものではありません。

しかし、問題は技術だけではなく、「人的フィルター」と「心理的フィルター」にもあります。

第一に、人的フィルターについてです。習氏の周囲の人々——秘書、顧問、諜報・治安機関——は、彼にどのような情報を上げるでしょうか？彼らは、彼の、あるいは党の観点と異なる、外部のインターネットからの厳しい真実を、敢えて提示するでしょうか？それとも、彼らもまた情報を「フィルタリング」し、「都合の良い」「有益な」ものだけを上げるのではないのでしょうか？

第二に、心理的フィルターについてです。たとえ習氏が自分で「Google 検索」できたとしても、彼が信じてきたこと、そして彼のシステムが報告してきたことと完全に矛盾する情報を受け入れるだけの、時間、忍耐、そして何より心を開く姿勢が、彼にあるのでしょうか？権力の頂点に立ち、賞賛の言葉と「見栄えの良い」報告に囲まれてきた人間が、自分が騙されてきた、あるいは自分のシステムが恐ろしい犯罪を引き起こしているということを、容易に受け入れられるのでしょうか？

さらに、インターネットでの情報検索には、真偽を見分け、情報源を照合するスキルも必要です。「公式」情報を受け取ることに慣れた環境では、グローバルなインターネットの混沌とした情報の海を、自ら「泳ぐ」ことは、

彼のような指導者にとっては、通常見られる仕事のやり方ではないかもしれません。

ですから、たとえ習氏が技術的に「グレート・ファイアウォール」にブロックされていなくても、彼は別の「目に見えないファイアウォール」によって「ブロック」されている可能性があります。それは、顧問システム、官僚機構、そして彼自身の政治的偏見や優先順位です。

要するに、インターネットがあるからといって、情報の自由があるとは限らず、特に中国のような、厳しく管理された閉鎖的なシステムの中にいる人々にとってはそうです。そして、トップに立つ者でさえ、真実にアクセスし、それを受け入れることは、「Google 検索」するほど単純なことではないのです。

## **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは劉氏の分析に、同意して頷く)

劉さんは、非常に明確かつ現実的に説明されました。私は、一点だけ補足させてください。

劉さんが言及された「フィルター」に加えて、もう一つの要素、それは\*\*「確証バイアス (confirmation bias)」

\*\*です。人間は、自分がすでに信じていることを確認する情報を探し、信じる傾向があり、反対意見の情報は無視したり、疑ったりする傾向があります。

ある特定のイデオロギーによって形成され、「公式」情報に基づいて政策決定を下してきた指導者にとって、インターネット上で完全に反対の情報を主体的に探し、受け入れることは、心理的に非常に大きな挑戦です。

彼らは、それらの情報を「敵対勢力の産物」「フェイクニュース」「歪曲」と見なすかもしれません。中国共産党のプロパガンダ・システムはまた、外部からの不都合な情報を無力化するための「カウンター・ナラティブ（対抗言説）」を作り出すことにも、非常に長けています。

ですから、たとえインターネットという道具があっても、中国の最高指導者が、私たちが自由な世界で見ているのと同じように真実を「見る」ことができるかは、非常に困難であり、単なる技術的なアクセス能力だけでなく、多くの複雑な要因に依存しているのです。

**ソフィア・ベル:**

ええ、習氏のケースについては、彼が「グレート・ファイアウォール」にブロックされていないと仮定しても、彼がインターネットを通じて情報を検索する可能性も高くない…甚だしきは、彼は「セキュリティ」を理由に、コンピュータやスマートフォンを自分で使わない、ということも考えられますね。

「グレート・ファイアウォール」についてですが、こんな状況がありました。先日、最近マスコミでよく話題になっている、DeepSeek という名の AI アプリを試してみたのですが、それに「法輪功について何か知っていますか？」と簡単な質問をしてみました。お二人は、それがどう答えたと思いますか？

**劉思遠:**

(劉氏はソフィアの AI アプリでの体験談を聞き、かすかに眉をひそめる。どこか意味ありげで、しかし苦々しさも滲む笑みが浮かぶ)

ソフィアさん、それは非常に興味深く、また、現在のテクノロジーという状況下で、非常に考えさせられる状況

ですね。最高指導者たちが、「安全保障」を理由に、コンピュータやスマートフォンを直接使わない可能性がある、というのは、十分にあり得ることです。彼らは通常、テクノロジーと情報に関連する問題を処理するために、アシスタントや秘書のチームを丸ごと抱えています。このことは、私たちが先ほど話した「人的フィルター」の役割を、さらに高めることになります。

そして、AI アプリ、DeepSeek へのご質問についてですが…

（彼は、自分の推測への確認を待つかのように、ソフィアとジュリアンを見る）

もし DeepSeek が、中国の検閲システムの影響下、あるいは少なくともそのコントロール下で開発または運営されている AI アプリであるならば、うーん…法輪功に関するその答えは、非常に…「慎重」、あるいは、政府の方向性に完全に従ったものになると、私は推測できません。

おそらく、それは、  
第一に、一般的で、回避的な答えをするでしょう。例えば、「法輪功は複雑なテーマであり、多くの対立する意

見があります。この問題に関する詳細な情報は提供できません」とか、「私は AI 言語モデルであり、宗教的または政治的な問題について判断を下す能力はありません」といった具合に。

第二に、中国共産党の公式プロパガンダの論調を繰り返すでしょう。彼らのプロパガンダ機構が植え付けた、誤った情報、例えば「中国で禁止されている」「違法行為に関連している」といった、否定的な言葉で法輪功を描写するかもしれません。

第三に、完全に回答を拒否するか、エラーを報告するでしょう。単純に、いかなる情報も提供しないか、あるいは、その要求を処理できないというエラーメッセージを表示する。

そのような環境で活動する AI アプリが、法輪功の健康への恩恵や、道徳的価値について語ったり、あるいは学習者たちが耐え忍んでいる残酷な弾圧に言及したりするような、客観的で、誠実な答えを出すとは、私には思えません。「グレート・ファイアウォール」は、単にインターネットアクセスをブロックする壁であるだけでなく、ええ…AI のようなテクノロジー製品にさえも忍び込む、コンテンツ検閲システムであり、思想誘導システムなのです。

それが、私の推測です。DeepSeek の本当の答えが何であったか、非常に興味がありますね。

## ジュリアン・リー:

(ジュリアンは頷き、ソフィアの話に非常に関心を示している)

これは、情報統制が、いかに人工知能の分野にまで及んでいるかを示す、非常に良い例ですね、ソフィアさん。劉さんは、非常に的確な推測をされました。

大規模な AI モデル、特に中国企業によって訓練または微調整されたモデル、あるいは中国市場で活動したいと考えるモデルは、間違いなく政府の検閲規定に従わなければなりません。そうですね…それらの訓練データは、「敏感な」情報を取り除くために「クリーンアップ」されているか、あるいは、方向付けられた「安全な」答えを出すようにプログラムされている可能性があります。

私も、DeepSeek が、非常に短く、無意味なほど中立的な答えを出し、いかなる価値ある情報も提供しないか、あるいは、もし回避するのがもう少し「賢い」なら、中



国の公式情報源からの情報を選択的に引用する、つまりプロパガンダの論調を繰り返す可能性が高い、という方に傾きます。

もし本当にそうであれば、AI が法輪功に関する真実を「回避」したり、「歪曲」したりすることは、「グレート・ファイアウォール」が単なる技術的な障壁ではなく、大規模な思想統制の試み、認識を形成するための道具であることを、AI の時代においてさえも、改めて証明するものとなるでしょう。

私も、その実際の答えが何であったか、非常に知りたいです。このことは、新しいテクノロジーにおいて、検閲がどの程度、そしてどのような方法で適用されているかについて、私たちに新たな視点を与えてくれるかもしれません。

**ソフィア・ベル:**

ええ、お二人が挙げられた推測の中で、一つが正確でした。それは、劉さんの三番目の推測、つまり、「完全に回答を拒否するか、エラーを報告する」というものです。

私はかなり驚きました！それは、一般的に回避するのではなく、単刀直入にエラーを報告し、さらに、私が彼らの「利用規約に違反した」という通知まで付けてきたのです。たった一つの質問で！

**劉思遠:**

（劉氏はソフィアの答えを聞き、静かに頷く。悲しげな笑みがその唇に浮かぶ。それは、推測が当たったことへの誇りではなく、このシステムについてあまりにもよく知っていることの、ある種の確認のようだ）

では、私の三番目の推測が当たっていたわけですね…「完全に回答を拒否するか、エラーを報告する」。そして、あなたが彼らの「規約に違反した」という通知まで付けて。

（彼は静かに首を振る）

このことは、ソフィアさん、ジュリアンさん、私を驚かせはしませんが、それでも深い悲しみを感じさせます。それは、本来情報を供給するために設計された、「人工知能」とされる道具でさえも、真実を恐れ、政府が「敏

感」と見なす問題を回避するように「プログラム」されてしまっている、ということを示しています。

客観的に存在する法輪功について、簡単な質問をただけで、あなたが「規約に違反した」と通知することは、検閲と思想の押し付けが、いかに深く根付いているかを示しています。彼らは情報をブロックするだけでなく、それらのテーマについて好奇心を持つこと、探求すること自体を、「間違った」「違反」行為であると、決めつけたいのです。

このことはまた、私が以前に言ったことを反映しています。「グレート・ファイアウォール」は、単なる技術的なファイアウォールではありません。ええ…それは、包括的な思想統制システムなのです。それは、真実が窒息させられ、そして最新鋭の道具でさえも、それらの不合理な「規約」に従って身がかがめなければならない、という環境を作り出します。

テクノロジーが、本来、知識を広げ、人々を結びつけるために奉仕すべきものであるのに、検閲を強化し、無知を維持するための道具に変えられてしまうのを見るのは、実に悲しいことです。

これは、非常に具体的で、生き生きとした例であり、このような厳しく管理された環境の中で、私たちが真実を探し、分かち合おうとする際に直面する、挑戦を示しています。この体験を分かち合ってください、ありがとうございます。本当に、多くのことがより明確になりました。

## **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンの表情は真剣で、手帳に何かを書き留めている)

ソフィアさんが今提供してくださった DeepSeek の反応に関する情報は、非常に価値があります。法輪功について尋ねられた際に、AI が回答を拒否し、「規約違反」を報告するということは、テクノロジー企業、特に中国市場に関連する企業が、非常に大きな検閲の圧力に晒されていることを示す、具体的な証拠です。

これには、多くの重要な意味合いがあります。

第一に、AI 分野への検閲の拡散です。これは、中国共産党の情報統制の戦いが、AI プラットフォームにまで拡大したことを示しています。大規模言語モデルは、公

衆の認識を形成する上で、新たな「戦線」となりつつあります。

第二に、事前にプログラムされた「規約」です。AIが「規約違反」を報告するということは、検閲のルールが、そのアルゴリズムまたは訓練データセットに、あらかじめ組み込まれていることを示唆しています。これは偶然のエラーではなく、意図的な設計です。

第三に、歪められた「AI 世界観」のリスクです。情報提供や人間支援においてますます重要な役割を担う AI モデルが、もし重要な問題に関する真実を回避したり、歪曲したりするように「教え込まれる」なら、特に中国のユーザー世代が、歪められた世界観を持つことになるリスクは、非常に大きいでしょう。

第四に、学問の自由と研究への挑戦です。もし、あるテーマについて質問すること自体が「規約違反」と見なされるなら、どうして自由で客観的な学術研究や議論が可能でしょうか？

ソフィアさんの体験は、検閲という「ソフトパワー」がどのように適用されているかの、典型的な例です。それは、単にアクセスをブロックするだけでなく、特定のテ

ーマが、人工知能にとってさえも、「触れることのできない」ものとなる環境を作り出すことなのです。

このことは、独裁政権に支配されない、オープンで透明性のある AI プラットフォームを開発し、保護することの重要性を、一層強調しています。このテクノロジーが、弾圧と統制の道具ではなく、真に人類の利益に奉仕することを保証するために。

この非常に時宜を得た、そして憂慮すべき詳細を分かち合ってください、ありがとうございます。

**ソフィア・ベル:**

ええ…ここまでお話を伺って、中国共産党の邪悪さがどれほど大きくとも、国内外の中国人がインターネットを通じて真実を探求する際には、多かれ少なかれ「グレート・ファイアウォール」の影響を受け、より多角的で客観的な情報にアクセスすることが困難になっている、ということが分かりますね。

**劉思遠:**

（劉氏はゆっくりと頷く。その眼差しには、悲しげだが、しかし深い理解の色が浮かぶ）

ソフィアさんのおっしゃる通りです。中国共産党の「グレート・ファイアウォール」は、そうですね…国内の国民にとって、単なる技術的な障壁ではありません。その影響は、直接的であれ間接的であれ、国境を越えて広がり、世界中から中国に関する真実を理解しようと努めている人々にさえも、影響を及ぼし得ます。

（彼は、「グレート・ファイアウォール」がどのように影響を及ぼし得るかについて考えながら、一旦言葉を切る）

中国国内の人々に対しては、

第一に、情報の孤立です。これが最も明確な影響です。彼らは、世界の自由な情報の流れから切り離されています。彼らが国内および国際的な出来事について知ることは、主に、共産党によって「編集」され、方向付けられたレンズを通してのものです。このことが、「並行現実」を生み出し、そこでは客観的な真実が歪められたり、完全に隠蔽されたりします。

第二に、恐怖心と自己検閲です。たとえ誰かが壁を越えようとしても、監視され、罰せられることへの恐怖が、彼らにネット上での自己の行動を検閲させ、反対意見を表明したり、「敏感な」情報を検索したりすることをためらわせます。長い間には、それが習慣となり、条件反射となります。

第三に、真偽を見分けることの困難さです。長期間にわたって一方的な情報にしか触れていないと、国民の批判的思考能力、情報の真偽を見分ける能力もまた、低下します。彼らは、国家のプロパガンダを容易に信じ、外部からの情報を疑うようになります。

中国国外の人々に対しては、

第一に、内部からの確かな情報へのアクセスの困難さです。ジャーナリスト、研究者、国際人権団体は、中国の実際の状況を理解しようとする際、非常に多くの困難に直面します。証言者へのインタビューや、証拠の収集は、危険で、制限されます。「グレート・ファイアウォール」は、国内からの情報が外部に漏れることを、より困難にしています。



第二に、誤った情報とプロパガンダの拡散です。中国共産党は、「グレート・ファイアウォール」を築いて情報を遮断するだけでなく、ええ…インターネットを積極的に利用して、外国語による国営メディア、偽のソーシャルメディアアカウント、あるいは国際的なメディアプラットフォームへの影響力を通じて、誤った情報やプロパガンダ・キャンペーンを世界に広めています。このことは、情報を混乱させ、独立した情報源への信頼を低下させる可能性があります。

第三に、テクノロジー企業やグローバルなプラットフォームへの影響です。ソフィアさんが先ほど共有された DeepSeek のケースや、中国市場で活動したい他の大手テクノロジー企業のように、彼らは北京の「ゲームのルールに従う」こと、つまり、コンテンツの検閲を行い、ユーザー監視において政府に協力することを受け入れなければならないかもしれません。このことは、間接的に、「グレート・ファイアウォール」の影響範囲を国境の外にまで拡大させることになります。

第四に、個人や組織が中国を批判することへのためらいです。中国側からの経済的報復、サイバー攻撃、あるいは制裁への恐れもまた、海外の一部の個人や組織が、敏

感な問題について声を上げる際に、より慎重になる原因となり得ます。

このように、中国共産党の犯罪がどれほど大きくとも、「グレート・ファイアウォール」は依然として、彼らが真実を隠蔽し、歪め、そして正義を求める努力を困難にするための、有効な道具なのです。それは、単に中国国民だけの問題ではなく、そうですね…世界規模での情報の自由と真実への挑戦でもあります。

私たちがここに座り、これらのことを分かち合い、明らかにしようと努めていること、それ自体が、たとえほんの一部であっても、その「ファイアウォール」を突き破るための一助となる努力なのです。

### **ジュリアン・リー:**

(ジュリアンは頷き、国際ジャーナリストとしての視点を付け加える)

劉さんは、「グレート・ファイアウォール」の影響を、非常に包括的に分析されました。全く同感です。

私の報道経験から、私は、「グレート・ファイアウォール」が単なる検閲システムであるだけでなく、中国に\*\*

「閉鎖的な情報エコシステム」\*\*を生み出していると感じています。そのエコシステムの中では、「国内」のアプリ、プラットフォーム、そしてコンテンツが優先的に開発され、支配し、一方で外部からの競合相手は締め出されます。このことが、中国国民を、政府による管理と監視が容易な、国内サービスに、ますます依存させるのです。

そして劉さんがおっしゃったように、その影響は国境に留まりません。私たちは今、「情報戦」とも言える世界的な状況を目の当たりにしています。そこでは、中国のような独裁政権が、プロパガンダを広め、影響力を行使し、そして民主主義国家を弱体化させるために、ますます巧妙にテクノロジーを利用しています。彼らは、偽ニュースを拡散させる技術を非常に速く学び、AI を使って誤ったコンテンツを生成し、そして自由な社会の弱点を攻撃します。

DeepSeek のような AI プラットフォームが、法輪功について尋ねられた際に「規約に従わなければならない」という状況は、憂慮すべき一例です。それは、もし私たちが警戒し、AI の倫理、訓練データの透明性に関する明確な規則を設けなければ、真実と自由のためではなく、

検閲とプロパガンダの目的のために奉仕するテクノロジー・ツールを生み出してしまうリスクがあることを示しています。

したがって、「グレート・ファイアウォール」や類似の情報統制の試みとの戦いは、中国国民だけの戦いではなく、ええ…真実、言論の自由、そして健全で信頼できるサイバー空間を尊ぶ、全ての人々の戦いでもあるのです。

**ソフィア・ベル:**

ふと、こんな結びの言葉を思いつきました。「情報の統制あるところ、隠蔽しようとする悪事あり」…

お二人は、そう思われますか？

**劉思遠:**

(劉氏はソフィアの結びの言葉を聞き、静かに頷く。深い同意がその眼差しにはっきりと浮かぶ。彼は、その要約について熟考するかのように、少し黙り、そしてゆっくりと話す)

ソフィアさん、あなたのその言葉、「情報の統制あるところ、隠蔽しようとする悪事あり」…それは、簡潔で、

要を得ていますが、非常に痛ましく、また普遍的な真実を、見事に言い表しています。

（彼は一旦言葉を切り、ソフィアとジュリアンを見て、続ける）

私自身の経験から、つまり、厳格な情報統制システムの中にいた者として、そして後に真実を探求しようとした者として、私はその所見に完全に同意します。

なぜ情報を統制する必要があるのか？ もし政府が本当に清廉潔白で、本当に国民のためを思っており、もし彼らが打ち出す政策が本当に大多数の利益をもたらすのであれば、彼らが真実を恐れる理由は何でしょう？彼らが隠蔽すべきことは何でしょう？むしろ逆で、彼らは情報を透明にし、国民が理解し、支持してくれることを望むはずです。

情報の統制が隠蔽するものは何か？ それは通常、弱さ、腐敗、誤った政策決定、法律に違反する行為、そして特に、国民に対する犯罪を隠蔽するためです。真実が暴かれれば、彼らの威信は失墜し、権力は揺らぎます。ですから、彼らはあらゆる手段を使って隠蔽し、情報の流れ

をコントロールし、偽りのイメージを維持しなければならないのです。

情報の統制は、自信の欠如と恐怖の現れです。自らの正義に自信を持つ、強力な政府は、反対意見や批判を恐れる必要はありません。彼らは、公に対話し、議論することを厭わないでしょう。弱い者、自分が間違っていると知っている者だけが、他人を黙らせるために、検閲と弾圧に頼るのです。

法輪功弾圧は、典型的な例です。もし法輪功が、彼らが宣伝するように本当に「邪教」であるなら、なぜ彼らは書籍や資料を禁じ、法輪功について客観的に語る全てのウェブサイトをブロックしなければならないのでしょうか？なぜ彼らは、学習者の証言や、臓器狩りの犯罪の証拠を恐れるのでしょうか？まさしく、真実が自分たちの側にはない、と知っているからです。まさしく、自分たちがしていることが邪悪であり、犯罪であるからこそ、彼らはそれを何としても隠蔽しようと必死になるのです。

あなたの言葉は、中国だけでなく、おそらく、世界のどこであれ、いつの時代であれ、情報の自由が踏みにじられる場所であれば、どこにでも当てはまるでしょう。そ

れは、まるで法則のようです。闇は常に光を恐れます。  
嘘は常に真実を恐れます。

それは、非常に見事な結びの言葉です、ソフィアさん。  
考えさせられますね。

**ジュリアン・リー:**

(ジュリアンはきっぱりと頷き、明確な賛意を示す)

ソフィアさんの結びの言葉と、劉さんの分析に、完全に  
同意します。それは、非常に的確で、高い普遍性を持つ  
所見です。

ジャーナリズムと言論の自由の研究分野には、不文律の  
原則があります。政府による情報検閲の度合いは、通常、  
その政府が隠蔽している不正や不審な事柄の度合いと、  
比例する、ということです。

情報が自由に流通し、報道機関が監視と批判の役割を果  
たすことができる、開かれた透明な社会は、通常、腐敗  
の度合いが低く、政府の説明責任が高く、そして国民が  
より尊重される社会です。

逆に、情報が厳しく管理され、国家が真実を独占し、異論を唱える声が抑圧される場所は、そこは通常、権力の乱用、腐敗、不正、そして組織的な犯罪にとって、肥沃な土壌となります。

中国の「グレート・ファイアウォール」は、まさしく、悪事を隠蔽するための情報統制の、極端な現れです。その目的は、国民が真実にアクセスするのを防ぐだけでなく、共産党によって書かれた「公式の物語」、つまり、現実を美化し、それに挑戦する者を誰であれ中傷する物語を、維持することなのです。

ソフィアさんの言葉は、いかなる政権の本質をも評価するための、単純だが効果的な「リトマス試験紙」と見なすことができます。もし彼らが情報を恐れ、国民を黙らせようとするなら、その検閲の幕の背後では、間違いなく、何か非常に良くない、非常に邪悪なことが起こっているのです。

これは、情報の自由の重要性と、どこにしようとも、敢えて真実を探し、声を上げる人々の役割を、力強く思い起こさせるものです。



**ソフィア・ベル:**

そして、このような情報が検閲される場所では、多くの人生が、誰にも知られずに悲劇的な状況に追いやられるという出来事が、非常に起こりやすいのですね…

ええと…ここまでお話しして、私はふと、次のテーマについて考えました。どうすれば、人々が最低限の言論の自由を享受できる、より良い国を築くことができるのか？

お二人は、哲学、指導者思想、そして政策制度の構築に関心をお持ちの方々ですから、このテーマに関する質問には、きっと非常に興味を持たれ、専門的な見識をお持ちだと思います…

しかし、本日はもうお昼近くになってしまいました。このテーマは、明日の朝に持ち越すというのは、いかがでしょうか？

**劉思遠:**

（劉氏はソフィアが新しいテーマを切り出すのを聞き、その眼差しが少し輝き、関心を示しているのが分かる。

しかし、彼もまた時計を見て、ソフィアの提案に同意して頷く)

ソフィアさん、あなたが今挙げられたテーマ——「どうすれば、人々が最低限の言論の自由を享受できる、より良い国を築くことができるのか」——は、実に非常に大きな問題であり、私だけでなく、おそらく、公正で、文明的で、進歩的な社会を望む者であれば誰でも抱く、悩みでしょう。

それは、私がかつて研究の仕事に携わっていた年月、そして政界に足を踏み入れてからも、答えを見つけようと努めてきた問いです。もっとも、当時の私の考えは、まあ…まだ多くの制限があり、偏見に左右されていたかもしれません。そして今、経験したこと、そして修煉の道から得た新たな理解をもって、私はそれについて、さらに深く思索しています。

基盤となる哲学、指導者の思想、政策制度の構築方法…それら全てが、一国を形成する上で、非常に重要な役割を果たします。

私はこのテーマに非常に興味があり、喜んで自分の考えを分かち合いたいと思います。しかし、おっしゃる通

り、今朝の時間ももうあまり残っていませんね。これは大きなテーマであり、その側面を十分に深く掘り下げるためには、十分な時間が必要です。

ですから、あなたのご提案に完全に同意します。明日の朝は、この問題の議論に集中しましょう。ジュリアンさんも加わってくださることで、私たちは非常に豊かで有益な意見交換ができると信じています。そうですね…私も、明日の議論のために、自分の考えをじっくりと考え、整理する時間が持てます。

### **ジュリアン・リー:**

(私は、ジュリアンの声で、興味深げな表情を見せ、この機会に本を紹介する)

ソフィアさんと劉さんに全く同感です。より良い国を築くというテーマ、特に言論の自由を保障することは、いかなる文明社会にとっても、最大の挑戦の一つであり、また、最も高潔な目標の一つでもあります。

ええ…これは、私が多くの時間を費やして研究してきた分野でもあります。ソフィアさん、劉さん、明日の議論のテーマについて、私は本当に深い関心を持っています。

ここ数年、私の仕事もまた、権力を離れた後の指導者たちの思考と遺産について理解することに、かなり集中してきました。私は、多くの元高級官僚や、数名の元国家元首と会い、インタビューする機会がありました。

一つ、私が最近、非常に多くの心血と時間を注いで行った特別なインタビューがあります。それは、ある元大統領とのものです。何日にもわたる対話で、彼の任期中の最も重要な決断、彼の苦悩、彼が学んだこと、そして最も重要なことに、彼が自らの遺産をどのように記憶されたいと願っているかについて、深く掘り下げました。

私が現在、完成過程にある本で、タイトルは『権力の後：遺産 — ある元大統領との対話』（"AFTER POWER: THE LEGACY - A Conversation with a former President"）といます。草稿もまた、試読者の方々から、いくつかの好意的な初期反応をいただいております。

（ジュリアン・リーは鞆の中から、丁寧に製本された草稿の束を取り出す）

あのう…つきましては、劉さん、明日これらのテーマについて議論するにあたり、もしご迷惑でなければ、今夜、目を通していただけるように、この草稿を一部、贈らせ

ていただいてもよろしいでしょうか。あなたの経験と博識をもってすれば、職を辞した後の別の指導者の省察を読み、そしてその後、ご自身のユニークな視点から「権力」と「遺産」についてお話しいただくことは、私たちの議論に、非常に貴重な価値をもたらすと信じております。

**劉思遠:**

(劉氏は少し驚くが、敬意を表し、草稿を受け取る)

おお、ありがとうございます、ジュリアンさん。これは、本当に意義深く、また非常に時宜を得た贈り物です。

『権力の後：遺産』…非常に考えさせられるタイトルですね。今夜、必ずじっくりと読ませていただきます。そして、明日の私たちの意見交換も、非常に楽しみです。きっと、さらに多くのことを深く考える機会になるでしょう。

**ソフィア・ベル:**

素晴らしいです！では、また明日の朝、お会いしましょう。きっと、また価値ある分か-ち合いの会になることでしょう。



# 三日目

---

ソフィア・ベル (Sophia Bell):

おはようございます、劉さん！良い一日を！本日も、私とジュリアンは、あなた様のお話を引き続き伺うために参りました。これまでの二日間は、本当に多くのことを考えさせられました。

ジュリアン・リー (Julian Lee):

おはようございます、劉さん。引き続き、私たちのために時間を割いていただき、ありがとうございます。劉さん、ソフィアも申しましたように、あなた様の物語と分析は、非常に価値のある多くの視点を開いてくれました。また、私が送らせていただいた書籍『権力の後：遺産』の草稿に目を通すことをお引き受けくださり、大変感謝しております。

**劉思遠**（リュウ・スーユエン）：

（静かに微笑み、頷く）

おはようございます、ソフィアさん、ジュリアンさん。お越しいたきありがとうございます。ええ、ジュリアンさんの草稿『権力の後：遺産』に、さっとですが時間を取って目を通していただきました。ざっと目を通しただけですが、感じ取ったものは、実に深い印象を残しました。そうですね…元大統領という、権力の頂点に立った方が、体制の本質、権力の限界、そして特に、核心的な道徳的価値への回帰について、これほど率直な省察と自問をされていることに、私はかなり驚き、また非常に敬意を表します。本の中には、私が考えさせられ、共感を覚える点が多々ありました。特に、彼が国家や社会にとって「徳を本と為す」ことの重要性を強調している



点です。そのことは、私がかつて無意識のうちに見過ごしていた、多くの東洋の古人の教えを思い出させてくれました…

**ソフィア・ベル:**

その点に触れていただけるとは、非常に興味深いですね、劉さん。これまでの二日間、私たちはあなた様の個人的な体験、法輪功弾圧の本質、そして中国共産党の犯罪について深く掘り下げてきました。本日は、おそらく、国を治める道、より良い社会について、東西両洋の古の価値観や哲学を、共に振り返ることができるのではないかと思います…

劉さん、これまでの全ての経験、そして特に、ここ一年余り、法輪功の修煉に入られてから、古人の教え、例えば\*\*「上が正しからざれば、下は則ち乱る」\*\*という言葉などを、今日の中国の現状に照らし合わせた時、何か新しい見識はありますでしょうか？

**劉思遠:**

(頷き、その眼差しには深い思索の色が浮かぶ)

ソフィアさん、あなたの質問は、私が、特にこの一年ほど、大いに悩んできた点に触れています。以前、まだ研究者、役人であった頃、私も「上が正しからざれば、下は則ち乱る」といった古人の教えを読んだことはありました。しかし正直なところ、当時はそれらを、歴史の要約、経験則として見てただけで…その背後に隠された宇宙の法則を、真に深く理解してはいませんでした。私は経済モデルや政治体制に集中しすぎるあまり、国家の根本、社会の盛衰が、まさしく為政者の道德、そしてさらに広くは、民族全体の道德にあるのだということを、忘れていたのです。

中国共産党の、法輪功弾圧における極限までの残虐さと偽りを目の当たりにし、そして後に、幸運にも大法に触れ、『轉法輪』を読むことができて初めて、私の世界観は完全に変わりました。まるで長い夢から覚めたようでした。「上が正しからざれば、下は則ち乱る」は、もはや空虚な言葉ではなく、今日の中国社会の隅々にまで、痛々しいほど、そして明確に現れています。「上」——つまり、最高権力を握る者たちが、人類の普遍的価値に完全に背き、良心を踏みにじった時、「下」——つまり、社会全体が、「乱れない」でいられるのでしょうか？いや…それは必然であり、避けられない因果なのです。

**ジュリアン・リー:**

(真剣に耳を傾け、そして話を続ける)

劉さんの最初のご意見に、全く同感です。各国の政治と歴史の研究という観点から、一つの法則が明確に見られます。いかなる体制も、それがどれほど優れているように設計されていても、それを運営する人々の道徳的基盤が欠けていれば、遅かれ早かれ、衰退の道を辿るか、あるいは圧政の道具となるかです。「上が正しからざれば、下は則ち乱る」という言葉は、東洋文化だけに当てはまるのではなく、西洋の歴史にも類似の現象が見られます。支配するエリート層が廉潔さを失い、個人的な利益や派閥の利益を追い求める時、公衆の信頼は蝕まれ、社会の分断は増大し、そして不安定は避け難いものとなります。これらの古の哲学を、現代の状況、特に中国で起こっていることに照らし合わせることは、私たちが問題の根本を理解するために、非常に必要なことです。

**ソフィア・ベル:**

劉さん、ジュリアンさん、非常に深い概括的なお話をありがとうございます。劉さん、もう少し具体的に分析していただけますか。あなた様が目撃し、体験されたことから、中国における「上」の「不正」はどのように現れ、そしてそれが、特に法輪功弾圧という状況下で、社会の「乱れ」をどのように引き起こしたのでしょうか？

**劉思遠:**

(静かに頷き、声はより低く、憂いを帯びる)

ソフィアさん、中国における「上」、つまり共産党の「不正」は、単なる個別の不正行為ではなく、ええ…その本質、その核心的なイデオロギーからの腐敗なのです。

第一に、それは神仏と伝統的な道德価値の完全な否定です。政権を奪取して以来、中国共産党は伝統文化を組織的に破壊し、それを、階級闘争、暴力、そして無神論に基づくマルクス・レーニン主義に置き換えてきました。彼らは、国民、特に若い世代の頭に、神仏は存在せず、因果応報もなく、人間は自然の主であり、目的を達成するためなら何をしていても良い、と植え付けました。道德の根幹、天地神仏への畏敬の念がなくなれば、悪にどんな限界があるのでしょうか？

第二に、それは体制の本質となった、組織的な嘘と欺瞞です。公正で自由な社会を約束した当初の言葉から、美化された経済成長の数字、そして天人ともに許しがたい犯罪の隠蔽に至るまで…全てが嘘です。彼らは、国民と世界の目を欺くために、プロパガンダによる巨大な「赤いヴェール」を築きました。トップに立つ者、システム全体が、嘘で生きている時、どうして「下」に正直であれと要求できるのでしょうか？

第三に、それは暴力と絶対的権力の崇拜です。「権力は銃口から生まれる」——この言葉が、指針となりました。異なる思想を持つ者、党の独裁的権力を揺るがす恐れのある集団は、誰であれ、敵と見なされ、殲滅されなければなりません。彼らは徳をもって人心を服させるのではなく、公安、軍隊、刑務所、労働改造所を使って弾圧するのです。

まさしく、その根源的な「不正」から、社会の全面的な「乱れ」が引き起こされました。

腐敗は国家的な災いとなり、政治局の最高幹部から、村レベルの末端役人に至るまで、誰もが国民の汗と涙の上で、私腹を肥やし、富を築こうとしています。なぜなら、

道徳がなく、因果を信じなければ、貪欲に際限がなくなるからです。

社会道徳は深刻に退廃しました。人々は利益のために互いを騙し、汚染食品や偽物商品が蔓延しています。無関心、利己主義が、各家庭、各人間関係に忍び込んでいます。なぜなら、「上」が悪しき手本を示し、あらゆる道徳的価値を踏みにじった時、「下」がどうして善意を保てるのでしょうか？

そして、その「乱れ」の頂点は、法輪功弾圧ほど明確なものはありません。

法輪功は、人々に「真・善・忍」に従って生きることを教え、人間を最も素晴らしい道徳的価値へと回帰させようとするものです。しかし、これほど穏やかな法門が、ただ、学習者の数が党員の数を超えたというだけで、中国共産党のトップ、特に江沢民に、権力を脅かされていると感じさせたのです。その理不尽な嫉妬と恐怖心が、現代史において最も残酷な弾圧キャンペーンへと変わりました。彼らはでっち上げ、誹謗中傷し、プロパガンダ機構の全てを使って法輪功を中傷し、善良な修煉者を「国家の敵」に変えました。何百万人もの人々が逮捕され、残忍な拷問を受け、労働収容所に送られ、生きたま

ま臓器を狩られました…これはもはや「乱れ」ではありません。これは人道に対する罪であり、人間性を完全に失った政権の、邪悪な本質を最も明確に示したもののなのです。

## ジュリアン・リー:

(注意深く聞き、そして付け加える)

劉さんの、中国共産党の「不正」と、その結果としての「乱れ」に関する分析は、非常に的確です。私は、一点だけ、側面を補足したいと思います。それは、この「不正」が、中国共産党が、意図的に中国国民を、彼ら自身の偉大な文化的根源から切り離したことにも現れている、という点です。伝統との、そして何千年にもわたって培われてきた道徳的価値との繋がりを失った民族は、操作されやすくなり、外来の、そして過激なイデオロギーに導かれやすくなります。人々が天地を敬うことを知らなくなり、因果を理解しなくなれば、彼らが悪事を働いたり、悪を容認したりすることが、ずっと容易になります。文化大革命は、まさしく、伝統文化を根こそぎ破壊した典型的な例であり、その影響は今日まで根強く残り、法輪功に対するような弾圧が起こり得る土壌を作り出しているのです。

## 劉思遠:

ジュリアンさんのおっしゃる通りです。彼らは伝統文化を恐れています。なぜなら、「真・善・忍」の価値、古人が重んじた「仁・義・礼・智・信」の道徳は、彼らの偽りと暴力の本質と、完全に対立するからです。そう…伝統文化を深く身につけた人間が、彼らのような無神論的で、非道徳的な党派の支配を受け入れることは、難しいでしょう。

## ソフィア・ベル:

ええ…とすると、国の統治は「徳」を根本とすべきである…それは昔の封建的なモデルだけでなく、今日の共産主義モデルや資本主義モデルにも当てはまる、と私は理解しています。どうやら、いかなるモデルや体制であっても、もし指導者層と国民が徳を根本としなければ、遅かれ早かれ社会は混乱し、そして衰退していく…しかし、もし「良いモデル」があれば、その腐敗はもっとゆっくりと進む可能性があるのでしょうか、劉さん、ジュリアンさん？そして、「徳を本と為す」ことについて語る時、道家の思想である\*\*「黄老の無為」や「帝道は徳を立つ」



\*\*といった考え方は、今日の私たちにどのような示唆を与えてくれるのでしょうか？

**劉思遠:**

ソフィアさんが提起されたのは、非常に深い問題ですね。ええ…確かに、「モデル」や「体制」にも、それなりの役割があります。権力監視のメカニズムがあり、透明性のある、良く設計された体制は、社会全体の道徳が低下した際に、その腐敗をある程度抑制したり、少なくともそのプロセスをより緩やかに、より痛みの少ないものにしたりすることができるでしょう。しかし、やはり私は、それは枝葉に過ぎないと考えます。もし「徳の根」が揺らいでしまえば、どれほど良いモデルであっても、最終的には、不道徳な者たちによって突き破られ、利用されてしまうでしょう。歴史は、一見、堅固に見えた多くの共和国、多くの民主体制もまた、エリート層と民衆が根本的な道徳価値を失った時に、衰退してきたことを示しています。

そして、あなたが言及された道家の思想、例えば「黄老の無為」や「帝道は徳を立つ」については、そうですね…これらこそ、私が修煉に入ってから、非常に深く身に染みて感じている治国（ちこく）の哲学です。

「黄老の無為」とは、何もしないという意味ではなく、為政者が天の道に従い、自然の法則に従い、粗暴に干渉せず、自らの主観的な意志を民衆に押し付けない、ということです。民衆が自由に生活し、自由に発展するに任せ、政府はただ、自然に流れる水のように、穏やかに調和させ、導く役割を果たすだけです。

「帝道は徳を立つ」とは、トップに立つ者が、自身の道徳を修養することを重んじ、自らの徳性をもって民衆を感化し、手本となることを強調します。上の者に徳があれば、民衆は自ずとそれに倣い、社会は平穏になり、厳しい刑罰や、煩雑な法律は必要なくなります。

中国共産党に照らし合わせてみてください。彼らは完全に逆のことをしてきました。彼らは「無為」ではなく、極端に「有為」であり、思想、信仰から、生計に至るまで、民衆の生活のあらゆる側面に干渉します。彼らは「徳を立てる」のではなく、暴力と、偽りのプロパガンダによって「威を立てる」のです。その結果はどうでしょう？それは、矛盾と緊張に満ち、民衆が恐怖の中で生き、信頼を失った社会です。法輪功弾圧は、その「有為」と「無徳」の典型的な例です。人々に心を修め善に向かうことを教え、「真・善・忍」に従って生きることを教

える法門が、彼らにとっては脅威と見なされ、あらゆる手段で殲滅しようとされます。彼らは大いなる道に、天意と民心に、背いてしまったのです。

## **ジュリアン・リー:**

劉さんの分析に、全く同感です。道家の「無為」という概念は、西洋の政治哲学の観点から見ると、「制限された政府（limited government）」や、古典的自由主義（classical liberalism）の思想と、興味深い類似点があります。そこでは、国家の役割が、基本的な自由の保護と秩序の維持に限定され、残りは社会が自律的に運営されるに任せられます。しかし、劉さんが指摘されたように、核心的な違い、そして道家の深遠さは、それが「道」と「徳」の上に基礎を置いている点です。「無為」の政府とは、単に干渉しないということだけでなく、指導者が一定の道徳的境地に達し、宇宙の法則を理解し、そして人々が道徳的に生きる時の、社会の自己調整能力を信じているからこそ、干渉しないのです。

そして、「帝道は徳を立つ」については、それは、多くの現代民主体制が時として軽視する点、つまり、指導者個人の道徳的品性を強調します。私たちは、非常に民主的な選挙プロセスや、複雑な監視メカニズムを持つこと

ができますが、もし選ばれた者が徳を欠いていれば、やはり彼らは、個人的な利益や派閥のために、システムを巧みに操る方法を見つけ出すことができます。逆に、真に徳のある指導者は、たとえ不完全な体制の中にあっても、国家に安定と繁栄をもたらすことができます。古代中国の歴史には、堯、舜、文王、武王のような多くの名君がいますが、彼らが国を治めたのは、権謀術数や厳しい法律によってではなく、まさしく自らの徳性によってであり、それによって天下を心服させたのです。

## 劉思遠:

おっしゃる通りです、ジュリアンさん。昔の聖王たちは、ええ…民をコントロールするために、大掛かりなプロパガンダ機構も、大勢の公安部隊も必要としませんでした。彼らはただ、道に従って正しく生き、自身を修め、民の手本となるだけでよかったのです。その時、老子が言うように、「我れ無為にして民は自ら化し、我れ静を好みて民は自ら正し、我れ事無くて民は自ら富み、我れ欲無くて民は自ら樸（ぼく）なり」。（私が何もしなくても民は自然に感化され、私が静けさを好めば民は自然に正しくなり、私が事を起こさなければ民は自然に豊かにな

り、私が無欲であれば民は自然に素朴になる。) それこそが、国を治める道の、最高の境地なのです。

**ソフィア・ベル:**

もし「徳」を根本とする必要があるのなら、最高指導者の徳が大きければ大きいほど、国民や国家にとって利益になる、と理解してよろしいでしょうか、劉さん、ジュリアンさん？

もしそうであれば、別の疑問が湧いてきます。どうすれば、徳と才能を兼ね備えた人物を選ぶことができるのでしょうか？…

古代中国の歴史には、堯と舜の時代の「禅譲（ぜんじょう）」がありましたが、今日では、大多数の国が選挙という形式を取っています…それらの形式は、本当に最もふさわしい人物を見出すことを保証できるのでしょうか？そして、儒家の\*\*「修身、齐家、治国、平天下」\*\*という哲学は、指導者に求められる品性について、私たちに何か示唆を与えてくれるのでしょうか？

**劉思遠:**

(頷き、賛同の表情を見せる)

ソフィアさんは、私の意図を非常によく理解されています。ええ…指導者の徳が高ければ高いほど、国家と民衆の福德もまた、大きくなります。なぜなら、トップに立つ者に徳があれば、彼は民を子のように愛し、国家の利益を個人の利益の上に置き、賢明で有能な人物を登用することを知り、そして天の道、道理に反することはしないからです。

どうすれば徳と才能を兼ね備えた人物を選べるか、という問いについては、実に、これは古来、いかなる体制においても難問でした。「禅譲」という、堯・舜の時代のやり方は、後継者が血統や派閥ではなく、検証された徳と才能に基づいて選ばれる、理想的なモデルです。それは、公平さと、民を思う心の頂点です。しかし、そのモデルは、現職の為政者が、私心のない、真の聖人であることを要求し、また、当時の社会も非常に高い道徳的基盤を持っていなければなりませんでした。

今日、選挙は多くの民主国家で一般的な形式です。理論上は、国民に自らの代表者を選ぶ権利を与えます。しかし、ご存知のように、実際には、選挙にも多くの問題があります。それは、金銭、メディア、華やかだが非現実的な公約、そして大衆の一時的な感情に、容易に左右さ

れます。時として、演説がうまく、ロビー活動に長けた者が当選し、必ずしも、本当に徳と才能があり、民を思う心を持つ者が選ばれるわけではありません。中国では、最高指導者の地位のための、真の選挙など、もとよりありません。それは完全に、党内部の権力闘争と、談合によるものです。

そして、儒家の「修身、齐家、治国、平天下」の哲学については、これこそが、指導者、君子としての道筋と品性に関する、非常に重要な指針です。それは、非常に論理的な順序を示しています。天下のために大きな事を成し遂げたいのであれば、まず、自分自身の道徳を修めること（「修身」）から始めなければならない。自身に徳と知恵が備わって初めて、自分の家庭をうまく治めることができる（「齐家」）。家庭が和やかで、規律正しければこそ、一国をうまく治めることができる（「治国」）。そして国が安定し、繁栄して初めて、天下全体に平和と安定をもたらすことを考えることができる（「平天下」）。

中国共産党は、この順序と完全に逆行しました。彼らの指導者たちに、果たして本当に「修身」した者がどれほどいるのでしょうか？それとも、彼らはただ、自身のため、

家族のため、派閥のために、私腹を肥やすことしか考えていないのでしょうか？多くの高級幹部の家庭はスキャンダルに満ち、子供たちは国民の金で海外で贅沢な暮らしをしています。「修身」できず、「齊家」もできない者が、どうして「治国」をうまくできるのでしょうか？彼らが、「真・善・忍」に従って「修身」することを教える法輪功を弾圧することは、まさしく、彼らが道徳を持つ人々を恐れ、偽りと暴力に基づく自らの支配基盤を揺るがしかねない価値を恐れていることの、最も明確な証拠なのです。

## ジュリアン・リー:

(話を続ける)

ソフィアさんが提起された、徳と才能を兼ね備えた指導者の選択という問題、そして劉さんの「禅譲」と「選挙」に関する分析は、実に、永遠の課題です。西側の民主主義国家、多党制の選挙システムを持つ国々でさえ、本当にふさわしい指導者を見つけ出し、選出することは、依然として非常に困難です。劉さんがおっしゃったように、金銭とメディアの影響が、あまりにも大きいのです。時として、公衆は、候補者の本質や能力を見るよりも、巧



みに作られたイメージや、計算され尽くしたメッセージに、引きつけられてしまいます。

儒家の「修身、齐家、治国、平天下」の哲学は、東洋から生まれたものですが、普遍的な価値を持っています。それは、指導者の能力が、単なる管理スキルや専門知識だけではなく、個人の品性から始まらなければならない、と強調します。指導者は、その公的な役割から、その個人としての人間性を切り離すことはできません。私生活における不誠実さ、貪欲さ、あるいは他の個人的な道德問題は、遅かれ早かれ、彼らが権力を握った際の決定や行動に、影響を及ぼすでしょう。

そして私は、「修身」におけるもう一つの重要な点は、自己認識、自己を改める能力、そして傾聴する能力であると考えます。どれほど才能ある指導者であっても、「修身」を知らず、自らを省みることを知らなければ、非常に容易に独裁的になり、現実からかけ離れてしまうのです。

### **劉思遠:**

ジュリアンさんのおっしゃる通りです。「修身」とは、ただ道德を守ることだけでなく、絶えず学び、自分を改

める過程でもあります。古人は「人、十全なるは無し」と言いました。誰にでも欠点はあるのです。重要なのは、それを認め、正す勇気があるかどうかです。中国共産党の指導者たちは、自分たちを「知恵の頂点」「人民の利益の代表」と見なしているため、決して過ちを認めようとせず、その意味での「修身」をしようとはしません。ええ…全ての過ちは、「敵対勢力」や、客観的な要因のせいにされます。それこそが、「不正」の、もう一つの現れなのです。

### **ソフィア・ベル:**

しかし、現代の人々にとっては、そうですね…外側の華やかなもの、見えやすいもののほうが、説得力があるのでしょうか…一方で、無形で抽象的な古代の思想は、人々には認識しにくいものです…まさしくそのため、過去約40年間の中国の爆発的な経済発展は、まばゆい「ダイヤモンド」のように、国内の民衆と国際的な友人たちの支持を集めてきました…

ここまでお話しして、私はまた、2018年のベトナム出張のことを思い出しました。南から北へとベトナムを縦

断する列車に乗っていた時、時折、列車は田舎や丘陵地帯を通り抜けました…その時、列車の窓から遠くの緑豊かな山々を眺めながら、私はふと、隣に座っていた別のお客さんに感嘆してこう言ったのです。「ベトナムの皆さんは、森林保護の意識がとても高いのですね」と…その時、そのお客さんが私にどう答えたか、お分かりになりますか？…

彼はこう答えたのです。「この美しいアメリカの記者さん、あなたが見ている緑豊かな景色は、あなたが思っているような素晴らしいものではないんですよ！」と…

私には彼の意図がよく分からず、聞き返しました。「どういう意味ですか？！」と。

彼は説明してくれました。「ご存知ですか、あの遠くの緑豊かな森はユーカリの森で、工業用の木を植えるために森林を伐採した『成果』なんですよ…ユーカリは成長が早い木で、製紙業の原料にはとても適しています。しかし、ご存知ですか、人々は気づいていないのですが、ユーカリは土地の肥沃度を恐ろしく破壊する木なんです！土壌の湿度を保つ能力がないだけでなく、その葉や根に含まれる毒で、他の低木を殺してしまう…そして、この木を約 10 年も植えれば、丘や山は侵食され、色あせ、

低木や微生物は生きていけなくなる…遠くから見ればとても美しいですが、近くに寄って地面を見下ろせば、丘や山の地面が、まるで砂漠のように荒れ果てているのが分かるでしょう…」と。

このイメージは、私に衝撃を与えました…

そして後になって、私はベトナムのユーカリの森のイメージを、中国の共産主義体制に重ね合わせるようになりました…超高層ビル、近代的な都市、目覚ましい経済成長の数字…もしかして、それもまた、道徳、文化、人権における、内側からの荒廃、破壊を隠しているのではないのでしょうか、劉さん、ジュリアンさん？そして、それこそが、古人が警告した「霸道」の一つの現れ、つまり、持続可能な道徳的基盤を持たず、ただ表面的な力にのみ依存する統治ではないのでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの話聞き、しばらく沈黙する。その顔には、深い思索と共感の色がはっきりと浮かぶ）

ソフィアさん、あなたの物語と、その連想は、実に身に染みる、非常にイメージ豊かなものですね。「ユーカリ

の森」…私はぞっとしました。それは単なるイメージではなく、まさしく、共産党の統治下での、いわゆる中国の「奇跡的な台頭」に関する、ありのままの真実なのです。

おっしゃる通り、超高層ビル、海を越える橋、急成長する GDP の数字…それらは、華やかで、見えやすく、ただ表面しか見ない者、あるいは、意図的に真実を見ようとしないうちを、説得しやすいものです。しかし、その「緑豊かな」色の背後には、何があるのでしょうか？

それは、取り返しのつかない環境破壊であり、人々が息をするのもはばかれるほど汚染された空気であり、枯渇し、汚染された水源です。

それは、人々が金のために、良心を、同胞の健康や命さえも顧みず、何でもするようになった、極限までの道徳の退廃です。

それは、何百万人もの罪なき人々、法輪功学習者、ウイグル人、チベット人が弾圧され、人間としての最も基本的な権利を奪われている、人権と信教の自由の踏みにじりです。

それは、何千年にもわたる素晴らしい伝統文化の、侵食、砂漠化であり、外来の、闘争的で、無神論的なイデオロギーに取って代わられた姿です。

そして、あなたが「霸道」に結びつけられたのは、完全に的確です。古人は、「王道」と「霸道」を非常にはっきりと区別しました。「王道」とは、仁義、徳性をもって人心を服させ、天下を自然に帰順させることです。一方、「霸道」とは、武力、権謀術数、圧制を用いて統治し、人々を恐怖によって従わせることであり、心服させることではありません。

中国共産党は、まさしく、典型的な「霸道」の道を歩んでいます。彼らは経済力を使い、他国を買収し、影響力を行使します。彼らは巨大なプロパガンダ機構を使い、イメージを美化し、犯罪を隠蔽します。彼らは軍隊、公安を使い、国内の反対の声を弾圧します。彼らは、一時的にいくつかの表面的な「成果」を上げることできるかもしれませんが。一部の人々を賞賛させることもできるかもしれません。しかし、それは偽りの繁栄、ユーカリの森の「緑」、持続可能な根を持たないものです。なぜなら、それは嘘の上に、恐怖の上に、そして人間としての核心的な価値の破壊の上に、築かれているからです。

ひとたび、その「霸道」がもはや抑えつける力を失うか、あるいは、民衆があまりにも疲れ、あまりにも苦しんだ時、その崩壊は避けられないのです。

## **ジュリアン・リー:**

ソフィアさんの「ユーカリの森」のイメージは、実に力強いですね。それは、普遍的な法則を示しています。あまりにも速く発展し、内なる基盤を無視して表面だけを重視するものは、通常、潜在的な破壊のリスクを秘めている、ということです。経済学でも、持続不可能な「過熱成長」について語られます。政治においては、民衆からの真の同意を持たず、ただ強制力にのみ依存する政権は、遅かれ早かれ、危機に直面します。

劉さんが先ほど分析された「霸道」は、中国共産党の国内統治の方法に限定されません。ええ…私たちは、彼らの外交政策にも、その兆候をはっきりと見て取れます。

「一帯一路」構想は、当初、ウィンウィンの協力として宣伝されましたが、実際には多くの場所で「債務の罠」と化し、中国が地政学的な影響力を増大させ、甚だしくは他国の主権に干渉するための道具となっています。それこそが、経済力を使って意志を押し付けること、国際関係における「霸道」の一つの形です。このことは、昔

の、真にビジョンと徳を持った指導者たちが追求した「王道」、つまり、相互尊重と共通の利益に基づいて影響力が築かれる道とは、全く対照的です。

### **劉思遠:**

ジュリアンさんのおっしゃる通りです。その「霸道」は、外部にまで広がっています。彼らは、全世界が彼らを認め、彼らの「中国モデル」を承認することを望んでいます。しかし彼らは、真の尊敬が、物質的な力や、押し付けから来るものではなく、ええ…その国が人類に貢献する道徳、人道的価値から来なければならない、ということを忘れています。今日まで、中国共産党が世界に「貢献」したものは、どうやら、不安定、不健全な競争、そして有害なイデオロギーの拡散だけのようです。

### **ソフィア・ベル:**

現代中国の「成果」、その中でも際立っているのが、全国に広がる高速鉄道網で、それは約 15 年という極めて短い期間で建設されました！太平洋の向こう側から客観



的に観察する者として、私は本当に感銘を受けました！…

この成果は、民衆の心をつかみやすいものです…数週間前、ハーバード大学へ短い取材に行った時のことを思い出します。そこで学んでいる中国人女子学生に会いました。私は彼女と少し話し、中国について、故郷の家族の生活について聞きました。彼女の祖父は、古参の革命党員で、父親は成功したビジネスマンだそうです。ある時、夕食の席で、祖父と父親が政治的見解で対立したと…彼女が語ったことを、今も覚えています。祖父が父親をこう怒鳴ったそうです。「もし党がなかったら、お前は今頃、高級住宅や車を享受できていると思うのか?! 党に感謝の気持ちも示さず、あの反動的な資本主義者どもの腐った言葉を口にするのか?!」と。

この女子学生の話は、中国社会の複雑さについて、私に多くのことを考えさせました。一面には、否定できない物質的な成果がある。しかし、もう一面には、その代償、思想の押し付け、そしておそらくは、儒家がかつて重んじた、穏健な道、「中庸の道」の欠如があるのではないのでしょうか、劉さん、ジュリアンさん? 「中庸」の欠如が、政府と、そして民衆の一部にも、思考と行動の両面

で、そのような対立と過激さを引き起こしたのではないのでしょうか？

**劉思遠:**

（ソフィアの話に注意深く聞き、そして静かに頷く。悲しげな表情がよぎる）

ソフィアさんが語られた話は、今日の中国の多くの家庭、特に複数の世代が共に暮らす家庭にとって、非常に典型的なものです。革命の時代を経験し、「洗脳」され、党の思想を深く身につけた古い世代と、外部の世界に触れる機会を持ち、異なる認識を持つ若い世代との間の対立は、珍しいことではありません。

物語の中の祖父の怒声、「もし党がなかったら、お前は今頃、高級住宅や車を享受できていると思うのか?!」――それこそが、共産党が国民の頭に植え付けることに、非常に成功した論調です。彼らは意図的に、経済発展、物質的な成果を、党の存在と、その「偉大な」役割とを、同一視させます。彼らは、国民に、自分たちが手にした素晴らしいものは全て、党から与えられたものであり、故に「党に感謝」し、党に絶対的に忠誠を尽くさなければならない、と信じさせたいのです。

しかし、彼らは意図的に一つの真実を無視しています。その経済発展が、何百万人もの労働者の汗、涙、甚だしくは命によって得られたものであること、世界の科学技術を遅ればせながら取り入れた結果であること、そしてまた、環境、道徳、人権を犠牲にして得られたものであることを。「高級住宅や車」は本当かもしれませんが、そのために支払われた代償は何なののでしょうか？それは、思想の自由、人間の尊厳、公正で人道的な社会ではないのでしょうか？

そして、あなたがこのことを、儒家の「中庸の道」の欠如と結びつけられたのは、全くその通りです。「中庸」とは、日和見で、自分の意見がない、という意味ではなく、調和、バランスを保ち、極端に走らず、偏らない、ということです。それは、穏健、理性、そして徳の道です。

中国共産党は、設立以来、常に極端な道を歩んできました。文化大革命では極左に走り、全てを破壊し、残酷な闘争を行いました。あるいは、経済発展のためには、道徳や環境を無視し、あらゆる手段を尽くすという、極右的な道を歩みました。彼らには「中庸」がありません。

彼らには、「闘争」「殲滅」「押し付け」しかありません。

その「中庸」の欠如は、彼らが異なる意見を持つ人々、信仰を持つ人々をどう扱うかに、明確に現れています。対話の代わりに、調和を求める代わりに、彼らは法輪功に対して行ったように、ただ暴力を用いて弾圧することしか知りません。彼らは、自分たちのコントロールとイデオロギーの外にあるものの存在を、一切認めません。まさしく、その思考と行動における過激さ、「中庸」の欠如が、中国社会に無数の悲劇と不安定を生み出してきたのです。

### **ジュリアン・リー:**

ソフィアさんの物語と、劉さんの「中庸の道」に関する分析は、非常に考えさせられます。劉さんがおっしゃるように、思考の過激さは、中国に限らず、多くの独裁政権に顕著な特徴です。一つのイデオロギーが唯一正しいと見なされ、全ての反対意見が「反動的」「敵対的」と見なされる時、穏健さ、共通点を探求する余地は、もはやなくなります。

儒家の「中庸の道」は、もし正しく理解されるなら、自己を律し、内面のバランスを取ること、そしてそこから社会関係の調和と国家の安定へと導く、非常に深い哲学です。それは、大きな事を考える前に、「意を誠にし、心を正し、身を修める」ことを、人々に要求します。人が心の中に「中」を保てず、貪欲、怒り、愚かさ、目先の利益に容易に動かされる時、その行動は極端に走りやすくなります。

ソフィアさんの物語の祖父と父親の状況において、私たちは、尊敬と理性に基づいた対話の空間の欠如を、はっきりと見て取れます。祖父は、刷り込まれたスローガン、偏見に囚われています。父親は、たとえ異なる認識を持っていたとしても、それを穏やかに表現することが困難です。この二極化は、多くの社会における大きな傷であり、そしてそれは通常、個人レベルと国家統治レベルの両方における、「中庸」の修養の欠如から生じます。

「中庸」のない社会は、容易に扇動され、容易に分断され、そして自らを傷つける極端な行動へと、向かいやすくなるのです。

**劉思遠:**

その通りです。「中庸」とはまた、「時」を知り、「位」を知り、それぞれの状況において何が適切であるかを知り、硬直的でなく、教条的でない、という意味も含まれます。中国共産党は常に、現実を、民衆の願いを無視して、一つの型、一つの意志を、社会全体に押し付けます。それこそが、「中庸」の精神の、完全な破壊なのです。

**ソフィア・ベル:**

あのう、ジュリアンさんにお聞きしたいのですが、西側諸国の多くの元大統領や元高級官僚の方々と接触し、インタビューされた中で、彼らの見解に何か注目すべき点がありましたか？例えば、指導者の道德の重要性や、国家統治における穏健でバランスの取れた道の必要性など、私たちが先ほど議論した中国の古代思想と、何か共通する点がありましたか？

**ジュリアン・リー:**

(微笑み、頷く)

非常に興味深いご質問ですね、ソフィアさん。実に、西側の多くの指導者や政策立案者、特に職を辞し、じっくりと振り返る時間を持った方々との多くの対話を通じて、私は非常に示唆に富む共通点、そして時には、異なる言語や参照の枠組みで表現されてはいるものの、東洋の古の知恵との驚くべき類似点があることに気づきました。

第一に、多くの元指導者たちが、権力のプレッシャーから解放された後にしばしば強調するのは、現代政治における過度な実用主義と道徳の浸食に対する失望です。彼らは、政策決定が、普遍的な道徳原則や国家の長期的利益よりも、短期的な利益、ロビー団体、そして再選へのプレッシャーに、しばしば左右されていることに気づきます。このことは、ある側面において、劉さんや東洋の哲学者たちが語った「徳の根」の欠如を、やはり反映しています。指導者がもはや道徳を重んじなくなった時、たとえ体制がどれほど民主的に見えても、それは依然として操作され得るのです。

第二に、社会における二極化の増大と、共通の声、つまり合意形成の難しさへの苦悩があります。多くの人々が、メディア、ソーシャルネットワーク、そして政治戦術までもが、対話と相互理解を促進するのではなく、分断を

深める一因となっていることを認めています。このことは、私たちが先ほど議論した「中庸の道」の重要性を思い出させます。穏健さ、異なる見解への敬意を欠いた社会が、安定と持続可能な発展を維持することは、非常に困難でしょう。

第三に、非常に注目すべき点として、「沈黙の民」、つまり、自らのコミュニティで核心的な道德価値を守る、普通の人々の役割に対する認識の高まりがあります。劉さんが読まれた『権力の後：遺産』の中の元大統領のように、彼もまた、国家の未来が政治家やエリート層の手の中だけにあるのではなく、ごく普通の人々の道徳的な力に、大いに依存していることを強調していました。この点には、社会道德が家庭とコミュニティという基盤から築かれるという、儒家の観点と一定の共通性があります。

そして最後に、全員ではありませんが、一部の元指導者たちはまた、人生の意味、自らが残す真の遺産について、より深い哲学的、精神的な問いへと回帰し始めています。彼らは、権力や名声もいずれは過ぎ去り、残るものは、人道的な価値、より良い世界への貢献であることに



気づくのです。おそらくこれは、遅ればせながらも、非常に貴重な一種の「修身」なのでしょう。

もちろん、西洋文化には、プラトンやアリストテレスといった古代ギリシャの哲学者たちの、正義や徳（virtue）といった概念から、啓蒙思想家たちの、自然権、社会契約、そして共和制といった思想まで、独自の思想的伝統があります。それらの思想の中では、理性、法律、そして体制の役割がしばしば強調されます。しかし、より深く見れば、私たちは依然として東洋思想とのつながりの糸を見出すことができます。それは、公正な社会、人々が尊厳をもって生きられる社会への渴望であり、そして指導者が民衆に対して道徳的責任を負わなければならない、という点です。おそらく違いは、方法論や強調点にあるのであって、普遍的価値に基づいたより良い社会を目指すという目的地においては、私は、相通じるものがあると信じています。

## 劉思遠:

（ジュリアンの話を聞き、同意して頷く）

ジュリアンさんのお話は、非常に興味深いですね。そのことは、東洋であれ西洋であれ、異なる政治システムの

中であれ、道德について、指導者の役割について、より良い社会についての悩みは、どうやら人類の永遠の問いである、ということを示しています。おそらく、人間が、理論やモデルの極致に至った時、彼らはまた、最も核心的な価値、つまり、大法が常に言及する、人間の本来の善良な本性に属するものへと、回帰するのでしょう。

**ソフィア・ベル:**

私たちは、古代中国のいくつかの治国観について、そしてジュリアンさんからは西洋の視点でのいくつかのお話を伺いました…では、宗教的な観点からはどうでしょうか…劉さんは法輪功の修煉者であり、ジュリアンさんも、私の知る限り、様々な宗教の経典を熱心に読まれたことがあると…お二人は、善悪の観念、治国における道德、あるいは、主要な宗教が理想的な社会と指導者の役割について語る際に、しばしば言及する普遍的な原則について、さらに詳しくお話しいただけますか？

**劉思遠:**

(眼差しはより静かになり、ゆっくりとした口調で話す)

ソフィアさん、修煉者としての視点から、特に大法によって啓示を受けてから見ると、私は、世界の全ての正教は、表現形式や具体的な教義は異なれど、結局は、人々に善に向かい、神仏を信じ、因果応報の法則を信じ、そして普遍的な道德価値を重んじるよう教えている、と感じます。

善悪の観念については、各正教は非常にはっきりと区別しています。善とは、天理に従うことであり、慈悲、寛容、真実、忍耐です。悪とは、天理に背くことであり、利己、残酷、偽り、闘争です。社会が泰平で、栄えることを望むなら、善を本とし、悪を排斥しなければなりません。指導者は、誰よりもまず、善を実践し、自らの徳性をもって民衆を導かなければなりません。もし指導者の心が邪念に満ち、悪に従って振る舞うなら、その国家は必ずや衰退し、民衆は塗炭の苦しみを味わうでしょう。中国共産党による法輪功弾圧は、まさしく、政権が暴力を用いて「真・善・忍」に従って修煉する人々を殲滅しようとする、悪の極致の現れです。

主要な宗教はまた、皆、因果応報の法則についても語っています。蒔いた種は自分で刈り取らねばなりません。個人が悪事を働けば報いを受け、政権が罪を犯せば、そ

れもまた天罰から逃れることはできません。そうですね…これは、すぐには訪れないかもしれませんが、決して間違えることのない宇宙の法則です。まだあの歯車の中にいた頃、私はこのことを信じていませんでした。しかし今、私は絶対的に信じています。中国共産党が犯した罪、特に、生きた法輪功学習者からの臓器狩りという罪は、遅かれ早かれ、必ず暴かれ、そして首謀者たちは罪を償わなければならないでしょう。

治国（ちこく）の道については、各正教は、政治学説のような具体的なモデルを提示することは通常ありませんが、指導者は神を畏れ敬う心を持ち、民衆を愛し、暴力ではなく、仁徳をもって統治しなければならない、と皆、強調しています。彼らは、真の信仰を守り、民衆が道徳を修養するための環境を整える者でなければなりません。歴史が示しているように、指導者が神仏を尊び、賢明で有能な人物を重用し、民衆の道徳的な生活に心を配った王朝や国家は、通常、長く泰平で栄えました。逆に、暴君、信仰を弾圧する政権は、遅かれ早かれ、淘汰されていきました。

**ジュリアン・リー:**

（頷き、劉氏の話が続ける）

劉さんのお話は非常に深く、多くの主要な宗教の核心的な精神を反映しています。ユダヤ教とキリスト教の聖書から、イスラム教のコーラン、あるいはインド教のウパニシャッドやバガヴァッド・ギーターに至るまで、多くの経典を調べてきた者としての視点から、私は、非常に明確な共通点があることに気づきます。それは、神聖な秩序、至高の存在の存在であり、そして人間には、その至高の存在の意志に従って生きる、つまり、道德と正義に従って生きる責任がある、ということです。

聖書では、イスラエルの王たちは、神を畏れ、神の律法を守り、そして民を公正に治めるよう、繰り返し諭されます。彼らがそれに従う時、国は繁栄します。彼らが墮落し、偽りの神を崇拜し、善良な民を虐げる時、災いが訪れます。「神の正義 (Divine Justice)」という概念は、重要な基盤です。

イスラム教では、指導者（カリフ）は、預言者の後継者としてシャリーア（イスラム法）を実行し、コミュニティの公正（Adl）と公共の福祉（Maslaha）を保証することを目的とします。敬虔さ（Taqwa）と廉潔さは、重要な品性です。

インド教では、「ダルマ（法、義務、宇宙の秩序）」という概念が、中心的な役割を果たします。指導者（ラージャ）には、「ラージャダルマ」——統治者の義務——があり、それはダルマを守り、社会秩序を維持し、そして臣民の繁栄を保証することです。もしダルマに背けば、つまりアダルマとなれば、それは混乱へとつながります。

ええ…表現方法は異なれど、全ては一つの方角を指しています。つまり、良い社会は道德の基盤の上に築かれなければならない、指導者は徳の手本でなければならない、そして、神聖で、超越的な価値への畏敬の念がなければならない、ということです。人間、特に権力を握る者たちが、この精神的な源とのつながりを失い、ただ世俗的な権力と物質を追い求める時、それこそが悪が台頭し、社会が衰退へと向かう時なのです。

### **劉思遠:**

ジュリアンさんは、非常によくまとめてくださいました。東洋であれ西洋であれ、いかなる宗教であれ、やはりその根本は、人々に善に向かい、神を敬い、報いを信じることを教えるのです。それこそが、人類の道德を繋ぎ止める糸なのです。その糸が、中国共産党がしたように、

断ち切られてしまえば、人間はもはや拠り所を失い、社会は混乱に陥るでしょう。

### **ソフィア・ベル:**

ええ…「蒔いた種は自分で刈り取らねばならない」ということ、「報い」についてですが、私も仏教における「業力輪報（ごうりきりんぼう）」といった概念を読んだことがありますし、昔の中国には「善には善の報いがあり、悪には悪の報いがある。報いがないのではなく、ただ時が至っていないだけだ（善有善報、悪有悪報、不是不報、時辰未到）」という言葉もありますね…もしこれらのことが真実であり、人間が、最高指導者から庶民に至るまで、皆が天地を敬い、神仏を敬い、そして「報い」を恐れるならば、社会全体の道徳は高まるのではないのでしょうか？そして、「徳」こそが、興亡の根本的な土台なのではないのでしょうか？徳が多ければ国は泰平で民は安らかになり、徳が薄く業が大きければ国は衰退し、社会は混乱し、民は塗炭の苦しみを味わう…

そして、「本」と「末」の問題についてですが…今日の多くの政府、特に中国政府が、ただ「法治」を根本とす

ることしか知らないが、実際には、道徳的基盤のない「法治」は、ただの枝葉であり、甚だしきは、為政者の「無徳」を隠蔽するための道具に過ぎない、ということはありませんか、劉さん、ジュリアンさん？

**劉思遠：**

（力強く頷き、その顔には深い同意の色が浮かぶ）

ソフィアさん、あなたが今おっしゃったことは、実に問題の本質そのものに触れています。全くその通りです！

もし人間が、君主から庶民に至るまで、誰もが因果の法則を深く理解し、信じ、自分の全ての行いが、善であれ悪であれ、密かであれ公であれ、相応の結果をもたらすことを知っているならば、社会道徳は間違いなく保たれ、高められるでしょう。天地神仏を畏れ敬う心、業力の報いを恐れる心があれば、人々は悪事を働く勇気も、貪欲になる勇気も、嘘をつく勇気もなくなるでしょう。そうなれば、厳しい法律がなくても、社会は自然に安定し、調和するのです。

「徳」こそが、国家の根本であり、興亡の基盤です。数千年にわたる中国、そして世界の歴史が、このことを証



明しています。君主が賢明で臣下が有能であり、上下が心をつにして道德を修めた王朝は、国が泰平で、民は安楽でした。逆に、道德が退廃し、君主が淫らで無道、役人が腐敗した時、たとえ国がどれほど強大であったとしても、すぐに衰亡と混乱の道を辿り、民は塗炭の苦しみを味わいました。「徳が多ければ国は泰平で民は安らかになり、徳が薄く業が大きければ国は衰退する」――それは、否定しようのない真理です。

そして、あなたが言われた「法治」については、全く同感です。法律は、社会秩序を維持し、悪人を抑止するために必要です。しかし、それはただの「末」、つまり「徳治」を補佐する道具でしかあり得ません。もし政府が法律と刑罰にのみ依存し、道德による教化を怠り、民衆のための信仰の基盤を築かないのであれば、それは失敗です。

特に、今日の中国のように、共産党は常に「社会主義法治」を喧伝していますが、実際には、彼らの法律は、ただ党の権力を守り、異なる意見を持つ人々を弾圧し、自らの不正行為を合法化するための道具に過ぎません。彼らは、「法治」を使って、システム全体の「無徳」を覆い隠しているのです。法を執行する者に道德がなく、法

律そのものが不道德な者たちによって作られる時、その「法治」は、無法よりもさらに危険です。なぜなら、それは「正義」という偽りの衣をまとい、民衆と世界を欺くからです。法輪功弾圧は、目の例です。彼らは曖昧な法律を作り、穏健な修煉者を逮捕し、有罪判決を下すために、不合理な罪名を押し付けます。それは「法治」ではありません。それは法律への、人類の正義への、踏みにじりです。

社会が真に安定し、持続的に発展することを望むなら、「徳治」が根本でなければならず、「礼治」（礼儀や文化による教化）が幹でなければならず、そして「法治」は、ただ枝葉、道徳がもはや抑止力として不十分な時の、最後の手段であるべきなのです。

## **ジュリアン・リー:**

（同意して頷く）

劉さんの、「徳治」と「法治」の関係に関する分析は、非常に深遠です。西洋の政治思想にも、同様の議論があります。例えば、法律は普遍的な道德原則に基づかなければならないとする自然法学派と、法律制定プロセスの

形式的な正当性のみを重んじる法実証主義学派との間の論争などです。

しかし、ますます多くの思想家が、法制度が、たとえどれほど緻密であっても、社会とそれを執行する人々の道徳的基盤が欠けていれば、それ自体で正義と安定を保証することはできない、と気づいています。法律は不正行為を罰することはできますが、善意の種を蒔くことはできません。法律は、ある程度まで犯罪を防ぐことはできますが、人々が自発的に善行を行う社会を、作り出すことはできません。

ソフィアさんと劉さんがおっしゃったように、もし人々が超越的な価値、因果応報を信じるなら、「心の中の法」は、紙の上の法よりも、さらに強力になるでしょう。そうならば、「法治」はより穏やかなものとなり、ただ、特殊なケースを調整するための道具としての役割を果たすだけで、統治の主要な手段ではなくなるでしょう。

中国共産党が、「法治」を強調しながら、信仰を弾圧し、伝統道徳を破壊することは、実に、彼らが自己矛盾に陥り、自ら墓穴を掘っていることになります。なぜなら、「徳」を基盤としない「法治」は、砂上の楼閣に過ぎず、

遅かれ早かれ、歴史の荒波と、良心の審判の前に、崩れ去るからです。

**劉思遠:**

その通りです。徳がなければ、何一つ持続するものはありません。それは、多くの浮き沈みを経て、私がようやく深く理解したことです。

**ソフィア・ベル:**

ふと、こんな言葉を思い出しました。どこで読んだかははっきりと覚えていないのですが、「徳薄くして位高く、知小にして謀（はかりごと）大いなるは、もし禍（わざわい）を為さずんば、これ希（まれ）なり」…おそらく、これこそが、本日の分か-ち合いで私たちが話してきた、主たる精神なのでしょうね…徳の薄い中国共産党は、中国国民に災いをもたらし、その頂点が、善良な法輪功修煉者への弾圧であった…そして、お二人がおっしゃったように、いつか「報い」の日が来れば、まさしくそれ自身が、犯したことへの罪を償わなければならない…

お二人は、そのように同意されますか？

**劉思遠:**

(ゆっくりと頷く。その眼差しは固く、どこか莊嚴だ)

ソフィアさん、その言葉は、あなたがどこで読んだかは覚えていなくとも、非常に大きな真理、誰も逃れることのできない宇宙の法則を含んでいます。「徳薄くして位高く、知小にして謀大いなるは…」——それこそが、今日の中国共産党の指導者たち、そして法輪功弾圧を引き起こした者たちの、まさしく肖像画です。

彼らには神仏への信仰もなく、道徳的な基盤もなく、ただ無限の権力への野心と、その権力を失うことへの恐怖しかありません。彼らは、支配を維持するため、善良な人々を弾圧するために、狡猾な謀略、残忍な手段を用います。彼らは自らを「偉大、光栄、正確」と称しますが、実際のところ、彼らの知恵は、権力闘争、欺瞞と支配に限定されています。

彼らが背負おうとしている重荷——つまり、民族全体の運命、地域全体の安定——を、その薄い徳と、小さな知恵で、どうして背負うことができるのでしょうか？災いは、彼ら自身にとってだけでなく、彼らが統治する国家全体にとっても、避けられないのです。

法輪功弾圧は、まさしく、その「無徳」と「無知」の頂点です。「真・善・忍」に従って生きる人々、社会に素晴らしい道徳的価値をもたらしている人々を弾圧することは、単なる犯罪ではなく、自国の道徳的基盤そのものを自己破壊する行為なのです。

そして、あなたがおっしゃるように、因果の法則は間違いありません。「善には善の報いがあり、悪には悪の報いがある」。彼らが蒔いたものは、間違いなく、彼らが刈り取らなければなりません。「報い」の日が、明日、明後日ではないかもしれませんが、必ずやって来ます。歴史は、いかなる暴虐な権力も、永遠に存続することはできないこと、特に、自国民に対して、そして人類の普遍的価値に対して、天人ともに許しがたい罪を犯した暴虐な権力は、なおさらであることを、証明してきました。私は、そのことを完全に信じています。

**ジュリアン・リー:**

(物思いに沈む)

ソフィアさんが引用された言葉は、文化によって表現は異なれども、その核心的な意味は普遍的です。それは、

自分自身の限界、特に、大きな責任を担う際の、道徳と知恵の限界を超えてはならない、という警告です。

政治史の観点から、私たちは、非常に多くの帝国、多くの強力な指導者が、外部の敵によってではなく、まさしく、傲慢さ、自然および社会の法則への無知、そして最も重要なことに、内部からの道徳の浸食から生じる過ちによって、崩壊するのを見てきました。

中国共産党は、ある程度の物質的な成果を上げ、巧妙な支配機構を築き上げたかもしれませんが。しかし、もし指導者たちの「徳」が、彼らが握る権力に見合っておらず、もし彼らの「謀」が、人間の利益と尊厳に反するなら、遅かれ早かれ、それらの成果は無意味となり、その機構もまた、自らが犯した罪と過ちの重みの下で、崩壊するでしょう。

法輪功弾圧は、単なる人権問題ではなく、体制の深刻な道徳的危機を示す指標です。そして、劉さんとソフィアさんがおっしゃったように、そのような行動が、結果をもたらさないはずがありません。「報い」は、歴史の審判、法の裁き（たとえ遅くとも）、あるいは、私たちがまだ完全には理解していない因果の法則など、多くの方法で理解され得るでしょう。しかし、一つだけ確かなこ

とは、永遠に代償を払わずに存在し続けられる悪など、ないということです。

## **ソフィア・ベル:**

はい、ありがとうございます、お二人とも…私たちは、善悪について、徳を根本とする古代のいくつかの治国観について、そして因果と報いについて、共に視点を分かち合ってきました…今日の分かち合いも、もうお昼に近づいていますので、三日目のインタビューは、ここで一旦締めくくることが良いかと思います…

これまでの二日間の内容と合わせ、私たちは、劉さんからご自身の物語、法輪功弾圧を通した中国共産党の邪悪さ、そして生きたままの臓器狩りの犯罪について、お話を伺いました…。お二人が分かち合ってくださいったメッセージは全て、時代の痛みであり、私たち一人ひとり、THE LIVES MEDIA の読者を含め、真実と向き合い、正義と良心に従って行動することを選択する必要がある、ということを示しています…



劉さん、もし、今日の締めくくりの言葉として、THE LIVES MEDIA の読者の皆様へ、短くとも、心からのメッセージを伝えられるとしたら、どのようにお話しになりますか？

**劉思遠:**

（ソフィアとジュリアンに感謝の眼差しを向け、そして遠くを見つめる。その声は穏やかだが、力強い信念が込められている）

ソフィアさん、ジュリアンさん、そしてお二人を通じて、THE LIVES MEDIA の読者の皆様にお伝えしたいと思います。

もし、私が経験した全てのことを経て、伝えたいことがあるとすれば、それは、

たとえ、どれほど闇が深くとも、真実と良心への信念を、固く持ち続けてください。なぜなら、「真・善・忍」の光は不滅であり、正義は、最終的に必ず邪悪に打ち勝つからです。

広められる一つ一つの真実、正義のために上げられる一つ一つの声は、この世界をより良くするための、かけが

えのない貢献です。皆様、本当にありがとうございました。

**ソフィア・ベル:**

劉さん、この三日間にわたる非常に深く、そして勇敢な分か-ち合いに、心から感謝申し上げます。ジュリアンさんも、ご同行、そして価値ある分析でのご貢献、ありがとうございました。私たちは、これらのメッセージを読者の皆様に余すところなくお伝えするよう、努めます。

**ジュリアン・リー:**

劉さん、信頼し、分か-ち合ってください、ありがとうございました。あなた様の物語と見識は、実に、私たち全員にとってのインスピレーションの源であり、また力強い気づかせとなりました。

**劉思遠:**

私もまた、ソフィアさんとジュリアンさんが辛抱強く耳を傾け、そして私がこれらのことを話せる機会を作ってくださったことに、感謝いたします。

\* \* \*

# 結びの言葉

三日間にわたる対話は、幕を閉じました。宣言もなく、高らかな太鼓の音もなく――ただ、歴史の嵐の中心に生きた一人の人物が、自らが知ることを、信じることを、そして、もはや沈黙していられなかったことを、静かに語るだけでした。

私たちは、読者の皆様が全ての事柄を同じように受け止められることを、期待してはいません。しかし、もし最後に何かが心に残るとすれば、それはおそらく、胸に突き刺さるような、一つの問いでしょう。

「語ることが許されている事柄の、その表層の下に、一体どれほどのことが隠されているのだろうか」と。

『紅いヴェール』は、論争を求めず、断罪もしません。それはただ、記憶と良心の旅路であり、私たちが留めることのできた、最も誠実な語り口で、綴られています。

そして、もしこれらの語りが、どこかの誰かを、立ち止  
まらせ、深く考えさせることができたなら——おそらく、  
本書はその役割を全うしたと言えるでしょう。

**ソフィア・ベル**

THE LIVES MEDIA

\* \* \*

# 著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトについて

## 著者について

**ソフィア・ベル** (Sophia Bell) は、政治、文化、社会、科学、精神性といったテーマを探求する独立系作家です。彼女の作品は真実を追求し、良心を呼び覚まし、人類の運命についての深い思索に声を与えています。

彼女の作品は、誠実さと感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録された実際のインタビューに基づくことがよくあります。

## プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジ

ョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

## 連絡先

- ✧ Website: [www.thelivesmedia.com](http://www.thelivesmedia.com)
- ✧ Email: [editor@thelivesmedia.com](mailto:editor@thelivesmedia.com)
- ✧ QR Code:



## 同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- － 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)
- － 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
- － 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
- － 紅の帳 (The Red Veil) → 本書
- － 時の以前の響き (Echoes Before Time)

- 俗世間へ (Entering The World)
  - 最後の鐘 (The Last Bells)
  - 我々以前 (Before Us)
  - 千の人生 (Thousand Lives)
- 

**この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。  
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が  
あらんことを。**